



Japan Foundation for
Regional Art-Activities

平成26年度
公共ホール音楽活性化事業
報告書
CONCERT&ACTIVITY

一般財団法人地域創造

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、財政支援、研修・交流、情報提供、調査研究などの事業を実施しております。

これらの事業の一環として、地域創造では平成10年度から「公共ホール音楽活性化事業」を実施しております。

この事業は、全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施するものです。地域創造では、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

この報告書は、全国13の団体との共催により実施された平成26年度「公共ホール音楽活性化事業」の各地の取り組みを取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当された方の事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しております。また、各団体に派遣されたコーディネーターのレポートを掲載し、事業に関係して気付いた点や企画・制作のノウハウや事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点をケーススタディとして記録するように努めました。あわせて、平成25年度から26年度にかけて島根県で実施された「公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業」及び平成26年度に堺市で実施された「公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業」についてもとりまとめています。

この報告書が公共ホールで自主事業に取り組む方の参考となり、企画・運営のお役に立てば幸いです。

終わりに、各公演を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、一般社団法人日本クラシック音楽事業協会、その他多くの関係者の皆様方のご協力のもと、平成26年度の事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

第1部 平成26年度公共ホール音楽活性化事業の概要

実施概要	2
登録アーティスト／コーディネーター	3
実施団体	4
全体研修会概要	5

第2部 平成26年度公共ホール音楽活性化事業 事例紹介・アシスタントレポート

由利本荘市 (秋田県)	8
つくば市 (茨城県)	13
坂井市 (福井県)	17
揖斐川町 (岐阜県)	21
安城市 (愛知県)	26
米原市 (滋賀県)	31
大阪狭山市 (大阪府)	38
有田川町 (和歌山県)	44
真庭市 (岡山県)	49
和気町 (岡山県)	54
新居浜市 (愛媛県)	60
太宰府市 (福岡県)	64
長島町 (鹿児島県)	69

第3部 平成26年度公共ホール音楽活性化事業 コーディネーターレポート

小澤 櫻作 (チーフコーディネーター)	76
丹羽 徹 (コーディネーター)	78
花田 和加子 (コーディネーター)	80
山本 若子 (コーディネーター)	82
赤木 舞 (コーディネーター)	83
田澤 拓朗 (コーディネーター)	85

第4部 平成25-26年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業

実施概要	88
派遣アーティストプロフィール	94
レポート	
津村 卓 (チーフコーディネーター)	96
内藤 裕敬 (コーディネーター)	97
ヤッシー (コーディネーター)	98
山本 若子 (アシスタントコーディネーター)	100
丹羽 梓 (アシスタントコーディネーター)	101
福間 一 (事業担当者)	102

第5部 平成26年度公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業

実施概要	106
アーティスト研修会	108
アウトリーチセミナー	109
レポート	
谷村 睦・四方 徳子 (事業担当者)	112
児玉 真 (アドバイザー)	113

第1部

平成26年度公共ホール 音楽活性化事業の概要

平成26年度公共ホール音楽活性化事業 実施概要

1 事業趣旨

全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを、公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施する。また、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援する。

2 実施内容

(1) 実施団体 全国13団体

※地方公共団体または指定管理者等。原則として都道府県と政令指定都市及びそれらが関わる指定管理者等は除く。

(2) 研修事業 ①全体研修会

平成26年4月14日(月)～16日(水) / 一般財団法人地域創造、津田ホール
開催地の公共ホール・企画担当者等を対象とした研修を実施。

②個別研修の実施

広報を始める前の段階(公演2、3カ月前)に、担当コーディネーターが現地での事前打ち合わせ等を行い、事業の円滑な実施のための助言を行った。

(3) 公演事業 公演事業の実施(全国13地域) 平成26年9月～平成27年2月

登録アーティストと共演者を数日間の日程で地域に派遣し、開催地の公共ホールとの共催でコンサートおよびアクティビティを実施した。

①コンサート 身近で、親しみのあるクラシック演奏会

②アクティビティ 出前コンサート、レクチャー、ワークショップ等地域との交流を図るプログラム

3 費用負担

一般財団法人地域創造と開催地の地方公共団体との経費区分は下記の通りとした。

(1) 一般財団法人地域創造が負担する主な経費

①演奏家及びコーディネーターの派遣に係る経費

(演奏家の出演料、交通費(現地移動費を除く)、宿泊費、日当、楽器運搬費、保険料(演奏家)、演奏家派遣に関するマネジメント料)

②地域との交流を図るプログラムの実施に係る経費のうち10万円を負担

(2) 開催地の地方公共団体が負担する主な経費

演奏家の派遣に係る経費以外に係る経費(現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など)

4 主催・共催等

主 催：開催地の地方公共団体等

共 催：一般財団法人地域創造

制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

平成26年度登録アーティスト／コーディネーター／実施団体

1 平成26年度・27年度登録アーティスト

金子 三勇士 (ピアノ)	株式会社ジャパン・アーツ
森岡 有裕子 (フルート)	株式会社ミリオンコンサート協会
田村 真寛 (サクソフォン)	株式会社ヤマハミュージックアーティスト
高見 信行 (トランペット)	株式会社プロ アルテ ムジケ
廣田 美穂 (声楽 (ソプラノ))	公益財団法人日本オペラ振興会
中井 亮一 (声楽 (テノール))	公益財団法人日本オペラ振興会
前田 啓太 (打楽器)	株式会社プレルーディオ

2 コーディネーター

小澤 櫻作 (上田市交流文化芸術センター プロデューサー)
丹羽 徹 (一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 理事事務局長)
花田 和加子 (keynote代表、ヴァイオリニスト)
山本 若子 (有限会社N. A. T取締役)
赤木 舞 (昭和音楽大学専任講師)
田澤 拓朗 (上田市交流文化芸術センター 音楽事業企画制作担当)

3 サブコーディネーター

菊地 俊孝 (公益財団法人東松山文化まちづくり公社 総務・文化グループ)
柿塚 拓真 (公益財団法人日本センチュリー交響楽団 コミュニティ／教育プログラム、助成金担当マネージャー)

4 アシスタントスタッフ

丹羽 梓 (横浜市鶴見区民文化センター サルビアホール)
奥田 もも子 (公益財団法人びわ湖ホール 音楽企画アドバイザー)
杉山 幸代 (上野学園大学音楽文化研究センター)
田辺 沙保里 (相模女子大学非常勤講師、お茶の水女子大学大学院表象芸術論領域博士課程在籍)

5 アドバイザー

能祖 将夫 (北九州芸術劇場プロデューサー、桜美林大学准教授)
楠瀬 寿賀子 (津田ホールプロデューサー、公益財団法人せたがや文化財団音楽事業部)
吉本 光宏 (株式会社ニッセイ基礎研究所 研究理事 [社会研究部 芸術文化プロジェクト室長])

6 実施団体

No.	都道府県	市町村	実施団体	開催会場	開催時期	派遣アーティスト	担当コーディネーター
1	秋 田 県	由利本荘市	由利本荘市	文化交流館カダール	12/10~13	田村 真寛	花田 和加子 菊地 俊孝
2	茨 城 県	つくば市	公益財団法人つくば文化振興財団	つくばカピオホール	2/5~7	前田 啓太	小澤 櫻作 杉山 幸代
3	福 井 県	坂 井 市	公益財団法人坂井市文化振興事業団	みくに文化未来館	10/16~18	前田 啓太	赤木 舞 菊地 俊孝
4	岐 阜 県	揖斐川町	揖斐川町教育委員会	谷汲サンサンホール	12/11~13	高見 信行	赤木 舞 奥田 もも子
5	愛 知 県	安 城 市	安城市教育委員会	安城市文化センター	1/22~24	前田 啓太	田澤 拓朗 奥田 もも子
6	滋 賀 県	米 原 市	米原市	米原市民交流プラザ	9/4~6	前田 啓太	山本 若子 丹羽 梓
7	大 阪 府	大阪狭山市	公益財団法人大阪狭山市文化振興事業団	大阪狭山市文化会館 SAYAKA ホール	2/5~7	高見 信行	花田 和加子 田辺 沙保里
8	和歌山県	有田川町	有田川町教育委員会	きびドーム 文化ホール	2/12~14	金子 三勇士	山本 若子 田辺 沙保里
9	岡 山 県	真 庭 市	公益財団法人真庭エスパス文化振興財団	エスパスホール	9/18~20	高見 信行 田村 真寛	小澤 櫻作 柿塚 拓真
10	岡 山 県	和 気 町	和気町教育委員会	学び館「サエスタ」	12/17~18,20	中井 亮一 廣田 美穂	丹羽 徹 丹羽 梓
11	愛 媛 県	新居浜市	新居浜市	新居浜市市民文化センター	11/20~22	高見 信行	丹羽 徹 柿塚 拓真
12	福 岡 県	太宰府市	太宰府市	プラム・カルコア太宰府	1/15~17	森岡 有裕子	小澤 櫻作 奥田 もも子
13	鹿児島県	長 島 町	長島町教育委員会	長島町文化ホール	12/11~13	森岡 有裕子	山本 若子 杉山 幸代

平成26年度公共ホール音楽活性化事業 全体研修会実施概要

1 概要

平成26年度の実施団体担当者を対象として、当事業の基本的な考え方、過去の事例紹介などのゼミを開催した。2日目には登録アーティストによる演奏とトークのプレゼンテーションと交流会を実施し、最終日はグループに別れて企画検討会議及び発表を行った。

2 参加者

平成26年度事業実施団体 担当者

3 日程

平成26年4月14日（月）～16日（水）（3日間）

4 会場

4月14日（月）・16日（水）：一般財団法人地域創造 会議室

4月15日（火）：津田ホール

5 実施団体研修スケジュール

4月14日（月）

時間	会場：地域創造 会議室
13:00～13:10	オリエンテーション
13:10～13:40 (30分)	おんかつを知る Vol.1～基礎編～ 小澤 櫻作（チーフコーディネーター）
13:40～14:10 (30分)	おんかつを知る Vol.2～実務編～ 地域創造
休憩（15分）	
14:25～16:25 (120分)	ワークショップ セレノグラフィカ（隅地茉歩、阿比留修一）
休憩（15分）	
16:40～19:00 (140分)	おんかつを知る Vol.3～事例紹介編～ I部：福井市事例（45分） 田澤 拓朗（コーディネーター）、小川 隆一（事業担当者） II部：演奏家事例（45分） 花田 和加子（コーディネーター）、北島佳奈（H24・25年度登録アーティスト） <休憩（5分）> III部：事業担当者の役割とは（45分） 菊地 俊孝（サブコーディネーター）

4月15日(火)

時 間	会場：津田ホール（渋谷区千駄ヶ谷）
10:00～11:30 (90分)	おんかつから始まるホールと地域の未来 吉本 光宏（アドバイザー）
昼食休憩（60分）	
12:30～14:20 (90分)	フィードバック～これまでのゼミを振り返って～ コーディネーター全員
14:20～14:30 (10分)	プレゼンテーションの聴き方 コーディネーター全員
休憩・移動（30分）	
15:00～18:35	H26・27年度登録アーティスト公開プレゼンテーション 前田 啓太（打楽器） 森岡 有裕子（フルート） 高見 信行（トランペット） ＜休憩（20分）＞ 中井 亮一（声楽（テノール）） 田村 真寛（サクソフォン） ＜休憩（20分）＞ 金子 三勇士（ピアノ） 廣田 美穂（声楽（ソプラノ））
休憩・移動（25分）	
19:00～21:00	交流会 参加者、H26・27年度登録アーティスト、コーディネーター

4月16日(水)

時 間	会場：地域創造 会議室
10:00～12:00 (120分)	フィードバックとグループ別企画検討 コーディネーター全員
昼食休憩（60分）	
13:00～15:00 (120分)	企画発表 コーディネーター全員
15:00～15:15 (15分)	事務連絡、閉講式

第2部
平成26年度公共ホール
音楽活性化事業
事例紹介・アシスタント
レポート

実施団体：由利本荘市

実施時期：平成26年12月10日（水）～平成26年12月13日（土）

出演アーティスト：田村 真寛（サクソフォン） 大野 真由子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：田村真寛 夢のコラボレーション① 由利高等学校吹奏楽部

期 日：平成26年12月10日（水） 16：00～18：00

会 場：由利高等学校 音楽室

参加者：由利高等学校吹奏楽部員 34人

田村氏の演奏を鑑賞後、「アリオートと prest」 「宝島」の二曲を合同で演奏した。田村氏と部員たちは初共演で緊張していたが、田村氏のリードとひとことレッスンにより、演奏を重ねるごとに緊張も解け、演奏自体、変化していくのが分かった。演奏を聴くうち、「今回のおんかつはいい事業になる」と感じる瞬間が幾度となくあった。また、時間がほとんどない中での指導顧問教師による事前の指導、気配りには頭が下がる思いだった。



タイトル：田村真寛 夢のコラボレーション② 由利高等学校吹奏楽部+民謡部

期 日：平成26年12月11日（木） 16：00～18：00

会 場：由利高等学校 音楽室、民謡部室

参加者：由利高等学校吹奏楽部員+民謡部員 57人

田村氏の演奏を鑑賞後、地元の民謡である「本荘追分」と「秋田大黒舞」を民謡部（唄・踊り・演奏付き）と合同で演奏した。最初は戸惑っていたが、お互いにプロ意識が強く、最後は全く違和感を感じさせない完成度の高い内容に仕上がった。その後、同二曲を田村氏と民謡部、吹奏楽部が共演。和と洋のコラボレーションは、おんかつ関係者だけで聴くのが惜しいほどだった。また田村氏による和服での尺八演奏も見もので、おんかつならではのスペシャルな一場面だった。



タイトル：田村真寛 夢のコラボレーション③ 本荘南中学校吹奏楽部

期 日：平成26年12月12日（金） 16：30～17：30

会 場：本荘南中学校 音楽室

参加者：本荘南中学校吹奏楽部員 24人

田村氏の演奏を鑑賞後、事前練習した「故郷の空」を田村氏のアドバイスを受けながら合同で演奏した。南中学校では、終始、部員による田村氏の心くばりが感じられた。出迎えの姿勢、あいさつ、演奏鑑賞中の瞳の輝き、演奏中の真剣さ、そして部員による感謝の合唱の贈り物…。時間は短かったが、いい意味で由利本荘市の子ども達の素直さ、素朴さが田村氏に伝わったのではないかと感じる。指導されている指導顧問教師の人柄が感じられたアクティビティだった。



タイトル：田村真寛 夢のコラボレーション④ 秋田県立大学本
庄キャンパス

期 日：平成26年12月12日（金）19：30～20：30

会 場：秋田県立大学本庄キャンパス カフェテリア

参 加 者：ジャズバンドサークルメンバー 30人

田村氏の演奏を鑑賞後、「見つめてほしい」を合同で演奏した。大学内カフェテリアの雰囲気もよく、華やかな演奏に仕上がった。限られた練習時間の中、しかも初めて演奏する楽曲に戸惑っただろうが、アクティビティの最後を見事に締めくくってくれた。この大学は県外からの生徒が多い。今回のおんかつで部を引退する学生が何人かいたようで、この合同演奏体験が秋田での思い出になるならありがたい、これも地域交流のひとつの姿ではないかと感じた。

コンサート

タイトル：田村真寛コンサートin由利本庄 カッコいいクラシッ
ク音楽で明るく元気な由利本庄に！

期 日：平成26年12月13日（土）15：30開演

会 場：文化交流館カダーレ 大ホール（定員：1,110人）

入場者数：350人

二部構成。第一部は田村氏と由利高校吹奏楽部&民謡部が「夢のコラボレーション」と題し、アクティビティで合同演奏した四曲を披露した。来場者は民謡とサックスによる響きの妙を堪能したようだ。第二部は「田村真寛オンステージ」と題し、クラシック曲を中心に文字通り「カッコいい」ステージを作り上げた。田村氏が本領を発揮し、想像以上の感動の舞台だった。また田村・大野氏の誕生日サプライズ企画などもあり、終始明るい雰囲気の和やかな舞台だった。



① 応募の動機・事業のねらい

応募の動機：1. 地域（東北、秋田）の持つ暗いイメージを払拭したい。2. クラシックの敷居の高さ（難解、聴き手選ぶ等）を払拭したい。3. 文化交流館カダレのイメージを向上させたい。以上三つの応募動機をもとに、次の「事業のねらい」を設定した。

事業のねらい：若い世代が大人になっても音楽が好きでいるように、よりよい音楽体験ができる環境づくり（=音楽による地域づくり）を目指す。

② 企画のポイント

「①応募の動機と事業のねらい」を元に次の三つのテーマを設定した。

第一テーマ 地域の元気な中・高・大学生と共同で行う「明るく元気な地域づくり」

第二テーマ クラシック音楽のイメージを変える「カッコいいクラシック音楽企画の提供」

第三テーマ 地域に愛される施設づくりのための「文化施設カダレのイメージアップ」

以上の三テーマをベースに、メインテーマを「カッコいいクラシック音楽で、明るく元気な由利本荘をつくろう」とし、由利本荘市のおんかつを企画した。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

1. 企画での苦労（問題）点 田村氏のサクソと高校吹奏楽部、民謡部のコラボレーションがうまくいくか。

2. 運営での苦労（問題）点 各々が遠距離のため、連絡に時間がかかり意思疎通がなかなか図れなかった。（学校⇄担当者⇄コーディネーター⇄アーティスト）

④ 上記③をどのようにクリアしたか

1. については、同じ高校にアウトリーチをお願いしたため、吹奏楽部と民謡部が何度かコラボレーションを行っていたこと、またアクティビティで田村氏と吹奏楽部、民謡部が音合わせをしたことで、結果的に大ホールでスムーズに演奏を行うことができた。結果的に館独自アンケートで好評価が多数寄せられた。

2. については、連絡、課題発生時には電話ではなく、極力、Eメールの一斉送信を利用し情報共有を行い、タイムロスがないよう迅速に対応することにした。

⑤ 事業を実施しての成果

1. 様々なつながりができた。学校指導者⇄運営担当者、運営担当者⇄地域創造担当者、運営担当者⇄アーティスト、さらには運営担当者⇄事務局職員など、事業を行う前には存在していなかった外部及び内部でのつながりが生まれた。このつながりが今後の地域づくりのきっかけになると思う。

2. カダレを知ってもらえた。最終日のホール公演にはアクティビティ参加者がほとんど来館した。演奏を楽しむことはもちろんだが、大ホールで生演奏を鑑賞する楽しみを体感していただき、おんかつ以外の音楽事業にも興味をもって、将来の文化交流館カダレ利用者に育てていただければと思う。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

1. 宣伝方法について 由利本荘市CATVでの紹介・告示、新聞広告、ラジオ、ポスター・チラシ配布など宣伝をかなり実施したが、残念ながら市民におんかつそのものが浸透するには至らなかった。お

んかつ以外でも、イベント企画に来館していただくにはまず内容を知っていただくことが最優先だと感じた。

2. 職員対応について 担当者と事務局職員が中心となり、ボランティアスタッフ等に協力を得て、事業を運営したが、次回おんかつでは、他部署市職員の協力を得、市をあげてホールを盛り上げたい。地域おこしに取り組む前に、まず足元を固め「市職員に協力してもらいホールで何ができるのか」を考えたい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

独自アンケートの中に「この土地で素晴らしい演奏を聴くことができました。由利本荘も捨てたものではないと思った」という感想があった。これは「由利本荘市でプロアーティストの演奏が聴けた」というプロ演奏に対する評価と「プロアーティストと一緒に地元高校生が演奏した」という高校生に対する評価の二つの意味があると思う。今回、田村氏の演奏もさることながら大ホールでのコラボレーションの評価が高く、優れたアーティストを招いた一日限りの演奏だけでなく、プロと市民と一緒に作り上げるコンサートの重要性を感じた。地域の人材を音楽というツールを活用し育てることが、由利本荘の活性化につながる一つの方法論としたら、そのきっかけを作るホールの果たす役割は重い。またおんかつなどを通じて積極的に地域の人材を掘りおこすことも必要だと思った。

由利本荘市は、秋田県の南西部に位置し、南に秀麗な山容を誇る鳥海山、西は日本海に囲まれ、鳥海
の山裾に源流を発する一級河川「子吉川」の流れとともに広がる街で、人口約8万人の自然豊かな都市
である。

由利本荘市文化創造館カダレは、1階席で536名、2階席で574席の可変型のホールで、先進的なデ
ザインと機能的な機構を持ち合わせた大型のホールで、館内には図書館なども併設しており、市民の憩
いの場となっている。

カダレ担当の小松さんは由利本荘市で「カッコイイ」クラシック音楽を聴いてもらいたいとおん
かつに応募し、アーティストは田村真寛さん暖かい人柄とうちに秘めた熱い想いの持ち主。由利本荘市
のおんかつでは特に学生を対象に「カッコイイ」音楽を届けたいと中学校、高校、大学でのアクティビ
ティを実施した。

由利高校のアクティビティでは、吹奏楽部と民謡部を対象に実施。吹奏楽部、民謡部はどちらも先生
方の情熱ある指導でとてもレベルが高く、由利高校吹奏楽部と民謡部はカダレで行う本番の第1部で
共演させていただくことに。今回のアクティビティでは交流と本番に向け、郷土音楽の「本荘追分」「秋
田大黒舞」を共演するため音楽をつくる作業を行うことになった。

また、中学校では、田村氏の共演とともに学生からもサプライズの演奏、合唱のプレゼントがあり、
人に音楽を聴いてもらい喜んでもらうという先生の熱い指導があるのだと思う。生徒の皆さんが本当に
楽しんで音楽を演奏していたのが印象的であった。

秋田大学でのアクティビティでは、今時の学生らしくおとなしめの印象であったが、田村氏のまさに
カッコイイ演奏を目の当たりにして各々が一生懸命に音楽と向き合っていた。

コンサートでは1部に由利高校吹奏楽部、民謡部とのコラボレーション、2部に田村氏のサックスの
魅力を存分に堪能してもらうという構成。特に1部での高校生とのコラボレーションではそのクオリ
ティの高さが印象的で、ホールの新しさと今風にアレンジされた民謡は聴いていてワクワクするような
高揚感で会場を包み込んだ。2部の田村氏の演奏も1部のそれと違ったしっとりとまた情熱的なサック
スの演奏により会場を魅了した。

秋田由利本荘市の公演は大成功のうちに終了したが、今回のおんかつで特に強く感じたことは、この
共演に行き着くまでに様々な地元中学、高校、大学の理解と協力があり、日頃からホールとの良好な関
係が成り立っているということの重要性だ。ホールだけでも、アーティストだけでもできないものを今
回創り出したのは、多くの人々の熱い思いが形になり、1つになってできたものだと思う。今後もカダ
レを中心として、市内に点在する「熱い思い」をつなげていって欲しいと思う。

実施団体：公益財団法人つくば文化振興財団

実施時期：平成27年2月5日（木）～平成27年2月7日（土）

出演アーティスト：前田 啓太（打楽器） 床島 礼華（打楽器）

アクティビティ

タイトル：体験！不思議な打楽器の世界

期 日：平成27年2月5日（木） 10：40～11：25

会 場：つくば市立荃崎第二小学校 視聴覚室

参加者：3年生 38人

児童対象のアクティビティ。児童には「ふれあいコンサート」として話されていたようで、「ここにボールはない」が始まって「コンサートじゃないじゃん」、「いつになったら始まるの？」といった困惑の声が出た。しかし、call&responseで児童の心をつかみ、アズヴェラントウラスで児童の中で演奏し、お互いの近さが実感できるプログラムだった。その後、マリンバ連弾の演奏を鑑賞し、サンバのリズムを体験して終了した。リズム体験はファシリテータがリズムをキープしたため、楽しく体験していたと感じている。



タイトル：打楽器ミニ・コンサート

期 日：平成27年2月5日（木） 14：30～15：30

会 場：筑波エコー学園 作業室

参加者：施設利用者、保護者、施設職員 約70人

施設利用者（知的障害者）がメインターゲットのアクティビティ。午前のプログラムと順番を替え、リズム体験を行ってからマリンバの連弾を披露し終了した。施設利用者も慣れているためか、静かに聞いており、終了後には記念写真を撮るほど盛況だった。このため、普段コンサートへ来ない方へ音楽を持っていき刺激を与えるという目的は達成されたと感じている。



タイトル：体験！不思議な打楽器の世界

期 日：平成27年2月6日（金） 10：40～11：25

会 場：つくば市立荃崎第三小学校 第一音楽室

参加者：2年生 37人

児童対象のアクティビティ。荃崎第二小学校で行ったものと同様のプログラムであったが、こちらでは最初から大人しく、困惑の声が上がることなく進んだ。

ただ、リズム体験では、2年生児童には難しかったのか、アゴゴベルのリズムが安定しなかったなど、課題も残った。



タイトル：【中止】体験！アウトリーチで何やった？

期 日：平成27年2月6日（金） 15：30～16：30

会 場：つくばカピオ ホール

参加者：つくば市内小中学校音楽部会（音楽主任教員）

カピオホールの舞台上を使い、荃崎第二小学校、荃崎第三小学校で行ったプログラムを、市内小中学校音楽主任教員へ実施する予定だったが、主任教員会と連携できておらず、中止となった。

コンサート

タイトル：前田啓太 打楽器リサイタル

期 日：平成27年2月7日（土）14：00開演

会 場：つくばカピオ ホール（定員：344人）

入場者数：251人

曲の間にMC（楽器の説明や打楽器奏者の説明）をする方法でコンサートを行った。

舞台転換時間として途中休憩を取り、蒲公英と混凝土（20分程度）を演奏し、終演。



① 応募の動機・事業のねらい

つくば市はアウトリーチ事業を行っておらずノウハウが不足していたため、アドバイスを受けながら経験を積みたいと、応募しました。

アウトリーチ事業を行い、普段ホールへ来ない遠方の方や、ホールに来れない方へ音楽を届けることを狙いとしました。

② 企画のポイント

ねらいに沿い、ホールから遠い小学校や、市内の経度知的障害者の社会復帰施設をターゲットに本物の音楽を届けることをポイントに進めました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

これまで、外部に企画を持ち込み、交渉し、実現することがなかったため、順を追って交渉し、当日の流れを詰める作業は苦労しました。

また、当日運営するにあたり、ステージマネージャ業務は未経験だったため、流れを覚えて本番こなすことにも苦労しました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

実施施設の担当者と、電話やメールで密に連絡を取り、必要に応じて足を運び、クリアした。

また、本番運営に際しては、舞台転換図付きのタイムテーブルを作成し、本番に臨んだため、大きなミスなくクリアすることができた。

⑤ 事業を実施しての成果

この事業を実施して、アクティビティの企画調整だけでなく、制作会社に頼らず公演を制作する経験も得ることが出来た。これまでの公演は全て買い取り公演だったため、ステージマネージャとして経験をj得る機会はなかったため、とても貴重な経験ができた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

今回、確認を怠ったためにアクティビティが1枠中止になる事態が起きた。起きてはならない事件であり、お互いの細かな確認がとても大切であると改めて実感させられた。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回の事業を通し、行く先行く先で歓迎され、対象者と共に楽しむ教員職員の姿を見て、つくば市においてアクティビティ活動はまだ不足していると実感した。事業の実施に当たり、様々な「ワク」に縛られるが、考え方までとらわれることの無いよう、積極的に発信し、アクティビティを増やしたいと感じた。

つくばカピオホールは、東京・秋葉原から特急電車でわずか45分の学術・研究都市、つくば市にある。クラシック音楽愛好家が都心に出かけて行くことも可能な上に、同じつくば市文化振興財団が管理運営するノバホール（大ホール1000席、小ホール100席）も隣接しているなど、いかに自主事業を差別化し、音楽公演会場としての認知向上が課題とされる。今回のおんかつ事業は、アウトリーチ活動とワンコインコンサートを多様化する地域ニーズに寄り添う自主事業として本格的導入することを目指して実施された。ワンコインコンサートをシリーズ化するためには、初期段階から明確な方向性を掲げ、中長期的な事業構想の中でどのようにコンセプトを育てていくのが重要になる。また、アウトリーチ活動も同様に連続性のある事業として捉え、他の事業との連動性も考慮した鳥瞰的なデザイン視点が欠かせない。

今回のカピオホールでは、おんかつ事業終了後を見据えながら、担当者である財団職員の中村利昭氏と市職員の沢田十和子氏のこだわりを基にプランニングが進められた。例えば、アーティスト。なかなかソロで聴く機会が少ないからと打楽器奏者の前田啓太さんに依頼した。さらに演奏プログラムは、2人がアーティストプレゼン演奏会で衝撃を受けた現代作品をリクエスト。そして、アクティビティ選定には2つの軸を据えた。学校へ教育現場に向き、次代を担う世代へのアウトリーチ活動に加え、コンサート会場へ出向くことが難しい地域にある社会福祉サービス事業所・筑波エコー学園を実施先に含めた。

つくば市立荃崎第二小学校では元気一杯の3年生を対象に、第三小学校は少しシャイな2年生を対象にアクティビティを行った。冒頭約5分はパントマイム作品で始まり、言葉を一切発さない前田さんだが、開放的な空気の中で児童たちは感じたことを自由につぶやいていく。共演者の床島礼華さんがアフリカ民族楽器のジャンベとともに背後からいきなり登場すると、思わず飛び上がる児童もいた。スネアドラムの説明に続き、児童たちの中に入り込んで、独奏曲「アズヴェラントウラス」。様々なスティックやブラシ、素手から生み出される演奏は迫力満点。児童たちは前田さんに食いつく近さで聴き入っていた。最後には、コール&レスポンスをしながらサンバのリズムを全員で学び、カーニバルさながらのサンバ行列が完成した。筑波エコー学園では、小学校2校とほぼ同じプログラムであったが、事業所で作業をされる利用者の方、保護者の方、職員の方が一緒に音楽に親しめる工夫がなされた。

つくばカピオホールは、演劇やダンス公演にも対応できる劇場空間である。コンサートでは、その舞台空間を最大限に活用し、前半と後半で大きくイメージ転換を行った。特に後半は反響板を無くし、照明と音響設備を駆使して、演劇的空間を目指した。全体を通じて、楽器転換や照明音響のQ出しが多い進行だったが、事業担当者の中村氏が全体の進行監督を務めた。当初は1、2階のみを開放する予定だったが、当日券が飛ぶように売れ、急遽3階席までお客様をご案内した。アクティビティ先で公演のことを紹介することはなかったが、公演のことを口伝てで聞いていらした方が多かったそうだ。

おんかつ事業の醍醐味は、実施団体（担当者）のこだわりとアーティストのこだわりが、地域の特性と化学反応を起こすところにあると私は感じる。ここでいうこだわりとは、情熱のことだ。制作途中には情熱が有り余るが故に、紆余曲折することもあるが、ベテランのコーディネーターの的確な助言やファシリテーションにより、自らの自明性に気づくとともに、今回の事業で「やりたいこと」「やれること」「やるべきこと」が次第に浮き彫りになる。アウトリーチや公演事業では兎角、最終形である実施日の様子だけに成果を求めがちであるが、制作プロセスの中で生成・強化される地域コミュニティの関係性や、自分たちの地域や施設が持つ可能性への気づきも認知されるべき成果の一つであり、未来への重要な財産になるのではないだろうか。つくばカピオホールは来年、開館20周年を迎える。今回のおんかつ事業の経験を糧に、こだわりや野心を忘れずに、つくばカピオホールだからできる自主事業を展開・発信して欲しい。

実施団体：公益財団法人坂井市文化振興事業団

実施時期：平成26年10月16日（木）～平成26年10月18日（土）

出演アーティスト：前田 啓太（打楽器） 藤原 耕（打楽器）

アクティビティ

タイトル：音楽へ誘うコンサート

期 日：平成26年10月16日 11：30～12：15

会 場：雄島小学校 多目的ホール

参加者：6年西組 23人

パントマイムやリズム遊びを皮切りに、マリimbaやスネアドラムの演奏を披露。最後は児童らも参加してサンバを演奏し、児童らを音楽の世界へ引き込んだ。

最初は緊張していた児童たちも最後と一緒にサンバを演奏するときには楽しそうに手拍子や楽器演奏をしていた。



タイトル：音楽へ誘うコンサート

期 日：平成26年10月16日 13：45～14：30

会 場：雄島小学校 多目的ホール

参加者：6年東組 23人

先述の西組のアクティビティと内容は同じであったが、このクラスの児童らは元気がよく積極的にアクティビティに参加していた。三国町は三国節などの伝統芸能が多く残っており、太鼓を習っている児童が少なくない。そのためか前田さんの打楽器演奏や打楽器の説明に興味深そうに聞いている児童が多かった。



タイトル：音楽と触れ合うコンサート

期 日：平成26年10月16日 10：00～10：45

会 場：みくに未来幼保園 多目的ホール

参加者：5歳児 28人

基本的には雄島小学校と同じ内容で実施した。

オープニングのパントマイムでは大声で笑い、中盤のマリimbaの説明ではマレット毎に変化する音に感嘆の声を上げるなどしてアクティビティを大いに喜んでいました。



タイトル：音楽と触れ合うコンサート

期 日：平成26年10月16日 14：00～14：45

会 場：三国希望園 多目的ホール

参加者：障がい者及び保護者 28人

最後のアクティビティ先は、障がい者の人たちの自立支援施設だったのだが、今回の企画の中でここが一番アクティビティを期待していた先であったように思う。コンサートを聴く機会がほとんどない彼らは、前田さんの演奏を本当に楽しんでくれていた。

最後の全員でのサンバ演奏では、全員がシェーカーを持って演奏に参加していた。終演の際には、施設を利用している障がい者の人たちが作った石鹸が前田さんにプレゼントされた。



コンサート

タイトル：演じる打楽器奏者 前田啓太 ～パーカッションの世界～

期 日：平成26年10月18日（土） 14：00開演

会 場：みくに文化未来館 ホール（定員：140人）

入場者数：112人

Ceci n' est pas une balle / ガ ー ナ イ ア / サ ラ バ
ンド / aventuras / ラ ン ド / 蒲 公 英 と 混 凝 土 / この 道
アンコール曲の『この道』を含めて計7曲を演奏した。

オープニングの pantomime 『Ceci n' est pas une balle』では
皆驚いているようであったが、すぐにそのパフォーマンスに引き込
まれていった。観客は、普段見ることがない打楽器のソロコンサ
ートを大いに楽しんでいた。

また、通常の舞台とは違って、舞台を階段状に形作り客席とする
ことで演奏者と観客との良い距離感をつくることができた。普段の
未来館ホールを知る人は大変驚いた様子であった。



① 応募の動機・事業のねらい

同じ自治体に2つの公共ホールがあることから、規模の小さいみくに文化未来館は予算の縮小傾向にあります。その中で、みくに文化未来館が公共ホールとしての地域での存在意義を考えていたところに、今回の公共ホール音楽活性化事業の募集のお知らせが届き、市民に音楽をお届けするアウトリーチという選択肢が出ました。10年前の4町合併以降、芸術鑑賞の機会が少なくなった子どもたちに、障がい者など普段音楽に接する機会が少ない人に、プロのアーティストの音楽を届けることを目的としておんかつ事業に応募しました。

② 企画のポイント

次代を担う子ども達を育成するという趣旨のもと、アクティビティ先は小学校及び幼保園を選択した。また、普段ホールに来ることが難しい障がい者らの施設もアクティビティ先とした。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

ホールコンサートの際にアクティビティ先の小学校の子ども達に共演してもらおう企画があったが、アクティビティ前に募集したところ希望者が集まらなかった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

アクティビティの際にも共演者を募ったが、スポーツ少年団などの他のイベントを理由に参加できない子どもがほとんどであったため、企画中止となってしまった。

⑤ 事業を実施しての成果

プロの音楽家が行うアクティビティは、行く先々で好評で、特にコンサートを聞く機会が全くない障がい者施設では本当に感謝されました。今回、地域の小学校、幼保園、障がい者施設、自治体の関係者とコミュニケーションを密に企画に取り組んだことで、みくに文化未来館の活動を知ってもらえたと思います。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

ホールコンサートに集客ができなかった。

通常の未来館ホールとは違った特殊な舞台を形作り定員が少なかったため、客席の8割は埋まったが、集客の難しさを改めて実感しました。

イベントの広報を工夫していく必要があると感じました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回のような事業は、一過性の単発事業ではなく、継続していくことで初めて意味のある事業だと思う。公共ホールが地域の文化の拠点であるために、地域の教育機関や団体、各施設との連携を密にこのような事業を継続的にやっていくことが大切だと思います。

坂井市は福井県の北部に位置し、平成18年に坂井郡の三国町・丸岡町・春江町・坂井町、4町が合併して誕生した市で、人口は約9万人、東尋坊をはじめとする数々の景勝地を有した自然豊かな市である。

今回、おんかつを実施したホールは坂井市の三国にあるみくに文化未来館。図書館を併設した複合施設で、可動床（舞台）の多目的な珍しいホールである。担当者である四折さんはこの地域でホールの認知度が低く、地元の人達のホール離れが進んでいることを危惧し、もっとホールに感心を持ってもらいたい、音楽の素晴らしさを感じてもらいたいとこの事業に参加した。本人も演劇の経験者であり、コンサートでは様々な照明などの演出により、ホールの魅力、特別な空間を感じてもらいたいとの思いが強かった。

このような背景から選んだアーティストは打楽器奏者の前田啓太さん。前田さんは“演じる打楽器奏者”としてパントマイムを取り入れた演出が特徴的で、パフォーマンスが高い評価を受けている。アクティビティ先は市内小学校（2コマ）、みくに未来幼保園、障がい者施設である希望園で実施した。学生や未就学児へのアプローチを通じてその関係の人達を巻き込み、ホールに目を向けてもらいたいとの担当者の思いからである。アクティビティ先の小学校では6年生を対象に、みくに未来幼保園では5歳児、障がい者施設では幅広い年代を対象としたアクティビティとなった。どのアクティビティでも前田さんの打楽器の音色とアクティブな演奏に聴きいていたのが印象的で、特に幼保園での人気ぶりは大変なもので、子供たちは大はしゃぎであった。

コンサートはその珍しい可動式の舞台装置を最大限に発揮し、まるで舞台上舞台のようなお客様にとってはとても贅沢な空間設定が実現した。演者にむかって階段状になったその空間は、来場者にホールの魅力を存分に楽しんでもらうことができたのではないだろうか。演奏はパントマイムから始まり、数曲の演奏のあと、朗読と演奏を同時にする「蒲公英（たんぽぽ）とコンクリート」。この幻想的な空間に来場者は引き込まれ、演奏と叙情的な詩の世界観に包まれた。

今回のおんかつではホールの特異な機構と打楽器という組み合わせの好事例となった。担当者がホールをよく理解しているからこそその結果だと思われる。また、アーティストのポテンシャルを十分に発揮できるよう尽くして下さったホールスタッフの皆さんの連携の良さ、チームワークの良さがあってこそ今回のおんかつの成功があった。今回の公演を始めの一歩として、これから先も市民の方々にホールの魅力、音楽の魅力を十分に発信してほしいと願っている。

実施団体：揖斐川町教育委員会

実施時期：平成26年12月11日（木）～平成26年12月13日（土）

出演アーティスト：高見 信行（トランペット） 小泉 耕平（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：高見信行 トランペットコンサート

期 日：2014/12/11 10：45～11：45

会 場：大和小学校 音楽室

参加者：大和小学校5年生17人 春日小学校5・6年生12人
計29人

アーティスト主導によるアイスブレイク後、演奏及び体験活動を実施した。また、両校参加者が合唱曲「ビリーブ」の合唱をアーティストの演奏とともにいった。体験活動では、代表児童2名がトランペットを実際に吹き、音が出る仕組みや正しい音を出すことの難しさを体験した。

【演奏曲】ロンドンデリーの歌、霧の中の少女、トランペット吹きの休日、他

タイトル：高見信行 トランペットコンサート

期 日：2014/12/11 14：00～15：00

会 場：小島小学校 多目的室

参加者：小島小学校6年生40人 清水小学校6年生26人 計66人

アーティスト主導によるアイスブレイク後、演奏及び体験活動を実施した。また、両校参加者が合唱曲「ビリーブ」の合唱をアーティストの演奏とともにいった。体験活動では、代表2名がトランペットを実際に吹き、音が出る仕組みや正しい音を出すことの難しさを体験した。

【演奏曲】ロンドンデリーの歌、霧の中の少女、トランペット吹きの休日、他

タイトル：高見信行 トランペットコンサート

期 日：2014/12/12 10：30～11：15

会 場：子育て支援センター ホール

参加者：大人15名 乳幼児17名 計32名

参加者は、親子でペアになり、アーティストの演奏を聴いた。未就園児をもつ家庭では、普段、なかなかクラシック音楽に触れる機会がないため、親子そろって、ゆったりと音楽に浸ることができた。演奏だけでなく、トランペットの音が出る仕組みも紹介され、参加者は興味深く話にも聞き入っていた。

【演奏曲】ハトと少年、スタンドアローン、ニューシネマパラダイス、クリスマスメドレー他



タイトル：高見信行 トランペットコンサート

期 日：2014/12/12 16:00～16:45

会 場：揖斐川中学校 第1音楽室

参加者：吹奏楽部員28名（1年生14人、2年生14人）

演奏を聴くとともに、吹奏楽部の2組の金管アンサンブルと共演を行った。生徒は、アーティストの奏でる音色の美しさに驚き、演奏方法を自分にも取り入れられるよう、熱心に聴き入っていた。アンサンブル共演では、アーティストが入るだけで全体の音色が変わることを体験した。

【演奏曲】ヴェニスの謝肉祭、トランペット吹きの休日、チャールダッシュの風景、他

コンサート

タイトル：高見信行 トランペットコンサート

期 日：平成26年12月13日（土）14:00開演

会 場：谷汲サンサンホール 大ホール（定員：350人）

入場者数：187人

揖斐川中学校吹奏楽部の金管アンサンブルとアーティストによるファンファーレで開演した。テーマ「音楽でつなげ 町を未来を」に合わせ、「ふるさとの四季」では、町内写真のスライドをバックに演奏をし、参加者は郷土の美しさを再発見することができた。トランペットコンサートは当町では珍しく、参加者は熱心に聞き入っていた。

【演奏曲】道、シンコペーテッドクロック、トランペット協奏曲、ホワイトクリスマス、他



① 応募の動機・事業のねらい

2年前、岐阜県山県市との連携事業で開催経験があり、費用対効果が期待できるため応募した。ノウハウの未習熟から、谷汲サンサンホールにおける音楽系の自主事業は、実施できていないため、これを機会に、音楽事業の実施運営の基礎を学ぶとともに、「ホールで待つ運営」から「ホール外に積極的に出ていく運営」方法を学びたいと思い応募した。

② 企画のポイント

「音楽でつなげ 町を未来を」のテーマのもと、町内小学校の交流事業として位置づけた。また、中学校吹奏楽部でアウトリーチを実施することで、中学生部員が、自分の音楽に対する姿勢や、将来の生き方を考えるきっかけになることを期待した。さらに、町の重点施策の一つである「子育て支援」の一環として、子育て支援センターをアクティビティの一つとするとともに、コンサートでは託児サービスの実施を計画した。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・町内にある8つの小学校から、2か所のアウトリーチ先を、交流事業として決定すること。
- ・バス移動の準備、両校の行事予定等の調整、当日までの準備、及び当日のプログラム編成や役割分担など、アウトリーチ先が負担感を感じないように準備・調整すること。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

町教育委員会独自の実施計画書を作成し、町校長会にて各校長に提案した。その後、校長会で2か所のアウトリーチ先を決定していただいた。

準備に関しては、開場校の都合を優先し、担当者との打合せを随時行った。情報共有も頻繁に行い、ポイントポイントで決定事項をまとめて提示することで、各校の担当者の負担感がないように配慮した。

⑤ 事業を実施しての成果

ホールの「待つ運営」から「出かける運営」のあり方を体験できたことがよかった。これにより、ホールのスタッフが音楽だけに関わらず、他分野においても、積極的に外に出て、情報を発信したり、サービスを提供することの重要性に気付けたことは大きいと思われる。また、クラシックコンサートの運営を経験できたことで、今後の自主企画の幅がもてるようになったことも成果と言える。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

アーティストとの情報交換や打合せが、コーディネーターやアシスタントに頼り切っていたことは反省したい。これは、事業のねらいや意図が明確になっていないことが主な理由であったため、今後の事業展開では、住民のニーズをつかんで企画し、常に「ねらい」や「出口」を意識して実践したい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回の事業では、アーティストの協力姿勢に支えられた部分が大きかった。我々が住民に対して「どのようなサービスをしたいのか」という明確な意図をもつことで、アーティストの負担も減ると思われるし、打合せもより迷いなく、スムーズに準備が進められることを実感した。だからこそ、住民のニーズを考えた上で、「事業の意図」を、常に意識して運営できるようにしていきたい。

岐阜県揖斐川町は岐阜県最西部に位置する、1町5村が合併された町である。今回のおんかつは揖斐川町合併10周年を前に、山間部を縫うように離れて位置する旧の町村地域を音楽で結びつけたいという担当者の思いから「音楽でつなげ 町を 未来を」というテーマのもと、トランペット奏者の高見信之さんを迎えて実施された。

<アクティビティおよびコンサートについて>

①大和小学校5年&春日小学校5・6年 / 小島小学校6年&清水小学校6年

「音楽でつなげ 町を 未来を」というテーマのもと、学校間の交流事業として行いたいという担当小林さんの熱い思いから、いずれも2校合同、うち1本は66名という大人数での実施となった。そのため、どのように児童のアイスブレイクを行うかが重要なポイントとなったが、高見さんがうまくゲームを用い、明るく和やかな雰囲気スタートを切ることができた。生のトランペット演奏に児童たちが目を輝かせて聴き入る光景は大変印象的であった。また、終了後の児童からの感想文は、音楽の素晴らしさや楽しさに触れるだけでなく、高見さんがアクティビティ内で触れた楽器の構造に関する単語なども沢山登場するなど、児童たちがしっかりと話を聞き、吸収していた事が見てとれた。一方で、人数の多さから生じる物理的な距離感や、学校間での温度差は否めず、アウトリーチにおける少人数制の意義について改めて考えさせられる機会となった。

②子育て支援センター

揖斐川町は今年度の目標として「子育て支援」を掲げており、その一環として子育て支援センターにおいて、乳幼児とその母親を対象としたアクティビティを実施。日頃育児に奮闘するお母さん方に、リラックスして音楽を楽しんでもらうことを重視してのプログラミングで、15～20組ほどの親子が音楽を楽しんだ。

③揖斐川中学校吹奏楽部

最終のアクティビティは中学校吹奏楽部を対象としたもので、演奏に加え、吹奏楽部の生徒たちによる演奏へのアドバイスなども組み込んだ内容での実施。演奏したのは金管楽器の生徒のみであったが、演奏に参加した生徒だけでなく全員に通じるようにうまく語りかけていたのが印象的であった。顧問の先生方からも指導に関する質問がたくさん寄せられ、熱気に溢れたアクティビティとなった。

④コンサート

谷汲サンサンホールで行われたコンサートは、子どもから大人までたくさんの方が来場され、熱気ある本番を迎えた。本格的なクラシックレパートリーその他「町民の皆さんにも改めて揖斐川町の良いところを知ってほしい」という担当者小林さんの希望により、揖斐川町の四季の風景を「ふるさとの四季」メドレー演奏に合わせてスライドで投影したところ、客席からは大きな反響が感じられた。また曲のフィナーレ部分で、アーティストが現地で撮影した写真を投影したことで、さらに舞台-客席間の距離がぐっと縮まったようである。

揖斐川町らしいアットホームな公演となった。

<その他所感>

一丸となって取り組んでくださったスタッフの皆さん、子どもたちに負けず劣らず熱心だったアク

ティビティ先の担当者の方々、ホームステイのように毎日何かと声をかけてくださる旅館の皆さんなど、町の人々の温かさが印象的であり、一方でアーティストの「町を知ろう」という積極的な姿勢も今回の成功へと繋がっていると感じる。担当の小林さんは大変熱心に、そして真剣に取り組まれ、アクティビティ先ともかなり綿密に打ち合わせや下見を行ってこられた様子が随所で見受けられた。「音楽でつなげ 町を 未来を」の通り、高見さんの音楽が町をつないだことは間違いないが、担当小林さんの尽力がその土台を築いたのも確かである。

最後に、担当者とアーティストの協働についても付け加えておきたい。アーティストが揖斐川町入りしてから連夜ホールにて翌日のリハーサルを行い皆でフィードバックを行ったが、その中で出た小林さんの意見は長年学校教育の現場に携わってきた方ならではのもので、アーティストにとっても良い刺激となったようである。翌日以降のアクティビティにも反映されており、共に創りあげた"おんかつ"となった。

揖斐川町では、現在新しいホールを建設中であるが、今回のおんかつが新ホールの運営にむけての礎となり、音楽が揖斐川の町を、そして未来をつないでゆくことを期待したい。

実施団体：安城市教育委員会

実施時期：平成27年1月22日（木）～平成27年1月24日（土）

出演アーティスト：前田 啓太（打楽器） 藤原 耕（打楽器）

アクティビティ

タイトル：打楽器との出会いコンサート

期 日：平成27年1月22日（木） 11：00～11：45

会 場：昭林公民館 ホール

参加者：女性コーラスグループ 11人

小人数の集まりのなかでしたが、ホールコンサートの抜粋で構成された演奏や、楽器の紹介などがありました。参加いただいた方は、興味深く鑑賞いただけている様子でした。特に、最後に演奏した、安城市の縁の童話作家新美南吉の作品「2ひきのかえる」を前田・藤原両氏の語りと前田氏の打楽器による効果音で童話の世界に引き込まれ、みなさんが十分に楽しんでいただくことができました。

タイトル：読み聞かせグループとのミニコンサート

期 日：平成27年1月22日（木） 15：00～15：45

会 場：昭林公民館 ホール

参加者：読み聞かせグループ 39人

午前の部と同じ会場ではほぼ同じ演奏内容で実施されました。こちらは多くのグループから参加いただき、みなさんが最初からとても楽しく鑑賞され、興味深く聴いているようでした。特に新美南吉の「2ひきのかえる」は、みなさんも関心をもって聴きながら、楽しんでいる様子が印象的でした。終演後も楽器の回りに人だかりができるほどの人気でした。

タイトル：前田啓太のこれが打楽器だ！

期 日：平成27年1月23日（金） 11：15～12：00

会 場：高棚小学校 音楽室

参加者：小学5年生2クラス 49人

本公演の一部であるパントマイムが披露され楽しく始まり、学校にある楽器の説明やその楽器を使っての演奏を興味深く聴き入っていた。また、実際にサンバ楽器を使って児童のみなさんと演奏するなど、とても賑やかな演奏会になりました。児童からは「マリンバの音がきれい」「スネアドラムのバチ捌きがすごい」など、感動した、楽しかったの感想が聞かれました

タイトル：前田啓太の打楽器ミニコンサート

期 日：平成27年1月23日（金） 14：30～15：15

会 場：安城教育センター 大研修室

参加者：市内小中学校音楽教諭 29人

他のアクティビティと同様にパントマイムから始まり、先生方の乗りもよく大変楽しいコンサートになりました。スネアドラムの構造の紹介、また、先生も参加したサンバ楽器を使って演奏、最後に質問コーナーを設けて直接答えてもらうなど、有意義な演奏会になりました。



コンサート

タイトル：前田啓太のこれが打楽器だ ～パーカッションでクラシック！～

期 日：平成27年1月24日（土） 14：00開演

会 場：安城市文化センター マツバホール（定員：502人）

入場者数：392人

文化センターの利用日が限られていたが、短いリハーサル時間のなかで演出や照明の仕込みを確実に行うことができました。公演では、客席の皆さんが打楽器演奏に集中して聴いてくださっていたのが、印象的でした。大勢の方が会場に足を運んでいただき、みなさんが楽しまれたことや、当日券の販売で69枚（予約を含む）も販売できたことがうれしい驚きでした。



① 応募の動機・事業のねらい

安城市では、国際コンクールで優勝したピアニストとして有名な田村響、後藤正孝氏の2名が輩出されており、クラシック音楽への関心を市民に浸透させ、より高めたい(集客に苦慮している)。そのための方法として、ピアノ以外の演奏での、企画を考え、より親しみやすいところで集客を増やすことのできると思われる、パーカッションの公演を選んでみました。

② 企画のポイント

来館いただいた、市民の皆さんを「笑顔にする」をテーマに、肩肘張らず鑑賞することができるクラシック公演を企画。その導入として、楽しくなるような、アクティビティが実施できるように考えました。

③ 企画実現にあたり苦勞(問題となった)した点

開催会場について、市立図書館やデンパーク(農業公園)内を考えましたが、音の響きや施設の事情で開催場所としては不向きであったため、当初選定していた場所でのアクティビティができないことがわかり、開催場所の変更が必要となりました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

小ホールを備えた公民館が、市立図書館の隣接地にあり、開催場所として非常に使いやすい場所での開催実施ができました。

⑤ 事業を実施しての成果

多くの方に「笑顔」になっていただけた。クラシックの良さを知っていただけた。職員(アルバイト含む)の協力体制をとることができました。また、アクティビティに参加いただいた方々が、ホールコンサートにも鑑賞いただけ、大いに盛り上がった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

今後、クラシック音楽の魅力をいかに伝えるか、難しい面を感じるわけですが、底辺を広げるためには宣伝啓発を含めて、公演の内容を明確にして興味をもってもらえるような企画づくりをする必要があると感じました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

市全体を考えれば、アクティビティ事業に関しては、参加者の多い少ないはあるが、非常に好評でした。公演事業については、今後もホールに足を運んでいただけるような企画が必要なわけで、どのように市民のみなさん向けに選んでいけば良いかが難しい課題であり、じっくり考えて良い企画を続けたいと思いました。

<概要>

愛知県安城市は、長きにわたって稲作や畑作、畜産などの多角形農業を進めてきたため「日本のデンマーク」（デンマークは世界における農業先進国）と呼ばれている。一方で豊田市や碧南市といった工業都市に隣接、名古屋市からも30kmという距離に位置し、農・工・商業ともに適度に発展しており、人口も18万人を上回っている。市民の文化活動も比較的活発なようで、おんかつの会場となった安城市文化センターや公民館でも連日発表会やサークルなどの活動が行われている様子が垣間見えた。

今回のおんかつでは、そんな安城市の文化活動をより活発化すべく、打楽器の前田啓太さんと藤原耕さんのお2人を迎えて実施された。

<アクティビティについて>

アクティビティは市民合唱団、市内で児童を対象に読み聞かせを行っているボランティアグループ、市内小学校1校、そして市内小中学校の音楽教員を対象に実施され、いずれも打楽器の多様性を活かした、活気あるアクティビティであった。

安城市は児童文学作家の新美南吉が一時居を構えていたことから、新美南吉を中心にしたまちづくりを推進、市民活動としても読み聞かせに力を入れて取り組まれている。今回も、読み聞かせボランティアを対象にしたアクティビティでは、新見南吉作品朗読にオリジナルの音楽を創作してコラボレーションをしたい、という担当者の強いご希望があった。音楽をゼロから創りあげパフォーマンスとして完成させるのは、非常に難易度が高く、今回のように複数のアクティビティとコンサートを数日間で行うような場合にはリスクもあるため、我々も最初は躊躇していたが、担当者の野村さんや、読み聞かせボランティアの代表者の「今後、読み聞かせをするときのヒントがほしい」という熱意が前田さんにも伝わり「2ひきのかえる」の朗読にチャレンジすることとなった。結果的には、クラシックにこだわらない前田さんの音楽スタイルが見事に活き、ボランティアの方々もぐっと集中して観ておられ、終了後もアーティストのお2人に楽器や朗読についての質問が飛び交っていた。その町ならではの題材とアーティストの個性がうまく繋がった、おんかつらしいアクティビティであったし、前田さんご本人にとっても新たなフィールドへの一歩となったように感じられた。今回のアクティビティに参加された方々が各々何らかのヒント、あるいはモチベーションを得て、今後の読み聞かせ活動に取り組んでいただけることを願う。

<コンサートについて>

券売については、担当の野村さんがかなり早い時期から広報活動に取り組みされたこともあり、比較的早くから一定数売れており、現地入りしてからはそれほど懸念することもなく会場に沢山のお客様が足を運んでくださった。

前田さんのステージは、いわゆる古典的なクラシックのコンサートとは一線を画するもので、パントマイムや声も駆使し、観る者を飽きさせないユニークな構成で、こんな音楽や表現方法もあるんだよ、という音楽の多様性が伝わる内容である。奏者の負担はかなりのものと思われるが、全てに全力で取り組み、またそれがお客様にも空気として伝わっているように感じられた。客席参加のコーナーが盛り上がったのは無論のこと、終演後にロビーで出演者のお2人に声をかけるお客様の熱のこもった様子からも、楽しんでいただけたことが見てとれた。

<総括>

愛知県安城市は、クラシック音楽公演も含め、一定の文化活動実績を持つ地域であるが、今回のおんかつは、前田啓太さんという独自のスタイルを持ったアーティストを起用されたことで、次の段階へと進む起爆剤となったように感じられた。

アクティビティやコンサートで前田さん・藤原さんの演奏に触れた方々の世界が少しでも広がり、また安城市の文化活動が今後さらなる広がりを見せることを期待したい。

実施団体：米原市

実施時期：平成26年9月4日（木）～平成26年9月6日（土）

出演アーティスト：前田 啓太（打楽器） 村上 響子（打楽器）

アクティビティ

タイトル：やすらぎコンサート ～音楽で癒しのひとときを～

期 日：平成26年9月4日（木） 10：30～10：55

会 場：ルッチプラザ スタジオ310

参加者：地域の未就園児の親子19組39人参加

日頃は忙しく、本格的な音楽を聴く時間を持っていない子育て中の方に、癒しの時間を持ってもらうよう、子育て支援センターのスタッフの協力のもと、音楽に触れていただく時間を提供した。

まず、プロの素晴らしい音楽を間近で聴いてもらい、それから親子でリズム遊びなど、楽しく体験する時間も設けた。

参加者のアンケートには、1歳～2歳の小さな子どもが集中して聴いていて驚いたとの感想がいくつかあった。また、なかなか小さな子どもを連れてコンサートに行く機会がないので嬉しかったとの意見もあり、赤ちゃん連れでも行けるコンサートのニーズがあることが確認できた。

最終日を未就学児入場不可としたため、ホールコンサートの集客には直接結び付かなかったが、音楽の普及という意味では、実施した意義はあったと思われる。また、椅子に座るのではなく床に座って赤ちゃんを抱っこしながら聴けたのも、親子でリラックスできてよかったようである。

タイトル：ミニコンサート&リズムのワークショップ

期 日：平成26年9月4日（木） 13:55～14:30（5・6校時）

会 場：伊吹小学校2階音楽室

参加者：4・5・6年生55人参加

高度なテクニックや人を魅了するプロの演奏を間近で体感する機会を提供し、音楽の楽しさや素晴らしさを伝えた。

導入のボディパーカッションでは体も打楽器になる事を見て、その流れでアーティストとのリズムの掛け合いを手拍子で体験した。また、マリンバやスネアドラムの楽器の説明の後にプロの演奏を披露し、打楽器の幅の広さを学んでもらった。

最後に4種類の打楽器を用意し、何人かの児童に担当してもらい、それぞれにおんかつスタッフが付きサンバ隊を結成し、アーティストの演奏するマリンバと、児童全員の手拍子が一体となって楽しく演奏を行った。

児童の感想で、このアクティビティで音楽が好きになったと書かれていて、一人でも多く音楽に興味を持ってくれる人を増やし、音楽の普及をねらいとしたこの事業の成果が得られた。



タイトル：打楽器の魅力 ミニコンサート

期 日：平成26年9月5日（金） 11：00～11：45

会 場：近江図書館 ロビー

参加者：近江地区の音楽愛好家および図書館来館者 40人参加

身近な場所で本格的な音楽を提供し、聴く楽しみを経験していただき、ホールへ足を運んでもらうきっかけづくりのミニコンサートとして実施。図書館のロビーで実施することにより、対象者以外にも通りすがりの方で興味を持つ人を得ることが出来るとして計画した。

同じ米原市でありながら、それぞれの地域での活動は合併前とあまり変わらず、ホールのある地域以外の方にホールの存在をアピールする良い機会として、地域の公民館で音楽活動をしているグループに声を掛け、本格的な演奏を間近で聴いてもらった。

会場をグループの活動場所の公民館ではなく、あえて近くの図書館のロビーにすることで、来館者が立ち止まって興味を示し、席に着いて聴いている様子も窺えた。さらに、その中にはホールコンサートに足を運んでいただいた方も見かけ、アウトリーチの成果が表れた。

また、ロビーコンサートの数日前からロビーに特別コーナーとして打楽器や音楽に関する本を展示したり、楽器説明で打楽器のルーツの解説の資料として図書館の本を使用し、図書館とのコラボレーションができて良かった。

タイトル：音楽の基礎のパーカッション

期 日：平成26年9月5日（金） 11：00～11：45

会 場：双葉中学校 3階 音楽室

参加者：双葉中学校ブラスバンド部員 29人参加

パーカッションの模範演奏と、音楽の基礎であるリズムを、ワークショップ形式でブラスバンドの演奏に活かせるよう生徒たちに聴いてもらった。

また、ブラスバンド部出身のアーティストから経験談などを話してもらうなどディスカッションも交えて、今後の部活動の参考になるよう交流を図った。

さらに、吹奏楽の中ではあまり注目されない打楽器だが、実は打楽器の打つリズムが全体の演奏にとって、とても重要な役割を果たしていることを、打楽器奏者ならではの目線で解説し、いつも練習している曲を、打楽器をメインに一部アーティストも交じって演奏し、実際に体験してもらった。

最後に、伊吹小学校で行ったサンバ隊とのアンサンブルで全員が一体となり、音楽の楽しさを深めたアクティビティとなった。



コンサート

タイトル：前田啓太 パーカッションワールド ～ベルホールに響きわたる多彩な打楽器の音色たち～

期 日：平成26年9月6日 14：00開演

会 場：ルッチプラザ ベルホール310（定員：310人）

入場者数：67人

音楽ホールならではの、楽しい中にも本格的な演奏会として、未就学児入場不可とし開催した。

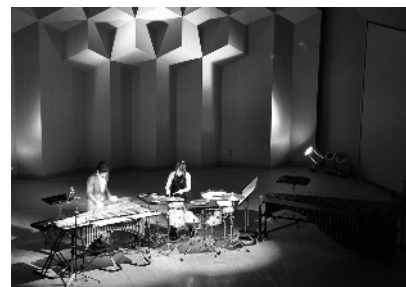
- ①マリンバで、耳馴染みのある曲の演奏・・・導入
- ②パントマイムやボディパーカッションでリズム遊び・・・体験
- ③本格的なプロの演奏・・・感動
- ④朗読をしながらの演奏・・・発見

の内容で実施した。

また、ホールコンサートとして照明での演出も工夫し、ホールでの演奏会を印象付けた。

集客の常套手段とされる共演者を設ける方法を取り入れていたらもっと集客に繋がったと思われたが、アクティビティの内容が決まったのが遅く、有料公演ではクオリティも求められるため、打合せの段階で共演を依頼するには時間が無かったこともあり断念した。

しかし、打楽器のコンサートは珍しく、興味を持たれた方が県外からも来館され、ホールに打楽器の多彩な音色が響き渡った演奏内容は高く評価された。



① 応募の動機・事業のねらい

米原市が合併して10年が経とうとしているにも関わらず、市内全域にホールの存在が定着しておらず、まだ一度もルッチプラザに来たことがないという声を聞く。市内の方にいかにしてルッチプラザに足を運んでもらえるようにするかが課題として見えてきた。

また、当館のベルホール310は、せっかく音楽ホールとして造られた、素晴らしい音響を持つホールでありながら、クラシックの集客は伸びないことを理由に自主企画事業もあまり取り組まなかったため、クラシック・ファンを増やせていないのが現状である。

これらを踏まえて、これまで取り組んでこなかったアウトリーチを、市内でも当館に馴染みの薄い地域や場所に出向き実施することで、クラシック音楽の楽しさを体験し、最終日のホールコンサートに来場してもらえるように繋げたいと考え応募した。

② 企画のポイント

アウトリーチ先として、日ごろ音楽に触れる機会の少ない子育て世代を狙って子育て支援センターの利用者を対象に、また市内でもルッチプラザに来る機会の少ない人のいるところをターゲットにした図書館のロビーコンサート、小学校でのワークショップ的な内容と、中学校のブラスバンド部員を対象としたアウトリーチを実施した。いずれも間近で本格的な音楽を聴いてもらい、音楽芸術の素晴らしさを伝えようと企画した。

また、ホールコンサートは、音楽ホールならではの、楽しい中にも本格的な演奏会として開催し、未就学児入場不可とした。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

開催する側も受ける側もアウトリーチは初めてで調整段階での説明が不十分だったこともあり、個別研修で訪問した際に事業趣旨とは違った内容の要望があったために急遽アウトリーチ先を変更し、アクティビティのプログラムの変更も余儀なくされた。個別研修から実施までの短期間に、プログラムについての細かい打合せをしなければならなかったのが苦勞した。

また、アウトリーチそのものに馴染みがなく、細かな説明が必要で、事業を理解してもらうのに苦勞した。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

各アウトリーチ先のプログラム内容を明記した実施要項を作成し、それを元に打合せを行った。細かい要望などは逐一コーディネーターに報告をし、アーティストミーティングの際のプログラム内容を決める上で参考にしてもらえるようにした。また、コーディネーターからの指示も速やかにアウトリーチ先に連絡し調整を図った。

⑤ 事業を実施しての成果

どのアウトリーチ先の参加者も、間近で本格的な音楽に触れる機会を持てたことに感動され、またこの様な機会をぜひとも作ってほしいとの感想をいただいた。小学校でのアウトリーチでは、全校での音楽鑑賞会はあっても、アーティストとのコミュニケーションを通して音楽の楽しさを肌で感じる機会は初めてで、とても感動してもらえたようだった。

また、ホールに馴染みのない地域でのアクティビティとして開催した図書館でのロビーコンサートに来られていた方が、ホールのコンサートにも足を運んでくださっていた。普段のコンサートの当日券は10枚ほどしか出ないが、今回は40枚以上売れたのも、アウトリーチの成果だと言える。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

企画に時間を取られてしまったこともあり、最終日のホールコンサートのチケットの販促に力が入れられなかった。来場されたお客様には大変満足していただいた内容だっただけに、もっと多くの方に来ていただけるようにできればよかった。アクティビティ先の参加者とホールで共演することも考えたが、日程的に余裕がなく実現できなかった。

集客は永遠の課題である。市民の芸術文化への関心を高め、一人でも多くホールに来ていただけるよう、アクティビティを継続して実施していきたいと考える。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

文化芸術に対する関心があまり高くなく、特にクラシック音楽は敷居が高いと感じている地域性もあってか、集客が伸びない傾向があり、音楽の普及の重要性を感じる。

また、今回の目的として挙げた「ホールに足を運んでもらう」事が達成できたとは言い難く、今後もアウトリーチを継続して、市民にアピールし続け、ホール事業に対する理解を深め、来場者を増やしていきたいと考える。

26年度実施団体の中で一番最初のおんかつ、そしてアーティストの前田さんにとっても初めてのおんかつとなった米原市おんかつ。お互いの不安と緊張が入り交じったスタートとなった。

合併して約10年の米原市。ルッチプラザのある旧山東地域以外の方にはまだホールの存在が定着していないこと、響きの素晴らしいシューボックス型のホールにも関わらず、集客があまり伸びないことからクラシック公演をあまり実施できていないため、クラシックファンを増やせていないことが担当の清水さんの考えているルッチプラザの課題だった。

この課題にどう向き合うか。清水さんはバラエティーに富んだ4つのアクティビティ先を選んだ。小学校1校、中学校1校、図書館のロビー、子育て支援施設に通う0～3歳の子どもたちとその保護者をルッチプラザに招いてのアクティビティである。

アーティストにとって対象が全て異なるアクティビティはかなりハードであるが、前田さんは清水さんの思いを受けて1つ1つのアクティビティに真摯に向き合っていた。

アクティビティ初日は子育て支援施設に通う子どもたちとその保護者をルッチプラザに招いてのアクティビティ。図書館やレストランなどを併設するルッチプラザであるが、小さな子どもをもつお母さんたちにとっては足を運びにくい施設である。今回は施設に出向くのではなく、ルッチプラザ内のスタジオでアクティビティを行うことで、子育て中のお母さんたちにルッチプラザへ足を運んでもらうきっかけとした。0～3歳までの子どもたちに打楽器の演奏がどこまで受け入れてもらえるかが不安要素であったが、演奏が始まるととたんに静かになり、泣き出す子がほとんどいなかったことが驚きだった。

午後は小学4、5、6年生を対象としたアクティビティ。子どもたちは伊吹山の麓に位置する自然豊かな場所で生活しており、とても純粋な子が多い印象を受けた。オープニングは「ここにボールはない」。アーティストプレゼンでも演奏したパントマイム&ボディーパーカッションの曲。最初は緊張した面持ちで前田さんを見つめていた子どもたちだったが、スピーカーからでる音にピッタリと合った前田さんのボディーパーカッションに次第に引き込まれ、曲が終わる頃には子どもたちの顔が笑顔に変わっていた。

2日目の午前は図書館でのロビーコンサート。図書館の館長さんがルッチプラザの館長をされていたということもあり、下見の時からとても協力的であった。当日はロビーに打楽器、音楽関係の本を並べ、演奏を聴いた後に本を借り、より興味を深めてもらうしかけを作ってくれたことが、図書館ならではの試みとなった。

最後のアクティビティは、中学校吹奏楽部。女の子ばかりの部活で、前田さんの問いかけにあまり積極的に答えることはなかったが、前田さんの演奏と音楽に対する思いはアクティビティを通して伝わったと思う。

対象者と近い距離で行うことができるアクティビティでは、アーティストはより身近に感じてもらうために、演奏の間に対話形式のやりとりを入れるなどして、アクティビティを行うことが多い。だが、前田さんは中学校吹奏楽部へのアクティビティ以外はほとんどMCを入れず、次から次へと曲が流れていくようなテンポ感のあるプログラムを作った。産まれたての0歳児から図書館にふらっと来た60・70代の方まで、最初の5分で前田さんの世界に引き込まれていった。前田さんの演奏力、音楽に対する情熱はもちろんのこと、改めて音楽のもつ力を感じたアクティビティだった。

また、4回のアクティビティのうち、子育て支援施設以外は旧山東地区ではない地域で実施することができ、旧山東地区以外の方へのルッチプラザのアピールをすることができたと思う。

コンサートでは、担当の清水さんの「かっこいい打楽器コンサートをしたい」という思いを受けて、打楽器の魅力を様々な角度から楽しめる本格的な公演となった。見た目でも「かっこいい」を感じてもらうため、照明などの演出も舞台スタッフさんと相談し、曲ごとに変化をつけたメリハリのあるステージを創ることができた。

今回のおんかつは何よりも担当の清水さんのルッチプラザへの愛情が形となったおんかつであった。もともとはルッチプラザの利用者だったという清水さん。ホールへの愛着や想いが今回のアクティビティ&コンサートを企画する上で根本にあったからこそ、アクティビティ先の担当者やアーティストにも伝わり、感動的な体験を共有できたのではないかと思う。

ホールへの愛情。公共ホールで働く人間にとって一番大切なものでありながら、忘れがちな感覚を改めて思い出させてもらうことができた米原市おんかつだった。

今後も清水さんのようにルッチプラザを大好きな人が増え、地域の人々の大切な場所となっていくことを願いたい。

実施団体：公益財団法人大阪狭山市文化振興事業団

実施時期：平成27年2月5日（木）～平成27年2月7日（土）

出演アーティスト：高見 信行（トランペット） 小泉 耕平（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：高見信行 ようこそトランペットの世界へ

期 日：平成27年2月5日 11：45～12：30

会 場：大阪狭山市立西小学校 音楽室

参加者：4年1組 29人

比較のおとなしい学年と先生もおっしゃっていましたが、最初のアクティビティということもあり、子ども達は緊張気味の中で始まった。「トランペット吹きの日」では聴いた事のある曲なのか、笑顔になる子ども達。全員マウスピースでの楽器体験を行い、身の回りのある市販のホースとじょうごを使っての簡易の楽器が作れる事などを説明。じょうごを振り回すと笑い声が高々とあがり緊張も解けた様子だった。楽器体験後の演奏は見る目が変わったのか、真剣な眼差しで聴き入っていた。

タイトル：高見信行 ようこそトランペットの世界へ

期 日：平成27年2月5日 14：45～15：30

会 場：大阪狭山市立西小学校 音楽室

参加者：4年2組 29人

給食交流を行い、アーティストと触れあった子ども達や、午前中に終了した1組からの情報が流れて、まだアクティビティを行っていないクラスの子も達も含め、休憩時にはサインを求める子ども達が途切れない程だった。進行は1組と同じだったが、始めから興味を持ってきている雰囲気が伝わる中始まり、質疑や楽器体験では多くの子ども達が手を挙げ希望していた。ホースとじょうごの簡易楽器が紹介できないのが残念だった。

タイトル：高見信行 ようこそトランペットの世界へ

期 日：平成27年2月6日 10：50～11：35

会 場：大阪狭山市立西小学校 音楽室

参加者：4年3組 30人

前日の午後（2組）の様子とは違い、子どもたちに少し集中力が無い様子だったが、3クラス共通して言えた事だが、楽器体験を行うと、その後の演奏を聴く姿勢ががらりと変わり興味を持ってくれたのが明白だった。他のクラスより「どのようにして音が鳴るのか？」など質問事項を多くし対話を深める。最後には音楽会で練習していたという「宝島」を全員で合唱して終了。



タイトル：高見信行 ようこそトランペットの世界へ

期 日：平成27年2月6日 14：00～15：00

会 場：特別養護老人ホームファヴォーレ

参加者：入所者、隣接施設ケアハウスフレスコ入居者（52名）

ミニコンサート形式で開催。普段からもよく歌われているとのことで、「川の流れるように」「愛燦燦」「上を向いて歩こう」を合唱。ゴッドファーザーの「愛のテーマ」では年齢的にも懐かしんで聴き入ってくださる様子が伺えた。スタッフの方に感想を伺うと、いろいろイベントを行うが、途中で寝てしまったり、お手洗いに立ってしまう方が居る中で、今回は全くその様な方はおられず、皆さんとても興味を持って聴いて下さった様子に、驚いておられました。



コンサート

タイトル：高見信行トランペットコンサート～ようこそトランペットの世界へ～

期 日：平成27年2月7日14：00開演

会 場：大阪狭山市文化会館 SAYAKA ホール 小ホール（定員：368人）

入場者数：154人

楽器や曲目の説明を交えながら1部はクラシックを3曲、2部では映画音楽も含め6曲で構成。2部のシンコペーテッド・クロックでは客席よりウッドブロックとトライアングルの参加者を募りお客様を巻き込んだの演奏となった。映画音楽ではアーチストの希望によりミラーボールを使用したりと、クラシックコンサートの形にとらわれない自由な発想ができた。終演後にはステージに配置した数種類のトランペットに駆け寄り普段目にする事の無い珍しい楽器を間近に見学する学生の姿も見受けられた。



① 応募の動機・事業のねらい

なかなかクラシック音楽に接する機会の少ない地域の子どもたちに、生の音楽を手の届く間近な距離で親しんでもらいたい。また音楽の楽しさ、素晴らしさを体験することを通し、創造力を育み新しい発見へと導く場を提供したいと考え応募しました。また今回のおんかつ事業で音楽や楽器に興味を持った子どもが将来、演奏者や鑑賞者となりホールへ足を運んでもらえる事へと繋がることをねらいとした。

② 企画のポイント

子どもたちには簡易のマウスピースとホース、じょうごを使っての楽器体験や合唱など、音楽を見る・聴くだけでなく体験・共演する楽しさを感じてもらい、楽器のしくみなども伝えて行きたい。また、普段コンサートに行きたくても外出が困難な方々に、生の音楽を提供する場を設けたいと思い企画しました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

当初小学校へアクティビティの依頼をした際、やはり全員平等に体験させたいとのことで、全校生徒を対象に体育館での開催を希望されました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

小さい会場、手の届く範囲での小人数で親しみやすく行うアクティビティの趣旨をもう一度説明し、クラス単位での開催にご理解頂きました

⑤ 事業を実施しての成果

小学校のアクティビティ終了後には、体験したトランペットを再度使用できる時間を先生にしきりに確認する生徒さんや、コンサート終演後にステージに配置した珍しいトランペットに駆け寄り間近に見学する学生さんの姿など、未来の音楽家の育成に繋がる試みができました。

またおんかつ事業を行うにあたり、コーディネーターさんをはじめ、小学校の先生方、特別養護老人ホームのスタッフの方々等、新しい人脈の繋がりが持てたこと。アクティビティ先では依頼の段階からとても好意的に受け入れて下さり、本当に恵まれた環境で行えました。どの様な催しでも、一人では決して行えず、周りの方々の協力・ご厚意を頂けることの大切さ、ありがたさを改めて実感し、とてもよい経験になりました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

応募段階から時間に余裕があったものの、他の事業などとの同時作業が多く、ゆっくりとアクティビティやコンサート内容について考える事が出来ませんでした。具体的な内容はほぼアーティストやコーディネーターにお任せする形となってしまう、子ども達との合唱共演など、アクティビティ参加の子ども達や保護者の方々がホールコンサートに足を運んでもらえる様な工夫や働きかけが不十分であったと思います。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

特別養護老人ホームでアクティビティを開催した際、スタッフの方が感動して下さり、ホールコンサートへ来て下さいました。やはり広告媒体だけでは伝わらない事を、直接こちらから出向き伝えることで

ホールへの集客に繋がることを実感しました。文化会館として事業を実施する、という事柄だけでなく、こちらから出向き、働きかけ、共に感じてもらいながらホールの事を知ってもらう努力が必要だと改めて感じました。

SAYAKAホールは、南海高野線大阪狭山市駅から徒歩3分というアクセスの良い地に位置している。しかし、クラシックの演奏会における集客には苦戦し、特に現状では観客の年齢層も高めであるため、地域の子どもたちを中心とした聴衆の育成を目指している。

今回のアーティストは、トランペット奏者の高見信行氏。たくさんの楽器を自ら担いで現地に赴くことは、彼のパフォーマンスにおける引き出しの中の1つの強みであるといえる。ピッコロトランペット、バロックトランペット、コルノ・ダ・カッチャ、ホースでつくったお手製トランペット等、これら数種類のトランペットは今回の一連の公演において随所で活躍した。音楽室や舞台上に陳列され、目に入るだけでも関心を引くことは勿論、実際に演奏された時の音の違いもまた興味深い。

ホール担当者の東氏には「トランペットという楽器をとおして音楽の素晴らしさを間近な距離で楽しみ、子どもたちの創造力を育む場にしたい」との思いがあった。その方法として彼女が強く希望したのが、楽器体験の実施である。個別研修で事前に学校を訪れた際、まるで東氏の希望が具現されるかのごとく、凶らずもトランペットのマウスピースが音楽準備室から大量に出てきた。これならばクラス全員に行き渡る分のマウスピースが用意できるのでは、と期待に胸を膨らませ、高見氏との打ち合せの結果、大阪狭山市立西小学校4年生の全3クラスでのアクティビティに楽器体験が組み込まれた。

物を手に持つという行為は、子どもたちにとってそれだけで注意力散漫になりがちなため、全員にマウスピースを配布して体験を行なうことに対しては多少懸念される面もあった。しかし、体験における高見氏の指導は的確で、子どもたちと対話しながら、楽しい雰囲気の中でも意識が途切れることなく実践された。まずはブーツと唇を震わせてみる、次にマウスピースをあててみる、サイレンのように音の高さを変えてみる、といった手順に従い、一人一人が音を出そうと一生懸命に挑戦していた。また、漏斗とホースを使った高見氏お手製のトランペットが披露されると、驚きの声があがった。この体験により楽器への理解が深まり、後半に用意されたネルーダ作曲《コルノ・ダ・カッチャ協奏曲》や、サン＝サーンス作曲《トランペットのためのファンタジー》等のあまり耳馴染みのない曲にも、深く傾注している様子が感じられた。金色のトランペットと同じくらいきらきらと輝いていた子どもたちの好奇心に満ちた瞳が、このアクティビティの成功を物語っていた。

高見氏のコミュニケーション能力の高さと人間的な魅力は、すぐに子どもたちの心をつかんだ。マウスピースをうっかり落としてしまった子どもがいると、それをきっかけとして物を大切にすることの重要性を説く。自分がトランペットをはじめたきっかけや、夢をもつことと努力することの大切さを語る。彼のメッセージは、トランペットの力強い音色とともに子ども達の心に深く響いたのではない。

最後のアクティビティは、外出困難でなかなか普段音楽に触れる機会の少ない特別養護老人ホーム「ファヴォーレ」の入居者の方を対象に実施された。ここでは、《川の流れるように》、《愛燦々》、《上を向いて歩こう》などの愛唱歌をトランペットとともに歌っていただく等、音楽を通じた温かな触れ合いの時間が流れた。

クラシックの演奏会でミラーボールがまわることはそう頻繁にはないだろう。最終日のコンサートには、いつも好評を得られる映画音楽をプログラム中に取り入れてほしいというホールからの要望を受け、ゴッドファーザーの《愛のテーマ》に合わせて会場がキラキラと光るシーンが、高見氏の発案により準備されたのだ。一方で、ソナタやコンチェルトを含む本格的な曲目も組み込まれた非常に充実した内容の演奏会となった。アンケートからも、トランペットのソロという普段はあまり馴染みのないジャンルだが、親しみやすくとても面白かったという声が多く見られた。

市に所在する「狭山池」は7世紀前半につくられた日本最古のため池であるという。現在に至るまで改修を経て使用されるとともに、池の周りにはランニングをする人々も見られ、暮らしの中に脈々と息

づいている様子が窺えた。ホールの活動も、ひとつひとつの積み重ねがその館独自の歴史をつくり、より身近な存在として市民の生活に浸透していくことが望ましい。その先導者たるホール職員の存在とアーティストの力は重要である。御年八十を越える館長の梶井氏は、現場にも度々同行され、「ホールにとって一番の味方となるのは市民。アーティストはそのパイプとなり市民とのつながりをつくってほしい。」と印象深く語った。

実施団体：有田川町教育委員会

実施時期：平成27年2月12日（木）～平成27年2月14日（土）

出演アーティスト：金子 三勇士（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：石垣小学校ミニコンサート

期 日：平成27年2月12日 10：35～11：20

会 場：石垣小学校 音楽室

参加者：4・5・6年生 40人

ピアノ演奏から始まりました。子どもたちは、いきなりの激しい指使いからの音楽に圧倒されていました。それから、金子さんが子どもの頃育ったハンガリーの説明をまじえた自己紹介。次の曲目では、子どもたちをピアノの周りに集めての演奏を行いました。あと2曲の演奏前に、作曲家の説明等を行った後、子どもたちは演奏に聴き入っていました。

タイトル：五西月小学校ミニコンサート

期 日：平成27年2月12日 14：35～15：20

会 場：五西月小学校 音楽室

参加者：全校生徒9人 西ヶ峯小学校10名 保護者・地域の人
11人

今年度で休校となる学校での開催。アクティビティ前には、全校生徒9名と給食交流も実施しました。ピアノはアップライトであったため、カバー全て外して、より音響がでるように実施しました。アクティビティについては、内容は前小学校と同じで実施しました。

タイトル：御霊小学校ミニコンサート

期 日：平成27年2月13日 10：45～11：30

会 場：御霊小学校 音楽室

参加者：6年生 41人

アクティビティについては、内容は前小学校と同じで実施しました。他に小学校の希望により、「ふるさと」の合唱共演を実施しました。子どもたちの熱唱とピアノ演奏が調和された素晴らしい共演となりました。

タイトル：田殿小学校ミニコンサート

期 日：平成27年2月13日 14：45～15：30

会 場：田殿小学校 音楽室

参加者：5・6年生 50人

アクティビティについては、内容は前小学校と同じで実施しました。他に小学校の希望により、「花は咲く」の合唱共演を実施しました。子どもたちの熱唱とピアノ演奏が調和された素晴らしい共演となりました。



コンサート

タイトル：バレンタインデー企画「金子三勇士ピアノキャンドルコンサート」

期 日：平成27年2月14日（木） 14：00開演

会 場：きびドーム 文化ホール（定員：300人）

入場者数：231人

聴衆と奏者が一体感となるように、ピアノを出来るだけ客席に近づけ、また、両端に約40本のキャンドルであたたかみのあるやわらかい光の演出の中実施しました。

コンサートは、迫力あるピアノ演奏と1曲ごとに丁寧な曲目の説明などの会話を交えた内容で、曲自体がより一層身近に感じて、聴き入ってしまったとの感想が多かった。また、アクティビティに参加してくれた子どもたち、保護者が聴きにきてくれたことはうれしかった。

コンサート終了後は、バレンタインデーなので、来場者全員に手作りチョコレートのプレゼントを女性スタッフより手渡しました。



① 応募の動機・事業のねらい

有田川町は、平成18年1月1日、有田川に隣接する吉備・金屋・清水町の3町が合併して、東西に50km・面積351.77km²の広大な町が誕生する。

合併後、本物の文化芸術にふれあう機会の少ない当町において、今後、「有田川町の文化づくり」を目指し、こどもからおとなまで文化や音楽の持つ楽しさと感動を身近に感じてもらうとともに、誇りあるまちづくりの実現を目指していく。

② 企画のポイント

アクティビティにおいては、子どもたちに本物の音楽力を聴いていただき創造力・表現力を育む。

コンサートでは本格的なピアノの生演奏で聴衆と奏者が一体感となり感動を共有できるプログラムで実施していく。又、当日はバレンタインデーの日でもあるので来場者には公民館の料理教室スタッフの手作りチョコをプレゼントする。また、舞台には、地元のキャンドルアーティストによる飾り付けを行うことにより地元芸術文化の振興にもなり、地域の方々と共に一体感を持ってコンサート盛り上げていく。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

他の自主事業同様ホールコンサートの集客に苦勞しました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

通常のチラシ配布以外に、小中学校・保育所、近隣市町村等、数多くの場所にチラシを配布した。又、地方紙・地元駅への掲載等、宣伝を行った。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティでは、迫力あるピアノ演奏と金子さんが自身の経験で子どもたちに夢を伝えたことは、子どもたちに感動とインパクトを与えたと思います。

コンサートでは、「感動した」「素晴らしかった」「曲の説明がよかった」などの感想が寄せられ、コンサート終了時には歓声があがるほどホールが一体感となったことは一定の成果が見られたと思います。ピアノとキャンドルとの調和も聴衆より良かったとの感想が寄せられていた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

コンサートの集客についてはまずまずだったが、今回は4割が町外の方でした。もっと町内の方に生の音楽を聴いていただくように広報宣伝等考えていく必要があると思える。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

コンサートでホールに来てくれた人は満足してくれています。今後は、新しく来てくれる人を開拓していくために工夫していく必要がある。そして、継続的に事業を実施し音楽文化を根付かせ、文化芸術を提供していきたい。

また、音楽だけでなく地域の人や学校等と連携して事業を実施していきたい。

真の演奏には人を引き込む力がある。子どもたちの拍手で教室に迎えられた金子三勇士氏が、バルトークの《オスティナート》を奏で始めると、音楽室は一瞬にして緊迫感に包まれた。ピアニストの金子氏にとっては、有田川町での公演が今年度初めての事業であったが、その確かな演奏技術と落ち着いた佇まいからは、既に玄人の貫禄が感じられた。「クラシックはゆったりとした静かな曲が多い、という固定概念を払拭したい」との彼の思いから、訪れた4校の小学校全てで、オープニングの曲としてバルトークの力強い音楽が演奏された。音楽室のピアノがこんなにも鳴り響くものなのかと、子どもたちは目の前で演奏されるピアノの音色と迫力に驚いた様子であった。

金子氏は、学校でのアクティビティにおいても燕尾服を着用した。これは、他の多くのアーティストが、クラシック音楽は高尚な世界だと敬遠されることを恐れ、できるだけ普段着で演奏することを定番としている昨今のアクティビティにおいては、異例であるかもしれない。彼は自身の取り組みとして、欧州では当たり前に行なわれているというアウトリーチ活動を日本でも普及させたいという強い思いをもっており、子どもたちには「本物の」音楽を聞いてもらいたいと考えている。高度で知的な活動である音楽を、オーセンシティを保ったまま、どのように伝えるかという問題は非常に難しいが、圧倒的な演奏力をもった彼のような演奏家にこそ、その在り方を模索していくことができるのではないかと感じた。

そのため、服装に限らず、今回コーディネーターは彼のスタイルに任せることを第一に尊重しようとしていた。分かりやすく伝える方法を考慮することが重要であることは言うまでもないが、あまりにも「気楽な感じ」という部分のみが形骸化されてしまうと、真の意味での本質的良さが伝わらないという危険性もある。アーティストによってアプローチは様々であっても、クラシック音楽という素材を扱う以上はその重みと本質を理解し、本物の姿を伝えたいという思いがあることに変わりはない。そのような意味においても、金子氏のスタイルはアウトリーチという活動がもつ多様な可能性を示しているように感じられた。

演奏の合間のトークにおいても、金子氏の知性と応用力が発揮された。もう1つの母国ハンガリーについて説明し、6歳で親元を離れ遠い異国に旅立った生い立ちを語ると、子どもたちは尊敬の眼差しで彼を見つめた。学校の先生方は、シャイな生徒が多いのであまり発言は出てこないかもしれないと懸念していたが、いざアクティビティが始まると、金子氏の魅力に引き込まれた子どもたちから積極的に意見や感想が述べられた。

ショパンの《英雄ポロネーズ》の演奏中には、ピアノの周りに集まって思い思いの格好で聴いてもらう、各曲の説明には子どもたちもよく知る身近な例を挙げる、また、リストの《愛の夢》の解説では、「大切な人を想って聴いてみてほしい」という言葉とともに、「愛には色々な種類があるが、そこには必ず優しさがともなう」という深いメッセージを語る。子どもたちは、彼の演奏はもとより、その真剣な言葉にも心を動かされたに違いない。アクティビティの終了後、廊下を歩いていた金子氏は、ある生徒たちの「金子さんも優しさは大切だと言っていたし、あの子に謝れよ」と、友人との仲直りを促す会話を耳にしたという。

最終日のコンサートでは、地元のキャンドルアーティストとのコラボレーションを行い、キャンドル灯りの中で温かみのある雰囲気になりたいという担当者からの希望があった。それにもかかわらず当日の朝まで段取りが明確にならなかったこと等、企画者側の反省点は多い。ホールには、この事業の主催者として、アーティストに全てを任せるのではなく、共に生み出そうとする積極性がもう少しあると良かったかもしれない。終始コーディネーターからの指示を待ちすぎると、結果的に得られるノウハウも半減してしまい、この事業を十分に活用しきれていないということになる。

今回のおんかつは偏に金子氏の演奏力と人間性に支えられて実施することができたが、ホールがこれから様々なアーティストと関係性を築いていく上で、本事業から得られた教訓を今後に活かし継続して行ってほしい。

実施団体：公益財団法人真庭エスパス文化振興財団

実施時期：平成26年9月18日（木）～平成26年9月20日（土）

出演アーティスト：高見 信行(トランペット) 田村 真寛(サクソフォン) 城 綾乃(ピアノ)

アクティビティ

タイトル：

期 日：平成26年9月18日（木） 10：30～11：30

会 場：社会福祉法人 蒜山慶光園 食堂

参加者：60人

ホールへなかなか足を運べない施設の皆さんへ音楽を届けました。本格的なクラシックに加え、「川の流れるように」や「夕焼け小焼け」のような曲も入れることで歌を歌ったり踊ったり皆さんは感じるままに音楽を楽しんでくださいました。表情の変化や集中力の高まりに施設の職員の方が驚かされていました。



タイトル：

期 日：平成26年9月18日（木） 16：40～17：40

会 場：真庭市立久世中学校 吹奏楽部 音楽室

参加者：31人

ミニコンサートではトランペットとサクソの名曲を聴いていただきました。サプライズ共演も計画し、プロの音を間近で聴くことにより生の音の素晴らしさを体感してもらい、普段親しんでいる音楽の世界を広げ、自身の意欲向上や、他の楽器や音楽への興味を引き出せるものになりました。



タイトル：

期 日：平成26年9月19日（金） 10：00～11：00

会 場：社会福祉法人 秋桜会 コスモスの園 食堂

参加者：70人

ホールへなかなか足を運べない施設の皆さんに音楽を届けました。蒜山慶光園の皆さんと同様、歌を歌ったり感じるままに音楽を楽しんでくださっていましたが、歌謡曲や童謡ではないクラシックの曲の中にも入り込んでいる感じを受ける方がいらっしゃったのが印象的でした。



タイトル：

期 日：平成26年9月19日（金） 19：00～20：00

会 場：真庭市消防団ラッパ隊 エスパスホール舞台

参加者：32人

至近距離でプロ奏者の生の音を聴くことに緊張されていた様子でしたが、純粹に音楽を楽しんでいただくことができました。また、終了後、積極的にアーティストとのコミュニケーションを取るなど、トランペットやサクソに興味を持っていただくことができました。



コンサート

タイトル：音楽ってスバラシイ♪トランペット&サックスの魅力満載コンサート～あなたの中の何かが目覚めるかも?!～

期 日：平成26年9月20日（土） 19：00開演

会 場：久世エスパスセンター エスパスホール（定員：501人）

入場者数：222人

トランペットとサックスそれぞれの魅力を伝えられる曲が盛りだくさんで、それにアーティストお二人の楽しいトークも加わって、音楽に親しみの無かった方にも“音楽ってスバラシイ”と感じていただけました。



① 応募の動機・事業のねらい

クラシック公演の集客が厳しい中、興味のない方にどうすれば音楽に親しんでいただけるかと考える中で、的を絞ったアウトリーチとホールコンサートが一度に開催できることが魅力でした。

② 企画のポイント

ホールへ来たくても来られない方・なかなか足を運んでいただけない方へのアウトリーチで、改めて音楽の良さを感じていただくこと、興味のない方へ関心を持っていただくことがポイントでした。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

中学生には、今自分たちが慣れ親しんでいる吹奏楽だけでなく、もっと世界を広げてもらうにはどうしたらよいか、生の音が素晴らしいものかどうかということはどうやったら伝えられるか、また、ラッパ隊との共演を具体的にどのような形にするかを悩みました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

中学生に対しては、アーティストのお二人に、作曲家や曲の歴史を話していただくこと、特殊な奏法を間近で体感してもらうこと、サプライズ共演を取り入れた内容にしました。ラッパ隊の方との共演は、特別に楽譜を作っていただき、アンサンブルにすることでクリアしました。

⑤ 事業を実施しての成果

福祉施設の皆さんには、思っていた以上に音楽を楽しんでいただきました。中学生には、プロが奏でる生の音の素晴らしさを体感してもらい、意欲向上や他の楽器や音楽への興味を引き出しました。ラッパ隊のみなさんにはアクティビティで純粋に音を楽しんでいただき、コンサートでのアーティストとの共演では達成感も感じていただけたようで、ホールを身近に感じていただくきっかけ作りができました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

今回は、初めての経験で手さぐりの状態でしたが、このように的を絞ってアプローチすることはとても効果があると実感しましたので、とにかく、続けたいと思います。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

毎回、集客には苦勞しますが、今ホールに足を運んでくださっている方以外にも本当はもう少し音楽が好きの人、聴いてみたいと思っている人はいるような気がします。魅力ある事業を企画することはもちろんですが、交通の問題や料金設定など真庭市の状況にあった取組をするために、もっと各所とも連携していかなければと感じました。

今回のおんかつの主催者である公益財団法人真庭エスパス文化振興財団は平成24年度に地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞している公共施設ですが、実際に今回のおんかつに参加し、なぜこの施設がこの賞を受賞した理由がよく分かりました。施設として人が集まる場所とイベントがあり、人が集まったことでの人間の関係、コミュニケーションが既にできている場所だったからです。コンサート以外にもジュニアオーケストラ事業、新日本フィルハーモニー交響楽団との長期に渡る連携、ホールでのフリーマーケット、スタッフ自らが変装する肝試し（お化け屋敷）大会、そしてビアガーデンまでやってしまう企画力と行動力。買い取りの公演でなく地域をよく知るスタッフ手作りのイベントを通じてホールに人が集う。肝試しでホールに来る人も、ピアノリサイタルを聞きにホールに来る人も、ホールのロビーで遊んでいる子供も同じ。そこに優劣はありません。ホールとは建物ではなく、そのホールに集う人の集まりだという思いを改めて実感しました。

4回のアクティビティのうち2回は蒜山慶光園、コスモスの園という障害者入所施設でミニコンサートを開催しました。エスパスとしては障害者を対象とした事業は初めてでしたので演奏が始まるまではスタッフは緊張気味でしたが、いざコンサートが始まるとアーティストの安定感のあるトークと演奏で、その心配は無くなりました。蒜山慶光園では少しびっくりする出来事が。サクソフォンの田村さんが演奏するタンゴに併せて、入所者の方が踊り出し、ステージを通り抜け、ステージ横のスペースですずっと踊っていました。音楽を聞いた感情が自然と身体に現れたようです。このようなコンサートでは楽器や演奏者に余程の危険がない限り、そのような出来事は止めない方がよいですね。また、よく考えると音楽と向かい合うときに椅子にじっと座って聴いているという一般的なコンサートのスタイルの方が、人間と音楽の歴史を考えると異常だということに気付きました。我々（主催者および音楽家）は、このような出来事を通じて現在のコンサートの在り方が本当に良いのか、それしかやり方が無いのかを疑問に持つことが大事だろうと思います。

また真庭市立久世中学校吹奏楽部でのアクティビティをおこないました。吹奏楽部の生徒を対象にしたコンサート。あくまでもコンサートを開催し、楽器のレッスンやレクチャーではありません。このことは「おんかつ」の一貫したコンセプトであり、レッスンをしてしまうと、先生と生徒の関係、つまり評価する側とされる側の関係に陥りやすくなってしまいますからです。レッスンの要素をなくすことで音楽家と生徒が一人の人間として音楽を通じた交流が可能になります。ちなみに私の経験から言うと、正しい演奏方法などありません。自分のやりたい音楽、出したい音、なりたい人に直に触れることができれば、音楽はできます。正しい方法というのは、その結果でしかありません。今回は最後に音楽家2人が合奏に入っただけの共演になりましたが、プロの音楽家の隣で演奏することは生徒にとって何より勉強になり、またいい思い出になったのではないのでしょうか。

そして何よりも特徴的だったのが地元消防団のラッパ隊との共演でした。消防団のラッパ隊は音楽隊ではなくボランティアで消防団活動の一環として、参加されているものです。いつもは消防団の行事で信号ラッパを吹いている方たちにプロの音楽家と共演し楽曲を演奏して欲しい。会場担当者のアイデアです。アクティビティ、コンサートで共演をしたのですが、印象的だったのは、それぞれに集合した時の消防団の方の表情です。初めのアクティビティの際は、仕事帰りのお疲れの時間でもあり「ステージの上に乗せられて、いったい何をやらせられるのか」「信号ラッパはできるが楽曲が演奏できるのか」という表情でした。しかしアクティビティでのコンサートと共演を終えた、コンサート当日のリハーサ

ル時には、「これからコンサートをするぞ」という感じの、何か楽しそうなワクワクした雰囲気になっていました。「同じラッパを吹いた仲」ではありませんが音楽の人を繋ぐ不思議なパワーを感じた瞬間でした。そしてコンサートの共演では、これまでに聞いたこともない、例えるならば水牛1000頭が同時に鳴いたようなラッパの響きが生まれました。これまでに誰も聞いたことのない音が生まれる瞬間に立ち会え、とても幸せな時間でした。ある意味、仕事帰りや休日に社会人（しかも合唱団や吹奏楽団のメンバーのような音楽愛好家ではない。）を引っ張り出しているのです、お節介なことなのかもしれません。でもこのお節介がなければ、この音楽を通じたワクワク感を消防団も観客も体験することはなかった訳です。よく考えれば音楽による感動や唯一無二の感覚を多くの人に体験してもらおうという、所謂アウトリーチの発想自体、お節介なことなのです。ですから我々は意識的に勇気を持ってもっともっとお節介になるべきだと感じました。

普段コンサートを聞きにホールに足を運ばない方にとっては、クラシックのコンサートは異質のものに感じるかもしれません。しかし今回の真庭市でのおんかつを振り返ってみても分かるように、異質なものが出会ってみると面白いのです。クラシック音楽の啓蒙活動の多くがクラシックを異質なものと思っている人をどのように、こちら側のクラシックの世界に近づけるかということに注目していますが、異質なものを異質なまま共存させる、懐の深さが本来、芸術にはあるはずで、むしろその異質との出会いが今日まで芸術を発展、存続させてきたのです。その異質なものを受け止めるという当たり前の感覚を私はもっと身に着けなければと今回のおんかつで思いました。そしてその異質なものを結びつけるためのきっかけ「お節介」が大事。お節介な公共ホール、お節介なアーティスト、お節介なマネージャーを目指しましょう。そのためにおんかつが果たせる役割はまだまだあると感じています。

実施団体：和気町教育委員会

実施時期：平成26年12月17日（水）～平成26年12月20日（土）

出演アーティスト：廣田 美穂（ソプラノ） 中井 亮一（テノール） 高橋 裕子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：佐伯中で本物の歌声を

期 日：平成26年12月17日（水） 10：50～11：35

会 場：和気町立佐伯中学校 音楽室

参加者：第1学年生徒28名・教員5名

♪乾杯の歌(ヴェルディ)で幕開け。中学生の反応に主催者は気がかりだったが、2名の声や衣装に生徒は目を丸くして聴き入っていた。ここで特記すべきは音楽担当教諭から候補曲をもらったこと。歌の経験者であり、かつ生徒を熟知する先生より候補が上がり、プログラムに加えたことで中学生の心をグッと引き寄せたことはいまでもない。また、地域住民へも本事業を周知するため、地元新聞社の取材をここで入れ、コンサートへと繋げていった。

タイトル：サエスタでオペラ歌手の歌声を

期 日：平成26年12月17日（水） 15：00～16：00

会 場：和気町カラオケ連絡協議会 学び館「サエスタ」大ホール

参加者：和気町カラオケ連絡協議会会員33名・施設利用者4名

地元カラオケ愛好者たちで自主組織している平均年齢65歳の団体。こうした団体へ仕掛けることはおんかつ史上初めてだったらしい。オペラ歌手に歌謡曲を依頼することが良いのか悪いのかと迷いながらも、日本の歌を中心に!!と依頼。♪瀬戸の花嫁(小柳ルミ子)などの情緒豊かな歌声に、参加者たちは自然と口ずさみ、涙をにじませながら聴かれる方もいた。ここで特記すべきは、アクティビティ後に茶話会(約1時間)を入れたこと。アーティストと自由に会話する時間を設定したことでコンサートへの集客へと繋がった。

タイトル：佐伯小から世界へ歌声を

期 日：平成26年12月18日（木） 10：50～11：35

会 場：和気町立佐伯小学校 体育館

参加者：第4・5・6学年児童44名・教員6名

音楽室が手狭なため体育館で実施。参加学年も高学年とした。調律師のアイデアで机を縦向きに立てて反響板を模してホールの雰囲気を作った。“3つの小”とは異なるが、広いスペースを利用してオペラさながらの動きを入れながらのアクティビティだった。♪ふるさと(文部省唱歌)で児童と共に歌うコーナーでは、アーティストの楽しい発声指導に児童はのめり込み、一生懸命きれいな声を出そうとしている様子が伺えた。グッと距離感が縮まり、名残惜しそうにアーティストたちを見送っていた。



タイトル：山田小から世界へ歌声を

期 日：平成26年12月18日（木） 14：00～14：45

会 場：和気町立山田小学校

参加者：第3・4学年児童15名・教員4名

座席が1列で15名と少ない人数、近い距離でのアクティビティを実施。優しく語りかけるようにトークするアーティスト、授業を聴いているかのように頷く児童。表情が行き交う音楽室。まさに“3つの小”の利点を強烈に感じた時間だった。♪猫の二重唱(ロッシェニ)では、最初は可笑しくて笑っていた児童が“猫語”の歌声でのやり取りにだんだんと入り込んで真剣な顔へと変わっていく様子が印象的だった。授業後すぐに感想を兼ねた手紙を書いてくれており、翌日アーティストに渡した。コンサートへのエネルギーとなっていたようだ。



コンサート

タイトル：サエスタから世界へ歌声を～オペラの声で聴く世界の歌・日本の歌

期 日：平成26年12月20日（土） 13：30開演

会 場：学び館「サエスタ」 大ホール（454席）

入場者数：181人

第1部はオペラを中心とした世界の歌、第2部は日本の歌と、明快で聴きやすいプログラムだった。アクティビティ参加者も前日に前売券を購入しコンサートに駆けつけるなど、地域交流プログラムとコンサートのセットは大きな効果があったと感じた。ロビーにはアクティビティの様子をプリントアウトしたものを掲示した。来場時に家族や友人などと写真を前に先日までの出来事を話している様子もあった。歌詞が付いてくる声楽家のコンサートは、その曲が持つ情景や心情が聴衆へと伝わりとても素晴らしいコンサートとなった。



① 応募の動機・事業のねらい

人口約15,000人で高齢化率35%を超える本町は生涯学習センターの中に454席の音楽ホールを有し、各種習い事等で地元住民相互の発表会やピアノ発表会等での貸館で多くの稼働がある。しかし、自主事業に於いては企画制作から実施に至るまでのノウハウを有している専門職員が配置されておらず、毎年手をこまねいていた。各種文化団体・学校等と相互連携した文化行政の在り方、地域住民を巻き込んだ事業計画も模索している絶好のタイミングだった。この応募で、今年度の自主事業を計画すると同時に、ホール職員（行政職員）の企画・制作能力の向上と、次年度以降に繋がる何かを得たいと思い応募した。

② 企画のポイント

小生が管楽器経験者ということもあり、当初は楽器奏者を希望していた。しかし全体研修会のプレゼンを拝聴しながら本町をイメージしていると思いが変化した。前述したホール利用者を切り口としたアクティビティとコンサートを実施したいと思った。活発な子ども、子どもに連れられてくる親、元気なお爺ちゃんお婆ちゃん、老若男女が一堂に集う時間を作り出したいと思った。そうだ！大人向けに“和気町カラオケ連絡協議会”はどうだろう？そうだ！“オペラ歌手”にしよう！と思い、前年度提出した企画書とは全く異なるものを企画したが、そこからのブレは全く無く進めることができた。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

I オペラ歌手に対しての、いわゆる“扱い方”のノウハウを持ち得ていなかった。乾燥する冬、寒い冬、冷たい鍵盤、冷え切ったアクティビティ会場の中、どのようにお迎えすればよいのか等たくさんの課題や準備の苦労があった。

II お二人とも業界では著名な素晴らしいソリストだが、本町の田舎住民からすると著名でもない。どのようにお二人のすごさを伝えて集客をするかの課題があった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

I 役所内の加湿器を借用し、アクティビティ先の控室、宿泊先等あらゆる場所に設置して湿度管理に気を遣った。また、ピアノの鍵盤上にカイロを置いて鍵盤を温めておく等、コーディネーターよりたくさんのおもてなしの極意を伺った。

II チラシは片面印刷しかできないという少ない予算のない中だったが、小さな字だがプロフィールを入れた。また時期に合わせてXmas調なカラーにして楽しさを演出した。また、報道各局の後援を得て町を越えた方面で宣伝した。地元新聞社によるアクティビティの記事掲載も最後の推しには効果的だった。

⑤ 事業を実施しての成果

“おんかつ”が持つ意義や役割、効果を肌で感じ、鳥肌の立ち続けた4泊5日だった。“3つの小”を意識しながら創ったアクティビティで、私は参加者の様子を始終見ていた。第一音目と同時に緊張から驚愕の表情へと変わる瞬間、次第に頬が上がり優しい顔へと変わる時間、もっと聴きたい!!と名残惜しそうに幕を閉じる時。全ての時間が最高だった。また、教育委員の視察も実施することができ、言葉では伝わらない現場を見せれたのも大きかった。そして長丁場となるこの事業、コーディネーターや(一財)地域創造、当館職員の力が集結したからこそ遂げることができた成果があったことは言うまでもない。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

今回のアクティビティではアーティストと参加者の交流が少なかったかもしれない。結果、男女異なる声や、様々な言葉の曲を聴くことができたという利点はある。次年以降、おんかつ支援を実施する時には交流を主にしたアクティビティにも挑戦したい。今からアーティストの情報を仕入れながら新年度を迎える必要がある。集客については永遠ついてくる課題だと思う。しかし、この事業を続けることによって、潜在顧客の掘り起しやサイレントパトロンへの働きかけを続けていき、ホールの観客へと繋げていきたい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

受入れた学校からは高く評価され、次年度以降も継続実施してほしいという要望が寄せられている。社会教育課職員が進める文化行政のため、町が示す振興計画・文化施策から逸脱しないこと。そして、地域住民の要望を敏感に仕入れること。その中で、担当者の持つ能力を過分に発揮しながら進めていきたい。本町としてもこの声を予算化し、次年度以降継続的な事業が進められるように邁進していきたい。

温暖な気候のイメージが強い岡山県。和気町おんかつは、そんな岡山県の天気のような、温かく穏やかな人々とのふれあいが印象的なおんかつだった。

和気町は岡山県の東南部に位置する人口1万5千人の山間の町である。平成18年に和気町と佐伯町が合併し、現在の和気町となった。学び館サエスタは、旧佐伯町に位置している。

今回のおんかつでは、カギとなった言葉があった。それは「ふるさと教員」「町づくり」の2つである。

おんかつ担当の盛さんは地元のアマチュア吹奏楽団でトロンボーンを演奏したり、時には指揮をしたりと音楽活動を活発にされている方で、今回のおんかつではサエスタチームをひっぱり名リーダーであった。

和気町では、子どもたちに郷土の歴史や文化に興味をもってもらおうと、地域のことを専門に教える教員「ふるさと教員」制度を採用しており、フィールドワークなどを通して子どもたちに自分の故郷について理解を深めてもらう活動を行っている。盛さんをはじめ学び館サエスタの職員数名もこの「ふるさと教員」として学校現場で子どもたちと関わっており、アクティビティ先となった小・中学校とのやりとりがとてもスムーズであった。

学校関係のアクティビティ先は3ヶ所、佐伯小学校、山田小学校、佐伯中学校であった。アーティストは声楽の2名、ソプラノの廣田美穂さんとテノールの中井亮一さん。アーティストダブル派遣の為、学校アクティビティでの原則である45分では時間が足りないのではないかという話が出たが、協議の結果45分という原則は変えないで実施することになった。

オペラ歌手の歌声を子どもたちにどうやって伝えるか。原語で歌うオペラ歌曲ではどのような場面の歌なのか解説を入れたり、子どもたちが聞いたことのある日本の唱歌や、歌詞のないプッチーニ作曲の猫の二重唱などを入れたりなど変化に富んだ内容で、オペラ歌手の「声」を感じてもらうしかけが45分に詰め込まれた見事なプログラムであった。

子どもたちにとって普段出会うことのないオペラ歌手との出会い。教室に入ってきた子どもたちはとても緊張していたが、廣田さんと中井さんの優しい人柄が感じられる話し方や、猫になりきっての演奏などで、次第に心がほぐれていくのが印象的であった。建物の構造上、音楽室での実施ができず体育館での実施となった佐伯小学校では、雪が散らつく程の寒さであったが、サエスタの皆さんと先生方のおかげで滞りなく実施することができた。

残り1つのアクティビティはカラオケ連絡協議会の皆さんへのアクティビティ。和気町では合併前からカラオケ団体が多く存在しそれぞれの地域で活動をしていたが、合併を機に連絡協議会を作り、年に2回サエスタで発表会を行い交流を図ってきた。発表会のタイトルは「人づくり・仲間づくり・町づくり カラオケ発表会」。名ばかりの町村合併ではなく、そこに住む人々も合併を機に交流を深め、町を一つにしようという想いのもとカラオケ連絡協議会が作られたのだそう。おんかつとも通ずる「町づくり」の想いを熱く語って下さったカラオケ連絡協議会の会長さんのご協力のもと、おんかつ史上初となるカラオケ愛好家の皆さんへのアクティビティを行った。

プログラムは「青い山脈」「上を向いて歩こう」など参加者の皆さんにとって聴き馴染みのある日本の歌を取り上げ、マイクを使わないオペラ歌手の歌の美しさを感じてもらう工夫をした。アクティビティ後には、アーティストとの茶話会を行い、より深い交流を図ることができたのも印象的だった。

コンサート当日。温暖な岡山には珍しくとても寒い日で集客が心配されたが、開場時間よりかなり前からホワイエに人が集まり始め、コンサートに対する期待感が感じられた。プログラムはオペラ歌曲から日本の歌までバラエティに富んでおり、オペラ歌手の歌声を存分に楽しめる内容であった。また「乾杯の歌」や「手紙の二重唱」など廣田さんと中井さんの共演もあり、アーティストダブル派遣ならではの

の贅沢な公演となった。

今回のキーワードとなった、「ふるさと教員」と「町づくり」。滞在中に食事をしたどのお店にもコンサートのポスターが貼られ、アクティビティ先のどの学校の先生も子どもたちも温かく迎えてくれたのは、日頃ホール職員との良い関係性があったからこそである。アクティビティ先にカラオケ連絡協議会を選んだのも、担当の盛さんの和気町に対する想いが強く表れていると感じた。常に町のことを考え、町の人と関わっていなければ今回のおんかつは成立しなかったと思う。

素晴らしいチームワークのチームサエスタ。このチームでしかできない、まさに手作りの和気町おんかつであった。今後も学び館サエスタから、町づくりの輪を和気町全体に広げて欲しいと思う。

実施団体：新居浜市

実施時期：平成26年11月20日（木）～平成26年11月22日（土）

出演アーティスト：高見 信行（トランペット） 小泉 耕平（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：ママと一緒に トランペットコンサート

期 日：2014/11/20 13時～14時

会 場：こにしクリニック産婦人科 待合ホール

参加者：33人

こにしクリニック産婦人科において出産予定の方や出産された方を対象としてお子さんと一緒にミニコンサートを実施。ホールの雰囲気や「子育て中のママ」という対象者に合った曲が演奏された。小さい子供たちもママのお膝の上で、曲に合わせて足を動かしたり、トランペットの音に耳を澄ましている様子が見られた。

タイトル：秋の夕暮れコンサート IN 別子山

期 日：2014/11/20 18時～19時

会 場：別子山公民館 ホール

参加者：地域住民28人

市街地から車で約1時間のところにある別子山公民館でのアクティビティ。地域住民は170名でそのほとんどが高齢者であることから、参加者数に不安を抱いていたが、公民館の協力もあり、たくさんの方におこしいただいた。高見さんから別子山に来る道中の見た紅葉のお話や、コンサート後の帰り道に「星を見よう」と思うような曲（「見上げてごらん夜の星を」）も演奏され、夕方のひとときを過ごした。

タイトル：トランペットってカッコいい

期 日：2014/11/21 10時35分～11時20分

会 場：多喜浜小学校 音楽室

参加者：6年生35名

6年生を対象としたアクティビティ。トランペットについての説明（トランペットは簡単な仕組みなんだよ。）の時間や、2名の児童によるトランペットの体験（見事音が鳴り拍手喝采であった。）もあり、わくわくするような授業であった。演奏の間には高見さんや小泉さんのトークも交えながらトランペットとピアノの響きに包まれた。最後にコンサートで共演する「この星にうまれて」をトランペットと共に歌ってもらった。子供たちがとても楽しそうだったのが印象的であった。



タイトル：トランペットってカッコいい

期 日：2014/11/21 14時5分～14時50分

会 場：新居浜小学校 音楽室

参加者：6年生35名

6年生を対象としたアクティビティ。トランペットについての説明（トランペットは簡単な仕組みなんだよ。）の時間や、2名の児童によるトランペットの体験（見事音が鳴り拍手喝采であった。）もあり、わくわくするような授業であった。演奏の間には高見さんや小泉さんのトークも交えながらトランペットとピアノの響きに包まれた。おとなしい子が多いと聞いていたが、トランペットに対しては興味津々で、「トランペットがどうしたら音がでるのか」の質問にはたくさんの児童が積極的に挙手していた。



コンサート

タイトル：響きを感じて 高見信行トランペットの調べ

期 日：平成26年11月22日（土） 14：00開演

会 場：新居浜市市民文化センター 中ホール（定員486名）

入場者数：345人

高見さんのトランペットと小泉さんのピアノの演奏とプラスお二人のトークを交えたコンサート。演奏だけではなく、それぞれの曲についての解説やお気持ちなども聞かせてもらえ和やかな雰囲気、ホール中がトランペットとピアノの響きでいっぱいになった。1部の最終には多喜浜小学校児童との共演、2部の冒頭には新居浜市の東平地区の映像に高見さんのトランペット演奏のコラボをしていただいた。本市で建設中の総合文化施設のプレ事業としても実施したため、プログラムには総合文化施設の概要についてのチラシを挟み込み、ロビーにはパネル展示もおこなった。



① 応募の動機・事業のねらい

本市では、芸術文化を通じて様々な人が集い、出会い、交流することで、文化の創造と次世代のひとづくりの場となることを目指す総合文化施設が平成27年にオープンする。この施設を中心として、身近な場所で市民が芸術文化に親しむ機会を提供したいと計画しており、この公共ホール音楽活性化事業のプログラム実施することにより、企画の在り方や進め方について学びたいと思った。

② 企画のポイント

アクティビティ・コンサート共に、同じ時間、空間を共有する方々が、素晴らしい音楽を体験し、頭の中でいろいろ考えるのではなく、純粹に「すてき！」「すごーい！」「かっこいい！」と思えるものにしたかった。そして、心も身体も会場全体も音楽で響かせたい、感動を共有してほしいと思った。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

コンサートでアクティビティ先の小学校児童と共演をさせていただいたが、実現に向けて、小学校との調整にかなりな時間を割いたこと。また、コンサート時に新居浜市の映像をバックに演奏をお願いしたが、映像の内容がなかなか決めきれなかったこと。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

児童との共演は、たくさんの児童が「やりたい！」とってくれたことで、実現が可能となり、当日まで学校と電話や文書で詳細なやり取りをおこなった。映像に関しては、映像を投影する意味合いについて自分なりに再考した。その結果、地元のCATV業者から提供していただくことができた。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティを体験した小学生のキラキラした目を見て、自分の目の前で演奏体験は何にも代えられないものだ実感した。「聴いて・見て・触れる」ことによる感動体験をしてもらえたことがすべてだと思った。また、こにしクリニックでは、ぐずっていた赤ちゃんがトランペットの音と共に静かになったり、身体でリズムをとったりしている姿も見られ、本当に音楽って素晴らしいと思った。更には、こにしクリニックでのアクティビティの参加者がコンサート当日にご夫婦でお越し下さり、親しくお話しできたことがとても嬉しかった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

コンサートに関しては、チケットの販売が伸び悩んでいたため、自治会への回覧板、学校へのチラシ配布、HPでの広報など多種多様なことを行った。その結果たくさんの方に足を運んでいただいたが、小中高校生や若い世代の方の入場が少なかった。今後は、若い世代に足を運んでもらえるように、広報手段についても検討していきたい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

地方都市においては、身近な地域で鑑賞できるよう、公共団体が主催する芸術文化公演が必要とされていると実感した。ただ、本市の市民性もあるが、「チケット代金は安く」とか「無料の駐車場を準備してほしい」などという要望が必ずでてくる。このような条件整備も検討しなければならないと思う。

愛媛県新居浜市での“おんかつ”は新しく開館予定の新居浜市総合文化施設開館イベントとして開催されました。“にぎわいにあふれたまち”を目指して、現在JR新居浜駅前に建設中の新しい総合文化施設は平成27年度中にオープン予定で美術館、コンサートホール、交流センターを持っています。打ち合わせの際に総合文化施設準備室の方が地域住民、駅利用者が自然と集える場所にしたいと言っていたことが記憶に残っています。私は非日常の特別な日の舞台としての文化施設と同時に、またはそれ以上に身近に、日常生活の中にある文化施設が必要だと思っています。そのような場所に人が集い、交流が生まれ自然と文化が生まれていく。今回、駅の待合室には電車を待つ多くの人、特に高校生がたくさんいましたが、彼ら、彼女らが次の電車までの20分でも30分でも新しい文化施設を利用し、自分たちの場所だと思ってくれるかもしれないと考えると、その可能性にワクワクしてきました。

そのような新しい文化施設、そして文化事業のアピールのためにトランペット奏者・高見信行さんとピアニスト・小泉耕平さんによるアクティビティ、リサイタルを行いました。アクティビティは小学校でのアウトリーチ2回とコンサートホールに足を運びにくい方のためのミニリサイタル2回の計4回を実施しました。こにクリニック産婦人科では入院、通院しているお母さん、子供（赤ちゃん）、近所の方を対象に開催。院内の清潔で明るい待合ホールにはトランペットの明るい響きがよく合っており、暖かい雰囲気の良いコンサートとなりました。当初は心配していましたが子供もトランペットの大きな音にも驚かず、落ち着いて聞いていました。もう一つのミニリサイタルはかつて銅山で栄えた別子地区で行いました。新居浜市街地からは車で90分ほどかかる地域のため、そう頻繁には市中心部の文化施設の催しには足を運べません。しかしかつて新居浜の、日本の近代化を支え、現在も新居浜のシンボルであるこの地でのリサイタルを開催したいという市担当者のアイデアが実現しました。この回ではプログラムにニニ・ロツソの「夜空のトランペット」やドビュッシーの「月の光」を演奏したのですが、別子山の山の間隙から見える星空と音楽がシンクロし、選曲の妙を感じました。また何種類かのトランペットやミュートを使い分け音色に変化を付けていたことも効果的でした。どうしても金管楽器のソロリサイタルでは音色や音量で単調になりやすいため、今回のように選曲や音色を工夫することが大事ですね。多喜浜小学校、新居浜小学校でのアウトリーチはトランペット演奏体験や学校の備品のトランペットでの演奏など、子供たちを飽きさせない工夫があり、よいアウトリーチでした。ひとつ提案するとすれば今回に限らないことですが、音楽家として子供と接する前に、一人の人間として関係性を築くことができないうちからかと思いました。例えば最初に音楽家として紹介され、招かれ子供たちの前に出るのではなく、おもむろに登場して、子供たちの輪の中に入り一曲演奏。その後、なんとなく自己紹介を始めるとうのも良いかもしれません。衣装を着けて、紹介されて、楽器を持ってという、いつもの形式ではなく、リラックスして、普通の人間として子供と出会ってみるという選択肢ができれば、さらに豊かなアウトリーチになるのではと思いました。

新居浜市市民文化センターでのリサイタルは映画音楽からハイドンの協奏曲までトランペットの魅力を活かせるプログラムでアーティストの表現力の幅を感じさせるよいコンサートでした。アクティビティ先の小学校の児童との共演や別子山の映像を映写しての演奏など担当者のアイデアを交え、地域の特色も過度にもなり過ぎず、物足りなくもなくよいバランスで地域の色が出ていたと思います。

お母さん、子供、小学生、別子地区と複数の要素がありましたが、それらが音楽を通じて地域と、ホールと繋がることのできた事業でした。地域の方の集まる文化施設への布石としての“おんかつ”として十分な成果が得られました。新しい文化施設が冒頭でも書いたように地域の方の日常の施設に更に近づいたのではないのでしょうか。

実施団体：太宰府市

実施時期：平成27年1月15日（木）～平成27年1月17日（土）

出演アーティスト：森岡 有裕子(フルート) 岡本 知也(ピアノ)

アクティビティ

タイトル：

期 日：平成27年1月15日 10：40～11：25

会 場：福岡県立太宰府特別支援学校 音楽室

参加者：肢体不自由部門（中高生）生徒・保護者・教員 約50名

特別支援学校の生徒たちが習っている曲（ボレロ・Let It Go）を織り交ぜながら、楽器体験をする時間を設けた内容であった。普通校の子どもたちと違い自由な感情表現が難しい生徒が多く、興奮して声を上げる生徒や楽器体験では最初恥ずかしがる生徒も多かったが、結果的に全員が楽器に触れる時間を作ることができ、Let It Goと一緒に歌う生徒もいるなど、とても充実した様子であった。

タイトル：

期 日：平成27年1月15日 14：00～14：45

会 場：太宰府市立国分小学校 音楽室

参加者：6年1組 33名

給食を一緒に食べた後のアクティビティで、また事前に森岡さんからのメッセージビデオを見せていたので、児童たちも話しやすい雰囲気であった。聞いたことのある曲（ボレロ・カルメンファンタジー）や、音を聞いて自由なイメージを作ってもらった曲（クマンバチの飛行・女ヤギの踊り）、楽器体験、涙そうそうの合奏と合唱など盛り沢山の内容であった。

タイトル：

期 日：平成 27年1月16日 10：30～11：15

会 場：太宰府市立国分小学校 音楽室

参加者：6年2組 33名

前日の6年1組と基本的には同じ構成のアクティビティだったが、より「イメージを作る」ことに比重を置くため「カルメンファンタジー」と「クマンバチの飛行」の曲順を入れ替えたり、楽器体験を男女均等に体験させるよう促すなど、前日のフィードバックが活きてより精練された内容になった。国分小6年生の中で最もクラスの雰囲気も良く、関係者全員が納得できる最高のアクティビティだった。



タイトル：

期 日：平成27年1月16日 14：00～14：45

会 場：太宰府市立国分小学校 音楽室

参加者：6年3組 34名

アクティビティの構成は同じ。給食に2組と3組に分かれて入った後のアクティビティであったが、3組担任の先生が体調不良のため不在で児童たちの統率がとれず、自由な発言や楽器体験で他の子を茶化す言動が目立った。またアクティビティの後に市長表敬訪問を入れていて時間の余裕がなく、全体的に急いでいる様子が出ていたため、終了後児童たちから「これで終わり？」といった雰囲気が出ていた。



コンサート

タイトル：プラム・カルコア文化芸術振興事業

森岡 有裕子フルートコンサート ～フルートが奏でるやさしい世界～

期 日：平成27年1月17日（土）14：00開演

会 場：プラム・カルコア太宰府（中央公民館） 市民ホール（定員：602人）

入場者数：440人

エルガー「愛のあいさつ」から始まり、第1部6曲、第2部はアンコールを含め4曲の構成。アクティビティで行った国分小学校の児童や保護者、近隣中高の吹奏楽部生徒等に招待券を出したため比較的若い客層となったが、日本の歌メドレーと一緒に歌う観客も多く、MC等も含めて会場が一体となった素晴らしいコンサートだった。特に森岡さんのリクエストで照明演出にこだわったり、日本の歌メドレーの歌詞の合間に、アクティビティやラジオ出演、食事（ラーメン）のオフショットをスライドにし側壁に投影したりするなど、観客にとっても親しみの湧く演出が出来たので、終演後の即席サイン会にも150人ほどの観客が並んだ。アンケートの回収率も良く、内容的にも絶賛の回答ばかりだった。



① 応募の動機・事業のねらい

積極的に自主事業を行っている近隣他市町のホールと比べ、これまでほぼ貸館業務しか行ってこなかった太宰府市中央公民館の市民ホールであったが、プラム・カルコア太宰府の愛称決定と文化芸術を推進していく市の方針を契機に、自主事業を積極的に展開していくことになり、そのノウハウも併せて学ぶことの出来る本事業を応募するに至った。

太宰府市でもプロによる本物の芸術を鑑賞できる、市民に期待感を持ってもらうホールに今後なっていく第一歩として、事業を終えた後にアーティスト・ホールスタッフ・市民や観客の誰もが満足感を感じる事業を目指す。

② 企画のポイント

おんかつ事業でお招きするうえで、ただ演奏の上手なアーティストではなく、自ら発信し、高めあっているアーティストを希望し、森岡さんに来ていただく次第となった。太宰府市で活動していただくアクティビティやコンサートについても、ただ演奏を届けに行くのでは勿体ないと思い、アクティビティ実施（木・金曜）の同週に森岡さんから対象クラスへのビデオレターを届け、楽しみのイメージを膨らませてもらい、コンサートにおいてもリハーサル見学や終演後のサイン会などを実施。とにかく森岡さんと観客のコミュニケーションの機会を考え、森岡さんのファンになっていただき、また聴きたいと思ってもらえる事業にしていくことを意識した。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

- 市民にとって馴染みのないクラシックコンサートであり、森岡さんご自身に縁がある地域でもないため、コンサートのチケット販売に苦勞した。
- アクティビティの対象は早々と決まったが、おんかつ事業の趣旨や大まかな内容を理解されて受け入れられたわけではなかったので、せっかくのアクティビティの機会を子どもたちにどう生かしていくのか、学校側のリクエストを出してもらったりビジョンを共有したりする点で、当初スムーズにいかなかった。
- 館としてこのような芸術事業を行った経験がなかったので、どこから手を付けていいのか、どのようなスケジュールを組んで進めたらいいのか、すべてが手探りであった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- チケット販売の課題をクリアできたとは言えないが、FMラジオに担当が2度生出演（2回目は森岡さんの太宰府入りの日に一緒に出演。ワンフレーズ生演奏）したり、中高生の吹奏楽部に招待券を出すなど、とにかく知ってもらい、興味を持ってもらうよう行動した。
- アクティビティ対象校の先生と、些細な事でもとにかく連絡を取り、会う回数を増やした。そうすることで徐々に目指すアクティビティのイメージが一致するようになり、実施が近づくにつれて不安がなくなっていった。
- 全体研修で連絡先を交換した他ホールスタッフや前年度おんかつ実施ホール担当者、近隣市町村のホールスタッフなど、色々な方々と連絡を取り、助言をもらいながら進めることができ、とても心強かった。

⑤ 事業を実施しての成果

第一の成果はコンサートに沢山の観客に来ていただき、森岡さんの人柄と演奏の素晴らしさに触れてもらい、また聴きたい、また太宰府に来て欲しいという声を沢山いただいたことにある。一方、森岡さんにも太宰府での5日間を大変満足していただくことができ、充実した事業となった。ホールスタッフとしてもアクティビティを含めてコンサート事業を作り上げる経験をさせていただいた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

- ラジオ出演や新聞の掲載などがチケット販売に明らかに影響していたが、もっと早い時点からマスコミを活用することでチケット販売もスムーズに進んだかもしれない。
- 今年度は成功したと言えるが、今後につながらなければ意味がない。特にコーディネーターが不在の事業で同等のクオリティと成果が出せるほどの経験はまだないので、今年度培ったネットワークなどをうまく生かして事業を行う必要がある。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今年度から事業を展開するようになった太宰府市ではおんかつ以外でも様々なホール事業を展開したが、集客の面ではおんかつがかなり苦戦した事業であった。著名人の講演会や沖縄民族舞踊など歴史や文化を感じ易い事業に比べると、知名度が高いわけでもないアーティストということ差し引いても、歴史都市の太宰府市民にとってはクラシックコンサートの方が縁遠いイベントなのかもしれない。しかし今年度の成功を礎に音楽を太宰府市に根付かせることは可能であり、そのためにはアクティビティの対象を学校だけではなく自治会長を相手にするなど、もっとバリエーションを持った事業に拡げていく必要がある。

<概要>

福岡県太宰府市は、太宰府天満宮を有し、歴史や観光面では全国的な知名度を誇っている。一方、開館から28年を迎える中央公民館「プラム・カルコア太宰府」はこれまで貸館業務を中心とした運営にとどまっていた。今後は市の文化芸術の発信拠点を目指して自主事業を展開することを目指しており、その足掛かりとして「おんかつ」に参加、フルート奏者の森岡有裕子さんとピアノの岡本知也さんを迎えて実施された。

<アクティビティについて>

アクティビティは福岡県立特別支援学校および国分小学校6年生（3クラス）を対象に実施された。特別支援学校では、主に肢体不自由児のクラスを対象にアクティビティを実施。市内中学校にフルートを借りての楽器体験や、フルート演奏にあわせて一緒に歌うアクティビティなどは、各生徒のキャパシティに大きく差があるため懸念もあったが、楽器に触れるだけでも、と実施したところ生徒たちの反応もよく、気に入ったのか握りしめて離さない生徒もいたほどであった。また「Let It Go 〜ありのまま〜」を共に合唱したところ、生徒たちの歌声や笑顔が、学校の先生方やアーティスト、スタッフ陣にとって忘れえぬ感動体験をもたらす結果となった。

国分小学校でのアクティビティは、明るく熱心な校長先生や担任の先生のキャラクターが反映された、素直で明るい児童たちの様子を見て、森岡さんのアクティビティが進化していく様が見られた。「雌やぎのおどり」という曲は音楽で情景が描写されており、最初はストーリーのあらすじを話してから結末を想像してもらおうというスタイルで演奏していたが、回を重ねるにつれてほとんど元の内容は教えず、ほぼ全てを児童たちの想像力に委ねる形へと変えていったところ、ユニークな回答も多く、中には本来の情景をぴたりと言い当てた児童もおり、皆が真剣に音楽を聴いて情景を思い描いていたことが伺われた。

<コンサートについて>

今回は、森岡さん自身が「チャレンジ」と呼ぶプログラム・演出での公演となった。連日ホールでのリハーサルを重ね、音楽に合わせた照明演出をとりいれたり、アクティビティの様子を撮影した写真を投影するなど、様々な要素を詰め込んだステージであったが、結果的に本格派でありながら親しみやすさも感じられる、森岡さんらしいコンサートとなった。

本番中の客席の反応もさることながら、終演後のサイン会では数え切れないほどのお客様が行列をなし、森岡さんと岡本さんに「是非またきてください」と熱心に声をかけるなど、心から楽しんでいただけたことが伺われた。また、アクティビティで訪れた小学校の児童たちや、特別支援学校の生徒や先生方も来場され、再会を喜ぶひとときとなった。

<総括>

太宰府市での「おんかつ」は、太宰府市の担当者である北郷さん、大山さんを始め、太宰府市役所文化学習課の皆さん、アーティスト、スタッフなど、数多くの人がそれぞれの分野を活かしてチームで協働し、同じゴールを共有することの楽しさを強く実感するものであった。企画段階から大変熱い思いをもって取り組んでくださった担当者の求心力の賜物といえる。今回の「おんかつ」が開催地にとって、またアーティストにとって忘れえぬ体験となり、今後の活動への大きなステップとなる事を期待したい。

実施団体：長島町教育委員会

実施時期：平成26年12月11日（木）～平成26年12月13日（土）

出演アーティスト：森岡 有裕子（フルート） 桑原 花子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：公共ホール音楽活性化事業芸術鑑賞会

期 日：平成26年12月11日（木） 13：35～11：20

会 場：伊唐小学校 音楽室

参加者：全児童 29人

最初、フルートの歴史や音のなる仕組みの説明をする。その後2本のフルートを使って実際にフルートの音出しに挑戦する体験コーナーを実施した。また、その間に森岡さんによるフルートの名曲を数曲演奏してもらい、参加者に鑑賞してもらった。最後に、みんなで「翼をください。」をフルート及びピアノの伴奏により演奏してもらい合唱し終了した。

タイトル：公共ホール音楽活性化事業芸術鑑賞会

期 日：平成26年12月11日（木） 14：45～15：35

会 場：獅子島小中学校 音楽室

参加者：全児童生徒 31人

最初、フルートの歴史や音のなる仕組みの説明をする。その後2本のフルートを使って実際にフルートの音出しに挑戦する体験コーナーを実施した。また、その間に森岡さんによるフルートの名曲を数曲演奏してもらい、参加者に鑑賞してもらった。最後に、みんなで「翼をください。」をフルート及びピアノの伴奏により演奏してもらい合唱し終了した。

タイトル：公共ホール音楽活性化事業芸術鑑賞会

期 日：平成26年12月12日（金） 10：45～11：35

会 場：平尾中学校 音楽室

参加者：1年から3年生 45人

最初、フルートの歴史や音のなる仕組みの説明をする。その後2本のフルートを使って実際にフルートの音出しに挑戦する体験コーナーを実施した。また、その間に森岡さんによるフルートの名曲を数曲演奏してもらい、参加者に鑑賞してもらった。最後に、みんなで「翼をください。」をフルート及びピアノの伴奏により演奏してもらい合唱し終了した。

タイトル：公共ホール音楽活性化事業芸術鑑賞会

期 日：平成26年12月12日（金） 13：55～14：40

会 場：蔵之元小学校 音楽室

参加者：4年から6年生 31人

最初、フルートの歴史や音のなる仕組みの説明をする。その後2本のフルートを使って実際にフルートの音出しに挑戦する体験コーナーを実施した。また、その間に森岡さんによるフルートの名曲を数曲演奏してもらい、参加者に鑑賞してもらった。最後に、みんなで「翼をください。」をフルート及びピアノの伴奏により演奏してもらい合唱し終了した。



コンサート

タイトル：森岡有裕子フルートコンサート

期 日：平成26年12月13日（土） 18：30開演

会 場：長島町文化ホール 定員：800人

入場者数：230人

前半5曲、休憩をはさんで、後半3曲と日本の歌メドレー（我は海の子、虫の声、冬の夜、どこかで春が）を演奏する。森岡さんがフルートの楽器の説明や歴史について、説明をしながらコンサート進められました。後半の日本のメドレー演奏の時は、プロジェクターを使い、4アクティビティーの模様を映写した。また、歌詞を映写し、会場の方々に口ずさんでもらいながらコンサートは無事終了した。コンサート終了後、会場ロビーにて、サイン会を実施した。



① 応募の動機・事業のねらい

町内の小中学生に、一流のアーティストの音楽に触れる機会をつくることを目的とし応募した。

② 企画のポイント

アクティビティーは学校が中心だが、コンサートには一般の方にも来場いただき鑑賞してもらいたい。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

コンサートの広報及び集客に苦労した。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

町の文化協会加盟団体に依頼し、広報及びチケット販売の協力してもらった。

⑤ 事業を実施しての成果

小中学生は、一流の演奏家に遭遇し、音楽の素晴らしさを実感できたと思います。また、コンサートのご来場いただいた一般の方々も同様に感動を与えることができた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

チケット販売数の半数が来場してないことになり残念です。今回は、小中学生が気軽に買えるようにチケット料金を300円にしましたが、チケットの価格設定を慎重に検討しなければならないと反省しています。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

町民の芸術文化へ関心度は、かなりあると感じました。今後も自主文化事業に取り組みホールを有効利用しながら文化振興に努めたいと存じます。

鹿児島空港から車で約2時間。鹿児島県の最北端にある長島町は、豊かな海と自然に囲まれている。島の人口は約1万人で、長島本島、伊唐島、獅子島をはじめとした大小23の島々が点在し、対岸には熊本県天草島を望む。島を巡ると、明るい煉瓦色の赤土畑と蒼い海、青々とした段々畑と山々の深緑の対比の美しさに目を奪われる。豊かな自然資源は、鹿児島ブランド指定の芋焼酎やじゃがいも、養殖量日本一を争う鰯の生産を可能にする。小中学校でも、町の特産物の生産過程を学ぶ。長島本島には大きな風力発電風車があり、発電された電力は今回のおんかつ事業会場の長島町文化ホールを含む町内の公共施設で使用され、余剰分は島外へ出力されている。

今回の長島町おんかつ事業は、長島町教育委員会社会教育課によって実施された。事業担当者の坂元耕作氏をはじめ、教育委員会の方々は長島町出身者が多く、町中の方々から教育委員会への信頼と期待は大きい。町内の音楽文化施設は長島町文化ホールのみで、クラシック音楽以外にも音楽公演を町主催で年数回開催する。公演以外にも、アンサンブル演奏団体による小中学校アウトリーチや島外の高校吹奏楽部との交流などを定期的に行い、音楽に触れる機会を積極的に町民に提供している。

今回のおんかつ事業では、「一流のアーティストによる本物の音楽を届ける」という明確なミッションのもと、アクティビティの対象は青少年に絞り、離島を含む小中学校4校で実施した。一方で、コンサートは町民に開かれた公演と位置づけ、農業・漁業関係者の方々や島外の方も足を運びやすい土曜夕方の時間帯に設定した。

アクティビティ先に選出されたのは、伊唐小学校、獅子島小中学校、平尾中学校、蔵之元小学校(実施順)だった。伊唐小学校と獅子島小中学校は、それぞれ全校児童生徒数が30名の小規模校。コンサート会場の長島町文化ホールからは車で20～30分の距離にある。獅子島小には、フェリーで移動する。複式学級や授業科目複数学年合同授業を実施しているせいか、児童・生徒間の関係性が密接で、様々な場面で譲りあったり助けあったりする姿が印象的だった。平尾中学校では、生徒も教職員の方々も清々しい笑顔で出迎えてくださった。途中、質問コーナーでは「楽器はいくらですか」という中学生らしい現実的な質問も寄せられた。創立140周年を間もなく迎える蔵之元小学校では、少し緊張気味の4～6年生を対象に行った。最後の「翼をください」の合唱では、全員がアーティストの森岡有裕子さんと桑原花子さんに語りかけるように歌っていた。

楽器に触れる機会が少ないため、楽器構造説明が欲しいという先生方からの事前リクエストを受け、森岡さんの発案で、平尾中学校にあるフルート2本をお借りして、全校のプログラムにフルート演奏体験を組み込んだ。この楽器体験は、どの学校でもじゃんけん大会になるほど大人気。約10分程度ではあったが、自分たちの仲間が実際に取り組む様子を通してフルートの構造、息使い、奥深さの理解が深まる以上に、音楽への好奇心が膨らむ貴重な時間であった。体験前の緊張した表情の子供たちが、体験後に、オネゲル作曲「牝山羊の踊り」を熱っぽく集中した眼差しで聴き入る姿へ移り変わる様子には目を見張るものがあった。

コンサートには、町人口5%に当たる約250名が来場くださった。事前打ち合わせの時からクラシック公演ではいつも集客に苦心されると伺っており、開場まで関係者一同、ドキドキしていたが、アクティビティ先の子供たちや先生方からの口コミもあり、予想をはるかに超えた結果となった。プログラムには、フルートの魅力をしっかりと味わえる作品が並んだ。途中、森岡さんとピアニストの桑原さんによる飾らないお話の中で、演奏家の裏話やアクティビティの様子、食事の美味しさなどが披露されると、会場は一気に和やかさが増し、まるでホームコンサートのような暖かさだった。最後の「日本の歌メドレー」では、会場のお客様と大合唱。歌詞と歌詞の合間には、4日間の長島町での滞在様子を写真スライドで紹介した。写真がスクリーンに映るたびに、どこかで歓声や笑い声があがった。コンサート開催

に際し、町内の方々がボランティアで照明や音響などを調整してくださった。まさに町に住む人が町の人を想い、共同で作りあげる公演だったように思う。

今回のおんかつを通じて、大都市以外でアウトリーチ活動を行うことの価値を改めて考えさせられた。アーティストの体温や息遣いが感じられる距離で、本物の音楽に触れる経験は、学校生活の中にはないスペシャルな時間として印象深く残るだろう。同時に、アーティストという生き方や職業を提示することで、人々の日常生活の中にいつもと違う風を吹き込み、世界を広げることにもつながると思う。それは、アウトリーチ活動だけでなく公演事業でも同じことが言える。今後も長島町では様々な文化事業が展開されるだろう。人口一万人の地域だからこそ可能になる一体感を失わずに、「本物」を人々の生活に届けて欲しいと願う。

第3部
平成26年度公共ホール
音楽活性化事業
コーディネーターレポート

おんかつ事業に取り組むためのチェック項目と留意事項

チェック1 事業目的の設定 ～自ら考え、～

『なぜ、この事業を実施するのですか？』『得たい成果は何ですか？』

これらは、事業の「目的」や「ねらい」などでよく見かける項目ですね。おんかつ事業にとっても企画立案から広報計画、事業運営、報告書作成まで、すべての過程において、悩んだらいつでも立ち戻ることができる重要なキーワード“原点”となります。

文章が綺麗である必要はありません。文法が間違っている、多少の誤字脱字があっても問題ありません。ただ、ホールを運営する人、地域と向き合う人として、この事業に取り組む「意気込み」や「この事業にかける思い」を教えてください。

もちろん『“アウトリーチをした”という実績が欲しい』みたいな不純な思いが見え隠れするものでは全く話しになりません。『なぜ、おんかつ事業に参加するのか？』取り組む前にしっかりと考え、整理しておいてください。

チェック2 企画を創る ～自ら考え、～

アーティストは、担当者の思いや願い、目的を達成したいと思っています。

例えば、事業の目的に『創造性豊かな青少年の育成』を掲げられていたとします。

そうすると、アーティストやコーディネーターからは、きっと『創造性とはどういうイメージですか？』とか『何かアイデアはありますか？』、『青少年の育成って、私は何をすればいいのですか？』、『どのような内容、成果を期待していますか？』などの質問がくると思います。

『創造性豊かな青少年の育成』は、文章を整える時には使いやすい言葉かも知れませんが、しかし、その言葉だけでは実際の企画を創っていくには具体性が乏しいと感じてしまいます。

繰り返しになりますが、文章が綺麗である必要はありません。文法が間違っている、多少の誤字脱字があっても問題ありません。ただ、ホールを運営する人、地域と向き合う人として、この事業に取り組む「意気込み」や「この事業にかける思い」を教えてください。

もちろん『“アウトリーチをした”という実績が欲しい』みたいな不純な思いが見え隠れするものでは全く話しになりません。『なぜ、おんかつ事業に参加するのか？』取り組む前にしっかりと考え、整理しておいてください。

チェック3 宣伝と広報と報告 ～自ら創る～

おんかつ事業は、いわゆる“買取公演”とは違い、ホールが自ら考え、自ら創る公演です。従って、ホールの担当者の業務の領域と量は、買取公演に比べ飛躍的に多くなります。

例えば、チラシの作成にしても、買取公演のように、音楽事務所から原稿案が届き、それを校正して、必要枚数を指定したらチラシが出来る。というようなことは一切ありません。おんかつ事業では、ホー

ルの担当者の方が自ら考え、自ら創らない限り、チラシが出来上がることはありません。

また、公共ホールがおんかつ事業のような事業に取り組む場合、宣伝、広報、報告はとても重要なキーワードとなります。

コンサートに多くのお客さんに来て欲しいければ「宣伝」が重要となりますし、アウトリーチについても、少しでも多くの人に“うちの町のホールも良いことやってるね！”と感じてもらいたいなら「広報」が重要となります。加えて、関係者や支援者などからの理解を深めたければ「報告」が重要になります。これらについても、予め、計画し、運営していくことが大切ですね。

チェック4 自主運営 ～自ら創る～

おんかつ事業は、いわゆる“買取公演”とは違い、ホールが自ら考え、自ら創る公演です。従って、ホールの担当者の業務の領域と量は、買取公演に比べ飛躍的に多くなります。

例えば、事業運営にしても、買取公演のように、音楽事務所から公演準備手配書が届き、その指示通りに準備したら、あとはアーティストとスタッフが乗り込んできて、すべてやってくれる。というようなことは一切ありません。おんかつ事業では、ホールの担当者の方が自ら考え、自ら創らない限り、コンサートが上演されることはありません。

- ・リハーサル時間は何時間必要だろう？
- ・この時間は渋滞するかも？
- ・この打合せでは、どのようなことに興味を持ち、どのようなことに不安を感じるのだろうか？
- ・楽器、衣裳、着替え、日用品等など、荷物は多いのかな？ など

おんかつ事業を成功させるために必要なのは

- ・新しいことを創り出す力。 創造力 と
- ・相手の気持ちを感じ取る力。 想像力 だと思います。

楽器の特性について

一世を風靡したアニメ「のだめカンタービレ」はご存知の方も多い事でしょう。一般的に知られていない未知の世界である音楽大学の実態を実にリアルに描いた名作です。一般人から見ると、少し変わった？音楽を志す若者達による芸術と恋と仲間達との成長記の人間ドラマです。実はこのアニメ、プロの演奏家が監修しており、クラシック音楽関係の業界人にも非常に好意的に受け入れられた事でも有名です。それまでのクラシック音楽を取り上げた作品では、描写力に乏しく、リアリティに欠けていた事もあってか、好意的には受け入れられなかったように思います。しかし「のだめカンタービレ」はそれらを悉く良い意味で裏切られる描写力であると同時に、本当に音大の学生達の生活をリアルに描いています。朝から晩まで練習の虫になっているのは概ねピアノ（鍵盤楽器）と、ヴァイオリン（弦楽器）。トランペット（金管楽器）や声楽については練習もソコソコ。楽器と奏者の関係性や個性については茂木大輔さんの非常に面白い著書があるので触れませんが、ここでは楽器の特性について少しだけ触れてみたいと思います。

ピアノやヴァイオリンは他の楽器に比べて非常に音符の数が多い事をご存知でしょうか。それも桁違いに多いので、一定量の練習をしないと譜読みすら終わらないのです。暗譜となれば1日10時間以上は当たり前。ピアノは自分の曲の他に声管弦打楽器の伴奏等を受け持てば一週間に譜読みをする楽譜が束になります。ヴァイオリンについてはオーケストラを例に上げて考えてみましょう。1時間の交響曲、最初から最後まで殆ど弾きっぱなしの主演級の出番の多さがヴァイオリンを筆頭とする弦楽器。続いて準主演級の出番の多さは木管楽器。全体の2/3程度と言った所。金管楽器や打楽器に至っては大部屋俳優とも言うべきか1/3若しくは1/4に満たない場合もある。同じオーケストラでもここまで出番の差があるのにギャラは一緒と言われれば納得いかないという意見があるのは理解できますが、さて、ギャラの話は別にして、何故ここまで楽器に出演頻度の違いがあるのか。これについては、楽器の成り立ちが非常に重要に関わってくるのでここでの言及は避けませんが、楽器毎の特性も非常に大きなウエイトを占める事も一因なのです。

ピアノ等の鍵盤楽器群とヴァイオリン等の弦楽器群、実は長時間の演奏にも対応出来る楽器の特性があります。それは、身体的に無理な要求をされていない事。ピアノは正しい姿勢と肩や腕の力を抜けば何時間でも演奏が可能です。弦楽器ではチェロを筆頭にヴィオラ、ヴァイオリン、コントラバスと概ね身体的に長時間の演奏が可能と言って良いでしょう。これに対して金管楽器はどうでしょうか。金管楽器の音の出る仕組みは、マウスピースと呼ばれる歌口を金属のノズルに接続して音を拡声させる仕組みです。人間の薄い唇をマウスピースに振動させて音を出すので、唇にかかる負担はとて大きいのです。マウスピースの大きさを順番にすると、唇全部が入ってしまうチューバ、唇の端がかかる程度のトロンボーン、特にトランペットとホルンについては、そのマウスピースが非常に小さいので、唇の一部分を集中的に振動させる事は、唇への負担は想像を絶する激しいものです。以前の「おんかつ」の現場で長時間のリハーサルにより唇が裂け血だらけのまま本番を迎えざるを得なかった事がありました。

今回、私の担当させていただいた地域に派遣されたアーティストはトランペットと声楽。両者には何の共通性も無いかと思われそうですが、先に述べた視点で見ると双方共に長時間の演奏にはアーティストにかかる身体的な負担は非常に大きいものがあると言う共通点です。管楽器は先に述べましたが、声楽は人間の声です。歌謡曲の様マイクで拡声しない生の声帯を駆使して客席の後方まで声を響かせる技術は声楽家でなければ出来ない特殊技術です。オペラ等でも主演級となると当然ダブルキャストが組まれるように、フルの発声で一晩のコンサートを歌い続ける事は非常に肉体を駆使する事になります。

「おんかつ」の構成は4つのアウトリーチと本公演。特にアウトリーチでは演奏に不向きと思われる様々な環境での演奏がアーティストには求められます。二日間のアウトリーチを乗り切ったアーティストには、是非最良の本公演の舞台を準備して欲しいものです。ホールでの本公演は楽器毎の特性をご理解いただき、アーティストには最良のコンディションで演奏できる環境を整えていただく事もホールの担当者に求められる知識でもあります。「おんかつ」ではコーディネーター等が同行しますが「おんかつ支援」となるとアーティストと直接に細かいやり取りが求められます。では具体的にどうするのか。リハーサルの時間設定や進め方、楽屋及び舞台の温度や湿度の管理、ひいては食事面に至るところまで実に様々ですが、一番重要な事はアーティストに対する細やかなケアです。体調に配慮すると共に、現在の状況の確認と、今後の進め方等、アーティストに任せきりではなく、こまめに気を使う事に超した事はありません。コンサートはアーティストの他にも舞台に関わる様々な方々との協同作業で創られるものですが、クラシック音楽の場合は生身の人間が奏でる実演行為ですから、アーティストのコンディションを最優先という点を忘れずにいただきたいと思います。例えば予定より大幅にアウトリーチが遅れた場合、体調やコンディションを考慮してリハーサルを繰り下げたり、リハーサルを取りやめたりする事もあり得ます。理想的な本番の舞台を作るために一番欠かせない事はアーティストの身体への負担は出来る限り軽減させて欲しいと言う点です。

今回お伺いした二地域では、この点非常にご理解をいただき、アーティストのコンディションを最大限に尊重いただいた良い舞台となりました。アウトリーチが全国で展開されるようになった今、より一段上の企画制作を「おんかつ」に取り組んだホールの皆様には実践していただきたいと切に願っております。

「共演」という試みについて

アクティビティ先の学校の吹奏楽部や合唱部、アマチュア合唱団やダンスグループといった地元の演奏家やパフォーマーの方々と（地域創造の）アーティストがホール公演で「共演」することは決してめずらしいことではない。

アマチュアにとって、プロのアーティストと同じ舞台上に立てるチャンスは得難いものであり（殊に子供たちにとって）、貴重な体験となって参加者の心の中に残るものとなることから、ホールやアクティビティ先からの共演依頼も少なくない。また、集客という点からみても共演は有効な手だてとなる。参加者たちの友人知人、家族といった人々がホールに足を運んでくれるからだ。

しかし、だからといって安易に共演を進めることには反対である。いうまでもないことだが公演は「興行」である。聴衆が興行に求めるものは自分たちが支払った料金に見合う「対価」であり、出演者の思い出作りの場面や身内の発表会を観に（聴きに）くるわけではない。厳しい言い方をすれば、たとえアマチュアであっても興行の舞台上に上がる以上、そのパフォーマンスには鑑賞に堪え得る（最低限の）クオリティーが要求される。それができないのであれば舞台上に上がるべきではないと思う（コンサートのアンコールやプレイベント的な形で登場する場合は別だが）。

では、あるべき「共演」の姿とはいかなるものだろうか。厳密な基準（ルール）があるわけではないが、私の場合（地域創造での公演に限らず）、有料のホール公演でプロのアーティストが地元のアマチュア演奏家や団体と共演する際には次の2点のいずれかの条件を満たしているべきだと考えている。

1. そのホール（その地域）ならではの演目であり、入場料の対価にみあう質と内容であること。
2. そのコンサートにとって、共演する個人団体の参加が必要不可欠な場合。例えば、過去の例を挙げると、歌手であるアーティストがホール公演の一部でオペラの抜粋を演じた際に、そのオペラの登場人物として地元合唱団に参加していただいたケースがある。

由利本荘市で行われたおんかつでは、(1)の条件が満たされていたため、ホール公演の中でアーティストの田村真寛さんと由利高校の吹奏楽部と民謡部による共演が行われた。

担当者の小松さんが色々と迷われた結果アクティビティ先に由利高校の吹奏楽部と民謡部を選ばれたのは、とにかく音楽や芸術に真剣に取り組んでいる彼らに、プロのアーティストと出会い、その高い技術や芸術性に触れることで、音楽や芸術に取り組む喜びを感じてもらい、将来も続けていく意欲につながりたいという強い願いがあったためだ。そのため、アクティビティの内容も、トーク付のコンサートという形ではなくワークショップに重点を置いたものを望んでおられた。しかし、個別研修までの時点では、コラボレーションを考えておられたかもしれないが、特に提案はされていなかった。

吹奏楽部については、単なる“演奏指導”にならないようにするにはどうしたらいいか、また民謡部では具体的に何ができるのか、明確なイメージが定まらないまま始まった個別研修だったが、吹奏楽部や民謡部の活動の様子をDVDなどで拝見し、そのパフォーマンスのレベルの高さや熱意に私自身が感動してしまい、ワークショップだけで終わらせてしまうのがもったいないと感じてホール公演に共演を取り入れることを提案させていただいた。

吹奏楽部はコンクールで数々の入賞歴を持ち、民謡部も市のイベントに出演依頼がくるほどの実力を持つ団体であったことに加え、指導体系も大変しっかりとしたもので、顧問の先生方も大変熱心に取り

組んで下さった。おんかつで共演をする際の最大の問題はリハーサル時間の確保である。ホール公演の2-3日前にしか現地入りできないアーティストとリハーサルをして作品を作り上げていく時間は限られている。そのためには、事前の準備（練習）が必要不可欠なのだが、今回は両方の団体共期末試験の大変な時期にも関わらず、熱心に準備を重ね、田村さんとのリハーサル前に万全の体制を整えて下さっていた。

通常ならば吹奏楽部で1回、民謡部で1回アクティビティを行うところ、吹奏楽部と民謡部の両方のコラボレーションもあるということから、合同でアクティビティを2回行うことにして可能な限りリハーサル時間を確保した。また少しでも早くリハーサルを始めた方がいいということから変則的に入り日（ホール公演3日前）に最初のアクティビティを行い、連続2日間アクティビティを行った後、ホール公演前日は学校側の準備日にしていただくなど、スケジュールリングにも工夫していただいた。その結果は、共演はせいぜい1曲ずつくらいであろうと思っていたこちらの予想をはるかに上回る出来栄で、最終的に吹奏楽部とは2曲、そこに民謡部も加わって2作品の共演を準備することができ、ホール公演のオープニング・プログラムとして来場者に披露することができた。

また、アクティビティがとかく一方通行（アーティストがアクティビティ対象者にトークや演奏を披露する方式）になりやすいなか、今回のアクティビティでは田村さんが民謡部の演奏メンバーに民謡特有のリズム感や節回しを教えてもらったり、舞台衣装として民謡部の袴をお借りしてその着付けをしてもらったりと、まさに「コラボレーション」という表現が相応しい内容となり、田村さんにとっても得るものの大きい体験になったと思う。

ホール公演で「共演」を披露することは、その必然性を明確にすることから始まって事前の準備やリハーサル時間の確保など、様々な課題をクリアしていかなければならないが、成功した暁には唯一無二の「ここだけでしかできない、この出演者でしかできない」舞台を作ることができる。しかし、そのためには乗り越えなければならない難題も多い。

たとえ潜在的な能力を持った「共演者」であっても、その能力を最大限にひき出すためには様々な方策が必要になる。相手側の熱意と協力は大前提であり必要不可欠な要素だが、それだけで共演ができるわけではない。共演の可否を判断する冷静で客観的な目。（共演を決めた場合の）アーティストと共演者の間の信頼関係と協力体制の構築。必要、且つ効果的なスケジュールリングの調整。そしてモチベーションの維持など、本番まで手間と時間と労力がかかることを覚悟しなければならない。

そして、もっとも大事なことは、「共演」だからといって目標（本番での完成した姿）に妥協を許さないことである。目標とは、いま手にしている現状の姿を体裁よく纏めたものではない。こうあるべきだという姿を実現させたものである。

コンサートづくりは仲間づくり

今年度はコンサートでの舞台づくりに課題を感じた年であった。

課題はそれぞれ。事業担当者が舞台作りのセンスと経験があるのだけれど、ボランティアの技術スタッフとそれを共有できないため自らが仕込みを行い、立ち位置に苦慮されるケース。照明シュートやマイクチェックなどやらねばならない実作業は理解できているのだけれど、物理的に人材が不足しているケース。そして「いつも通り」が身に染み込んで、イレギュラーなものへの対応にぶち当たった時に現実逃避するケース等々、数々の課題と直面させてもらった。

専門技術を備えた舞台スタッフが常駐しているホールが減少している昨今、催事がある際に仕込みとオペレート業務を専門業者にお願いできるなら恵まれた方で、それも叶わずボランティアスタッフや制作スタッフで可能な範囲の舞台運営を行っている、という現状も少なくない。予算削減の中で事業を続けていく上では前述のような課題が生じるのもわからなくもない。ただ、関わる人たちにストレスが生じているのであれば、改善の道も探した方がよい。

たまに、直接話を聞いてくださる技術スタッフさんにお会いすることがある。何のためか。それはアーティストがどのような意図をもってコンサートプログラムを組み立てているのかを理解し、技術の面からどのようにアプローチするか、という思案の材料を得るためである。技術スタッフとしての立場と責任を負っている方であれば、このようなやりとりをできることがあるけれど、お手伝いの色が濃い、コンサートのために駆り出された事務職員の方々やボランティアスタッフさんからすると、与えられた最低限の実務作業をこなすことで手一杯で、なかなかコンサートの中身にまで関与してはもらえないことが多いし、また、多くのことを望むのは酷である。

ただ、そんな専門外のスタッフさんが本番にあたり、持っているものの全てをかけてステージに臨むアーティストに直に触れ、それに引き込まれていくお客さまの様子を肌で感じると、うまくいったことや段取通り操作できなかったこと等、コンサートに対する自己評価を行い、次はもっとうまくやろうという意欲が生まれることがある。アーティストへのリスペクトが生まれ、舞台が持つエネルギーを体感してしまうと、その現場に関わった者として自身を省みるのかも知れない。また、最初は様子を伺いながらの少々距離のある関係だったのが、終演後はその距離がなくなり舞台づくりの仲間となり、関係性までも変化することもある。

こうなると、次のコンサートはアーティストの意図や、その意図をより効果的に魅せる技術面からのアプローチにも意識が及ぶことと思う。技術面はとりあえず置いておき、意識としては専門の技術スタッフと同じところまで行けるのである。

冒頭に述べたような課題を乗り越えるにあたり、まずは、それぞれの役割を果たしながらひとつのコンサートを作り上げ、一緒に作ったからこそ得られる、仲間意識のある人間関係を築くことを目指してみてもどうだろう。

音活はアーティストとがっちり四つに組んで進めることのできる稀な事業であり、何より人と人とのコミュニケーションを最も大切にしている事業であるので、おおいに活用のしがいがあり、そして結果も目に見える形で表れるはずである。

仲間で作上げた良質なコンサートに接したお客さまは、次のコンサートにも来てくれるかもしれない。良いものを提供し続ければ動員は増え、必要な舞台技術スタッフも専門性を備えた人材での体制にできる可能性もある。孤立せず、助けを求め、仲間を得て欲しいと思う。

「おんかつ」における成功とは何か

公共ホール音楽活性化事業（以下、「おんかつ」）は、アクティビティとホール公演の大きく2本柱で構成された事業である。アクティビティはアーティストが地域へ音楽を届け、ホール公演は地域の方々に音楽を聴きにきてもらう、というようにそれぞれ方向性が相異なるが、どちらの柱も重要であることに違いはない。「おんかつ」を実施するにあたっては、この2本柱からそれぞれ成果が得られなければならないし、アクティビティとホール公演の2つの柱が融合して全体の成果も得られなければならない。「おんかつ」は、同時に2本柱を走らせつつ、全体のことも考えなくてはならない、担当者にとっては言うまでもなく大変ハードな事業である。

アクティビティにおいては、訪問先と対象がどのような設定であれ、アーティストが奏でる音楽とメッセージが聴き手の心にダイレクトに届き感動が生まれること、双方向のコミュニケーションが生まれることが、成功の1つの基準であると考えられる。アクティビティを通じてアーティストの力、音楽の力が発揮されるよう、おんかつ担当者は事前の段取りや当日のセッティングなど入念に準備をおこなう必要があることは言うまでもない。しかしながら、本番を滞りなく実施することだけに捉われてしまっただけでは、本当の意味でのアクティビティの成功とは言いきれない。翌年度以降も継続して実施するために、アクティビティの記録シートを作成すること、受け入れ先の責任者および担当者とのつながりを大切にすること、アーティストとコミュニケーションを取りながら信頼関係を築くことなど、目にみえない部分をおさえておくことも重要である。翌年度以降コーディネーターは同行しない状況のなかで、どれだけアクティビティを発展させられるか、開拓する基盤をつくっておくことが長期的な視点からの成功といえるのではないだろうか。

ホール公演においても、目にみえる部分、特に来場者数多さ＝成功に固執してしまわないようにしたい。もちろん、地域の多くの方々に聴きにきてもらうこと、アクティビティ先の対象者やその家族・知人にホールへ足を運んでもらうことは、おんかつの大切な目的な1つである。しかしここで留意したいのは、継続的に実施していくビジョンがなく招待券を配布してしまったり、広報宣伝や集客ばかりに力を注ぎ過ぎてしまうと、たとえ来場者数が多かった公演でも、おんかつの本質から遠ざかってしまうであろう。来場者数を増やすことに加えて、どういった人たちに聴きにきてもらうと次へつながるか、ということにも焦点をあてて公演を実施することが肝要である。そういった側面から考えることで、公演内容についても集客のためだけのプログラミングではなく、自ずと地域性やメッセージ性についてアーティストと共に検討することができるだろう。おんかつにおけるきめ細かいノウハウの蓄積が期待できる。また、これまでにない新しい試みも取り入れてみることも、おんかつ1年目だからできることではないかと考えられる。

今年度のおんかつは、福井県の坂井市と、岐阜県の揖斐川町を担当させていただいた。前者でのおんかつは、音楽に向いているホールとは決していえない環境であったが、舞台と客席が細かい区画パネルごとに高さを調整できる条件を活かし、舞台を一番低くして客席で取り囲むようなセッティングを試みた。音響面、安全面など検討に検討を重ねた結果の判断であった。坂井市おんかつのアーティストが打楽器の前田健太さんで、演じる奏者というテーマを掲げていたところから、音楽を聴きながらも演劇の舞台を体験できるような効果が発揮された。音楽の公演ではあまりみられない舞台と客席のセッティング方式は、今後の公演にも活かしていくことができるだろう。揖斐川町のおんかつは、アーティストにトランペットの高見信行さんを迎え、アクティビティの対象が小学校2校ずつの合同、子育て支援センター、中学校吹奏楽部という地域を広くとらえた活動であった。実施前にはこれまで交流のない2校の

子どもたちを対象とすることに少なからず不安もあったが、はじめに高見さんによるアイスブレイクの時間を設け、自然な一体感を創ることができた。合併後の学校交流の一環となった今回のアクティビティの実績を、担当者の方ならびに教育委員会の関係者の方々にもぜひ次回に活かしていただくことをお願いしたい。

前述のとおり、アクティビティとホール公演を並行して実施していくことはおんかつ担当者に相当の労力と気力が必要とされるが、単なる事業実施者ではなく、アーティストと地域とのつなぎ手としての意識をもって取り組んでもらいたい。おんかつを客観的にみる視点を欠かさず、アーティストのもつ力を地域でどのように活かしていけるかを考えていくことで、次年度以降につながるおんかつの基盤が創られ、真に成功したといえるのではないかと考えられる。

「おんかつでの自分の立ち位置が分からずに悩んでいました」

実施期間中にホールの担当者の方からそんな言葉を聞き、改めておんかつ担当者の立ち位置（役割）を考えてみようと思います。

ホールで行われる一般的な鑑賞型事業は、コンサートの中身や演出は音楽事務所などに任せ、ホールとしては当日の受け入れ態勢を整えるという形が多いのではないのでしょうか。チラシの作成や宣伝の計画についても、パッケージに組み込まれていることがあります。おんかつはそれとは異なります。

目的を持ってこの事業に手を挙げ、その目的を実現するために地域の方々にどのように届けるのが良いか。それを考えるのは地域をよく知るホールの担当者であり、コーディネーターはその代わりとなることはできません。

おんかつは多くの関わる人が居て、その中心にホールの担当者が居ます。中心に居るといのはなんとも言えないプレッシャーです。ただ、それは全てを担当者が一人でやらなくてはいけないということではなく、全体を把握しているプロデューサーであって欲しいのです。時には他のスタッフにお願いするというのも出てきて当然です。大切なことはプロデューサー役であるホール担当者とアーティストが、アイデアと知恵を出し合い、良い企画にしていこうと共に考えることだと思います。お互い地域の方々のために何ができるかを考える。そのためにお互いが持っている情報をできるだけたくさん共有することが大切であり、その中心に居るのが担当者です。

ここで「自主性」と「主体性」という言葉の違いを調べてみました。「自主性」は何をすべきか、やることは決まっています、それを実行に移そうという判断を自分でする態度。「主体性」は何をするかしないかの判断も含めて、ある状況の中で自分の意思、考えを持って自ら行動する態度とありました。おんかつで担当者に求められるのは後者、「主体性」を持った行動ではないかと思います。

「地域の事を一番知っているのは自分たちである」という自負を持って、今置かれている状況で何がベストか、どのような方向に進めていくべきか、自分の意見を持つことを忘れないでいただきたいと思います。

またおんかつではホールコンサートを意識して進めていくことが必要です。アクティビティに全ての力を注いでしまい、コンサートの準備や内容、広報戦略が疎かになったのでは「アクティビティとコンサートを効果的に連携させる」という目標は達成できません。コンサートはおんかつの締めくくりであって、それまで学校等のアクティビティ先で演奏してきたアーティストが、良い環境で最大限の力を発揮できる場です。地域の方々に広く聴いていただけるコンサートをどのように作り上げるか。ここではアーティストがどのようなコンサートにしたいかと、地域のホールとしてどのようなコンサートにしたいかの調整が必要となります。加えて、アーティストと舞台スタッフのつなぎ役としても、日頃から事業内容の共有とコミュニケーションが大切となってきます。

担当者はプロデューサーであってアーティストと地域の方々との素敵な出会いの場を作り出すことが役目です。それぞれの考え方が必ずしも一致するとは限らない現場で中心となって動くことで苦勞もあるかもしれません。ただ無事にコンサートが終了した瞬間には客席には地域の方々の笑顔が見られるはずです。担当者としての役割を認識して、関わる人全てが笑顔で終わられるようなおんかつ、そしてまた次につなげようと思えるおんかつがこれから先も全国に広がり、それが地域の元気につながればと思います。

第4部

平成25-26年度公共ホール音楽活性化
アウトリーチフォーラム事業

平成25-26年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業 実施概要

1 事業趣旨

一般財団法人地域創造（以下「地域創造」という。）は、地域における芸術活動を担う人材の育成および環境づくりに寄与し、あわせて創造性豊かな地域づくりに資することを目的とし、都道府県等との共催により、公共ホール等を拠点とした、クラシック音楽の演奏家による地域交流プログラムに関する事業を実施する。

2 実施内容

(1) 実施団体

・島根セッション

- ①対象団体（研修事業・総括公演プログラム事業）：公益財団法人しまね文化振興財団
- ②公演実施団体（市町村公演事業）：奥出雲町、浜田市、益田市、大田市

(2) 事業内容

対象団体は事業を2ヶ年で実施することとする。

①研修事業

ア) 研修プログラムⅠ（シンポジウム、セミナー等）

対象団体は、都道府県内または政令指定都市内の公共ホール職員、文化行政担当者および教育関係者等を対象として、アウトリーチや文化・芸術による地域づくりに関するシンポジウム、セミナー等を開催する。

イ) 研修プログラムⅡ（全体研修会）

対象団体は、実施団体に対して、市町村公演事業の実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会を開催する。

ウ) アウトリーチ研修

対象団体は地域創造と協力して、対象団体の職員および演奏家を対象として、アウトリーチによる地域交流に関する手法開発研修を実施する。

②総括公演プログラム事業（ガラコンサート）

対象団体は、有料の総括的公演（ガラコンサート）を実施する。

③市町村公演事業

公演実施団体は、原則として4日間の連続した日程で次の事業を実施する。

- ア) 地域交流プログラム 学校や福祉施設でのアウトリーチ（ミニコンサート）等、地域との交流を図る事業。原則として6回（1日につき2回・3日間）実施する。
- イ) コンサート 公共ホール等において有料のクラシック音楽のコンサートを実施する。

3 事業実施に対する支援

(1) チーフコーディネーターの派遣

地域創造は、事業計画の策定・実施にあたり対象団体担当者のコーディネート能力の向上を図るため、また地域におけるアウトリーチ手法のノウハウ蓄積のため、地域の芸術活動に詳しい専門家を派遣する。

(2) コーディネーターの派遣

地域創造は、実践的なノウハウを習得する機会を提供するとともに事業の円滑な運営を図るために、企画制作の経験が豊富な専門家を派遣する。

(3) 講師の派遣

地域創造は、実践的なノウハウを提供できる企画制作の経験が豊富な講師等を、研修プログラムの実施時に派遣する。

4 経費負担

事業実施に伴う下記の経費については、地域創造が負担する。

①演奏家派遣経費

- ・事業参加に係る報酬（出演料、謝金等を含む）
- ・派遣に係る交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費（現地運搬費を除く）
- ・派遣に係る損害保険料

②研修事業・総括公演プログラム事業（ガラコンサート）負担金

対象団体が支出した研修事業及び総括公演プログラム事業（ガラコンサート）実施に係る経費（③の経費を除く）について、事業実施年度の2年間で50万円を限度として負担する。

③アウトリーチ研修経費

対象団体が支出したアウトリーチ研修実施に係る経費のうち、ピアノ調律費及び現地楽器運搬費について負担する。

④市町村公演事業負担金

実施団体が支出した公演事業実施に係る経費のうち、ピアノ調律費について、1団体につき15万円を限度として負担する。また、ピアノ調律費を除く経費について、1団体につき5万円を限度として負担する。

5 派遣アーティスト及び派遣コーディネーター

(1) 派遣アーティスト

サクソフォン四重奏（アーバン・サクソフォン・カルテット）：大上仁彦（Ss）、小林浩子（As）、中村優香（Ts）、千葉一喜（Bs）

ピアニトリオ（ピアニトリオーレ）：岩崎洵奈（Pf）、細川奈津子（Vn）、高木良（Vc）

(2) チーフコーディネーター

津村卓（一般財団法人地域創造プロデューサー、北九州芸術劇場館長兼プロデューサー）

(3) コーディネーター

内藤裕敬（演出家・劇作家、南河内万歳一座座長）

ヤッシー（BLACK BOTTOM BRASS BAND トロンボーン&リーダー）

(4) アシスタントコーディネーター

山本若子（有限会社N.A.T 取締役）

丹羽梓（横浜市鶴見区民文化センター サルビアホール）

6 事業概要

(1) 研修事業

①研修プログラムⅠ（シンポジウム）

期 日：平成25年11月5日（火）

場 所：島根県民会館

内 容：市町村文化担当者、公共ホール職員等を対象とした、アウトリーチ活動の意義や可能性を学び、理解を深めるためのシンポジウム

シンポジウムプログラム（平成25年11月5日）

時間	内容	講師等（敬称略）
13:15～13:30	開会のあいさつ	—
13:30～15:00	「教育から見るアウトリーチ」	苅宿俊文（青山学院大学教授）
15:10～17:00	「アウトリーチプログラムを体験してみる」	内藤裕敬（劇作家・演出家、南河内万歳一座座長） 山口裕加（オーボエ奏者）
17:15～18:05	「まとめ・アウトリーチの理解を深める」	津村卓（財団法人地域創造プロデューサー、北九州芸術劇場館長兼プロデューサー） 内藤裕敬 山本若子（(有) N.A.T取締役）
18:05～18:10	閉会のあいさつ、事務連絡	—

②研修プログラムⅡ（全体研修会）

期 日：平成26年5月1日（木）

場 所：島根県民会館

内 容：市町公演事業担当者を対象とした事業実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会

全体研修会プログラム（平成26年5月1日）

時間	内容	講師等（敬称略）
13:30～13:45	オリエンテーション	—
13:45～15:15	アウトリーチフォーラム事業について	津村卓（一般財団法人地域創造プロデューサー、北九州芸術劇場館長兼プロデューサー） 内藤裕敬（劇作家・演出家、南河内万歳一座座長） ヤッシー（BLACK BOTTOM BRASS BAND トロンボーン&リーダー）
15:30～16:00	事業説明	一般財団法人地域創造 担当者
16:00～16:45	個別打合せ	—

③アウトリーチ研修

期 日：平成26年6月5日（木）～6月10日（火）6日間

場 所：島根県民会館、松江市民活動センター、
玉湯小学校、出雲郷小学校、大野小学校

アウトリーチ研修スケジュール

日程	時間	内容
6月5日 (木)	15:00	開講式 及び オリエンテーション
	16:00	グループ別リハーサル（島根県民会館）
	19:00	交流会
	20:30	終了
6月6日 (金)	9:00	グループ別リハーサル（島根県民会館）
	21:00	終了
6月7日 (土)	9:00	グループ別リハーサル（島根県民会館）
	21:00	終了
6月8日 (日)	9:00	グループ別リハーサル（松江市民活動センター）
		各グループのランスルー グループ別リハーサル
	21:00	終了
6月9日 (月)	10:40	玉湯小学校にてアウトリーチコンサート（サクソフォン四重奏、ピアノトリオ）
	16:00	全体ミーティング（島根県民会館） グループ別リハーサル（島根県民会館）
	21:00	終了
6月10日 (火)	11:30	大野小学校にてアウトリーチコンサート（サクソフォン四重奏）
	11:35	出雲郷小学校にてアウトリーチコンサート（ピアノトリオ）
	17:15	閉講式

(2) 総括公演プログラム事業（ガラコンサート）

平成26年11月16日（日） 16：00開演

島根県民会館 中ホール

(出演)

ピアノトリオ ピアノトリオーレ

サクソフォン四重奏 アーバン・サクソフォン・カルテット

(3) 市町村公演事業

●奥出雲町公演、浜田市公演

アーティスト：サクソフォン四重奏 アーバン・サクソフォン・カルテット
大上仁彦 (Ss)、小林浩子 (As)、中村優香 (Ts)、千葉一喜 (Bs)
コーディネーター：内藤裕敬 アシスタントコーディネーター：山本若子

公演①

実施団体	奥出雲町
実施時期	平成26年7月9日(水)～7月12日(土)
●アクティビティ 7月9日(水) 布勢小学校 7月10日(木) 亀嵩小学校 7月11日(金) 八川小学校	
●コンサート 7月12日(土) 18:30開演 横田コミュニティセンター 大ホール	

公演②

実施団体	浜田市
実施時期	平成26年9月10日(水)～9月13日(土)
●アクティビティ 9月10日(水) 三階小学校 9月11日(木) 東中学校 9月12日(金) 長浜小学校	
●コンサート 9月13日(土) 18:00開演 石央文化ホール 大ホール	

●益田市公演、大田市公演

アーティスト：ピアノトリオ ピアノトリオーレ

岩崎洵奈 (Pf)、細川奈津子 (Vn)、高木良 (Vc)

コーディネーター：ヤッシー アシスタントコーディネーター：丹羽梓

公演①

実施団体	益田市
実施時期	平成26年9月24日（水）～9月27日（土）
●アクティビティ 9月24日（水）東仙道小学校、都茂小学校 9月25日（木）東仙道小学校、都茂小学校 9月26日（金）東仙道小学校、都茂小学校	
●コンサート 9月27日（土） 13：30開演 ふれあいホールみと	

公演②

実施団体	大田市
実施時期	平成26年10月7日（火）～10月10日（金）
●アクティビティ 10月7日（火）長久小学校 10月8日（水）久屋小学校 10月9日（木）大田小学校	
●コンサート 10月10日（金） 18：30開演 大田市民会館 大ホール	

平成25-26年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業 派遣アーティストプロフィール

アーバン・サクソフォン・カルテット (Urbane Saxophone Quartet)

大上仁彦／おおうえきみひこ (ソプラノ・サクソフォン)

広島県出生、東京都多摩市育ち。国立音楽大学を経て、2009年東京ミュージック&メディアアーツ尚美コンセルヴァトアールディプロマ科修了。在学中、「第7回大阪国際音楽コンクール室内楽部門」入賞。「第8回日本アンサンブルコンクール」において優秀演奏者賞及び全音楽譜出版社賞受賞。現在は、アーバン・サクソフォン・カルテットでの演奏活動をはじめ、CDやTVCMレコーディングへの参加、あらかわ文化村でのミニコンサート付き講演、ブライダル雑誌演奏モデルなど、活動の場は多岐に渡る。これまでにサクソフォンを、山崎奈津子、石渡悠史、雲井雅人、和田和之の各氏に師事。

小林浩子／こばやしひろこ (アルト・サクソフォン)

広島県出身。武蔵野音楽大学器楽学科サクソフォン専攻卒業。在学中、学内推薦演奏会、及び同大学卒業演奏会に出演。2006年アメリカ・シカゴで行われたミッドウエスト・クリニックに出演。第19回中国ユースコンクール奨励賞。Urbane Saxophone Quartet、Juggle Jazz Orchestraのメンバー。現在はソロやサクソフォンカルテットでの演奏の他、ビッグバンドなどのライブハウスでの演奏、中学・高校でのレッスンなど、活動の幅を広げている。これまでにサクソフォンを佐藤美穂、栃尾克樹、ジャズを米田裕也の各氏に師事。

中村優香／なかむらゆうか (テナー・サクソフォン)

東京都出身。武蔵野音楽大学卒業後渡仏、フランス地方シャルトル音楽院にて研鑽を積む。同音楽院を審査員満場一致の特別最優秀賞で卒業。第6回ジュニアサクソフオンコンクール入選、第19回市川新人演奏会オーディション優秀賞、第3回ルーマニア国際音楽コンクール管楽器部門第3位、2012年度パリ・サクソフォンコンクールHonneur部門第2位入賞。在仏中、シャルトルビッグバンド、ブーローニュ吹奏楽団で第一アルト奏者を務め多数のコンサートに出演、ソリストとしても共演した。現在はコンサートやイベント等での演奏活動の他、後進の指導にもあたっている。これまでにサクソフォンを栃尾克樹、服部吉之、Erwan Fagant各氏に、ジャズをChristophe Beuzer、Jean-Jacques Ruhlmann、浜崎航各氏に師事。

千葉一喜／ちばかずき (バリトン・サクソフォン)

東京都出身。国立音楽大学演奏学科卒業、ソリストコース修了。サクソフォンを小峰松太郎、下地啓二、雲井雅人各氏に、室内楽を雲井雅人、下地啓二、滝上典彦各氏に師事。2011年にケネス・チェ氏、2013年にラース・ムレクシュ氏のマスタークラスを受講。マツダ・ミュージック・アカデミー講師。作曲科の学内発表演奏に数多く携わる。学外では吹奏楽・オーケストラのエキストラなどのクラシック演奏から、福祉施設、ショッピングモール、ホテル等での親しみやすい曲の演奏など、ジャンルを問わず、幅広く活動している。小・中・高校でのレッスンや講習会での講師としても活動中。

ピアニトリオーレ

岩崎洵奈／いわさきじゅんな（ピアノ）

東京藝術大学器楽科ピアノ専攻卒業。現在、ウィーン国立音楽大学ピアノ科にてヤン・イラチェック氏に師事。室内楽、伴奏法をマインハルト・プリンツ氏に師事。数々の国際コンクールにおいて入賞を重ね、2010年第16回ショパン国際ピアノコンクールにおいてディプロマ賞受賞、審査員のマルタ・アルゲリッチ氏より賞賛を受ける。ヨーロッパ各地でリサイタル、音楽祭に招待される。仙台フィルハーモニー管弦楽団、NHK交響楽団のメンバーと室内楽で共演。平成21年度文化庁新進芸術家海外研修生。2012年度、CHANEL Pygmalion Daysアーティストに選出。2013年、2月、NHK-FM「リサイタル ノヴァ」に出演。これまでに藤井博子、笠間春子、青柳晋、フェルナンド・プチョール、海老彰子、アキレス・デレ=ヴィーニエの各氏に師事。

細川奈津子／ほそかわなつこ（ヴァイオリン）

長野県出身。桐朋女子高等学校音楽科、同大学卒業。2007年ウィーン国立音楽大学入学、2011年同大学の第二ディプロマを最高位の成績で取得。2011年第3回パオロ・セッラーオ国際コンクール2位。2011年第9回リミニ国際コンクール1位。ほか、国際コンクールなどで受賞。2012年長野県信州新世代アーティストに選出され、長野・東京にてソロリサイタルを行う。佐渡裕オーケストラ参加や、2013年・2014年ensemble NOVAとコンチェルト共演など、現在は東京・長野でソロ、室内楽を中心に演奏活動を行っている。これまでに宮下理恵、塩貝みつる、原ゆかり、篠崎功子、R・ランダッハーの各師に師事、室内楽をウィーンアルティス・クアルテットに師事。

高木良／たかぎりょう（チェロ）

名古屋市出身。6才よりチェロを始める。名古屋市立菊里高等学校音楽科を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科を卒業。在学中、旧奏楽堂にて木曜コンサートに出演。第16回KOBEL国際音楽コンクール優秀賞。第12回大坂国際音楽コンクールアンサンブル部門第一位（二位なし）。同ガラコンサートにおいて、神戸市長賞受賞。京都フランス音楽アカデミーにてフィリップ・ミュレル氏のマスタークラスを、岐阜リスト音楽院マスターコースにてチャバ・オンツァイ氏のマスタークラスを受講。受講生選抜コンサートに出演。現在、オーケストラや室内楽、アンサンブルを中心とした演奏活動を行っているが、特に兄、高木俊彰とのチェロ二重奏のコンサートは、毎回好評を得ている。これまでに、チェロを林良一、高木俊彰、西谷牧人、河野文昭、山本裕康の各氏に師事。

神々が集う島根の地。美味しい食べ物とお酒がたくさん揃う島根の地。そんな地でアウトリーチフォーラムが開催された。私事ではあるが、これまでこの事業で若いアーティストと向き合っ、アウトリーチプログラムを構成していく役割であるコーディネーターは3度やらせていただいたが、全体を構成するチーフコーディネーターは初の体験であった。

地域創造の音楽活性化事業も17年目を迎え、今やアウトリーチという事業も全国津々浦々で行われるようになってきた。そのなかで音楽だけではなく、それぞれの芸術ジャンルのアーティストも、学校をはじめ福祉施設等の現場において、授業の一部を担うケースが、ここ数年の間に多くみられるようになってきた。アウトリーチ活動は、もともと美術館が広報の一環として活動の内容やコンセプト、ビジョンなどワークショップを取り入れながら、より具体的に多くの人々に情報提供するために美術館外で活動したことが発端と言われている。そして90年代後半からは他の芸術においても公立文化施設の事業として取り上げられることが多くなってきた。これは日頃、芸術や文化に触れる機会の少ない市民や社会的弱者の方々に対して、施設外においても育成や社会との交流を行うために、芸術また芸術の持つ力を、提供していくことが公立文化施設の重要な役割であることが理解されてきたためである。

さて、音楽のアウトリーチに関しては、これまでに多くのカリキュラムが生まれ、多様な範囲へ提供されてきた。そのなかでも学校へのアプローチを中心とした子供たちへのプログラムでは、多くのアーティストが取り組むようになってきた。以前から音楽を楽しみ音楽を理解するための取り組みは行われてきたが、単に音楽を楽しみ理解するだけではなく、いかに子供たちに想像力を養ってもらうか、また異文化に対するコミュニケーション能力を養う事が出来るかが重要なテーマになってきている。そのなかで今回のフォーラムのコーディネーターには、そのことを理解しており、なおかつ自身においてもファシリテーターとして活動しているアーティストに依頼した。これは何でもないようなことだが、コーディネーターとして若いアーティストに対し与える影響力を考えると、大きなチャレンジでもあったが、チーフコーディネーターとして絶対的な自信を持って選んだお二人とは、劇作家・演出家であり南河内万歳一座という劇団を主宰する内藤裕敬氏とブラック・ボトム・プラス・バンドのリーダーでトロンボーン演奏者のヤッシー氏である。

島根県民会館で実施した4日間の合宿で生まれたカリキュラムは、アプローチや伝える方法論はそれぞれの楽器の違いや、それに伴う楽曲の違い、そしてコーディネーターの考え方によって違っていたが、想像(創造)的な表現や新しい価値を生み出すアーティストたちとの出会いによって子どもたちは「答えはひとつではない」「違う価値観を認め合う」ということを学ぶものに仕上がったのではないかと実感した。「良かった!」「間違いは無かった!」チーフコーディネーターとしての役割は果たせたと思う。

そしてヤッシー氏と組んだピアノトリオのピアノトリオーレ、内藤氏と組んだサクソフォンカルテットのアーバン・サクソフォン・カルテットの皆さんが、コーディネーターから与えられたテーマをいかに構成していくかを悩み苦しみ、そして楽しい(?)4日間を、コーディネーターと向き合っ突き詰めて行った時間は、これからのアーティスト活動の糧になるはずである。

また、最初の研修会から活発に意見を出し、真剣に事業に取り組んでいただいたホールの皆さんは、「アウトリーチとはなんであるか」「何故アウトリーチは必要なのか」「芸術が持つ力とは」を学んでいただいたと思う。これからも地域のためにホールの役割を考え、事業に取り組んでくれるはずである。

私自身はすべての地域(4つの地域)に立ち会うことが出来ませんでした。知恵と労力を惜しみなく使い、この事業に向き合っいただいた、島根県民会館の皆さんをはじめ4つの地域の方々へ改めて感謝します。この若者たちのひとつの原点になった地域として、これからも見守ってください。いつか鮭が返って来るように。

最後になりましたが、コーディネーターを務めて頂いた内藤、ヤッシーの両氏をはじめ島根県民会館、奥出雲町、浜田市、益田市、大田市の皆さん。そしてピアノトリオーレ、アーバン・サクソフォン・カルテットのアーティストの皆さん。地域創造のスタッフの皆さん。本当にお疲れ様でした。

先行事業を経て、二年がかりの取り組みは、担当者、各ホール職員の皆さんの、共通理解の上に成立しました。まず、事業の方向性が認識され、その根拠の元に創作過程が有り、試行錯誤も目標を見失わずに実行されたと思います。

初年度、アウトリーチプログラムと、その有効性を荻宿教授が論理的に解説なさったことから始められたことが良かった。しかし、その理解の上に立ったとしても、それを、どのように実践するのかは、とても困難であり、聞くと創るは大違い、を、実感することになる。今回、担当したアーバン・サクソフォン・カルテットも、論理的土台に立って見回しても、その表現への具体的な方法が見つからない。更に、改めて尋ねてみると、ワークショップに対しては、臆気な概念を持っていただけで、実際には、何を、どうすることがワークショップなのか？ 加えて、今回のような教育ではあるものの、訓練や試験とは、一線を画する芸術プログラムを、どのように発想すべきなのかは、ほとんど考えたこともなかったと言う。そもそも、音楽大学の授業内で、それは終了すべきだと思えるが、現実には、演奏家としてのスキルを身につけることに精いっぱい、そこに到ってはいない。地域創造の音楽アーティストも同じで、いつも、初めの一步からとなる。

ワークショップは、誤解を恐れずに分類すると、鑑賞型と体験型の二つしかない。アウトリーチで学校を訪問する場合、体験型を有効と考えた方が良い。遊びの中に芸術と想像があるからだ。それでは、どのような体験を提供できるのか？ この問いに対して、ほとんどの音楽アーティストは困惑する。アーバンの諸君もそうであった。実は、ここで、アウトリーチのアーティストとしての適性が測られる。困惑しながらも、それを楽しみ、迷い、難しいと頭を抱えながらも面白がることができるか？ 最大のポイントだ。ここで典型的な表現に逃げ出すか、オリジナルに楽しめるか、資質が問われる。幸い、アーバンのリーダーの大上君は、そこに好奇心と興味を大きく持った。プログラムの開発だけでなく、その発表の現場を意識した。他のメンバーもリーダーを信頼し、共同認識を強く持って意見交換をした。

今回、体験型のプログラムの中でも、アーティストにとっては大変に難しい対話型のスタイルで作品を創った。演奏と、そのイメージを対話の形でふくらませて行く作業だ。音楽アーティストは、演奏だけして言葉を持たない方が多い。本来は、それで良いのだろう。しかし、それが音楽を漠然としたものそのままにしているのも事実だ。ほんの少し踏み込むお手伝いをワークショップと音楽がすると、その世界観は飛躍的に広がってゆく。大きな可能性を有するスタイルのプログラムは、その可能性の大きさ自由に難しい。対話とは相手が居るということで、その相手は、学校や学級が換わるごとに変わってゆく。同じ事を言ってくれないから、同じ言葉を用意したところで通用しない。ジャズの即興演奏よろしく、様式の上で、時には脱線したり、途方もない方向へふくらんだり、多種多様な状況を楽しみながらの作業となる。音楽を愛し、楽器を愛しているだけでは足りない。人を愛せないと、このプログラムは実践できないのである。芸術は孤独な作業が多い。他者の中に在ることが少ない。しかし、発表するということは他者と共に在るということだ。その意識を強く持たないと失敗する。また、その可能性を信じられない者には作業してもらっては困る。

ある小学校で、プログラムの終盤。最後の曲を自由に聴いて、浮かんで来たイメージを教えて欲しいとの問いかけに、一人の少女が涙ぐんで「曲中で、祖母の家を訪ね、亡くなった祖母の匂いがした」と答えた。アーバンのメンバーも目を丸くして、その言葉と音楽の可能性に驚いた。今回の創作プログラムが持つ可能性を強く感じる経験となった。それは、彼等が、日常の音楽教室での指導にも大きな変化となって現われているとのことだった。

体験とは、ただそれだけでなく、何らかの現象を生む。すぐに表れる現象もあれば、数ヶ月、数年後、または、いつか……、の場合もある。しかし、良い経験は、いつか必ず良い現象を生むことを信じたい。このプログラムを体験した子供達に、どのような現象が生まれるのか？ それを確認するのは困難だが、少なくとも、このプログラムを創作し発表したアーバン・サクソフォン・カルテットのメンバーは、その体験から多くの現象を自身の中に生んだと実感していると思える。

今回ピアノトリオーレに関わらせて頂き、また島根の皆様、地域創造の皆様と共に過ごし、想像以上に濃密な時間を体験出来た事に感謝します。

6月、キャンプ初日。まずは、ピアノトリオーレの練習をただ眺めているそんな時間から始まりました。この先どんな未来が造れるのか、音を聴きながら色々想像していました。この3人の音楽や音が、子ども達の心や身体にどう入っていくのだろう、どういう扉を開いていくのだろう。僕が一観客としたら、何を聴きたいのだろう？ こうなったらいいなー ああなったらいいなー その程度のものですが、この時に僕なりに感じたものが後々大事になってきました。

ピアノトリオーレの3人は、まず心が可愛くて奇麗である。この事は、すごく大事な事として、どんなに技量があっても熱意があっても心や思いがそうでもなかったら、僕はあかんなーと思ってるんです。

実際には、3日目からプログラム作りが始まりました。まずはやりたい曲をざっと聴いて、子ども達に遊ぶようなワクワクした気持ちになって時間を過ごしてもらうには、どうすればいいのか？ 最初は、定番のどう楽器に興味を持ってもらえるか？みたいな所から入ったんですが、改めてこういうのは真面目に考えてもあかんなーと思いました。こっちに遊ぶ気がないのに、子ども達に『遊ぼう』なんて呼びかけるような行為は、まったくやっては駄目な事やから（そんなんウソつきやもんね）。

だからこっちも遊ばなきゃー、そうこうしながら徐々にですが『遊び』というものが裏テーマになっていった気がします。しかし技量のある音楽家が、音楽でそれも全力で`楽しくて仕方ない`という遊びを探して行くのはかなり大変な事として、楽しい風では駄目なわけですから。子ども達にどう飛び込む？ どの心の扉を開けに行く？ どういう気持ち・心になって次の曲を聴いてもらう？ その為にはどんな話方で何を話す？ etc.... これらが全て『遊ぶ』に繋がらないとあかんわけですから。しかしピアノトリオーレの3人は、それにトライしてる事、試行錯誤を重ねてる事すら、そんな感じで捉えていってくれたように感じました、才能あるなー！と思いましたよ。そして、今回すごく良かった事は、もう一組が『内藤さん×アーバン』だった事です。

4日目のプログラム発表の時に素晴らしい内容のアウトリーチを見せてもらい、かなり刺激を受けました。その前からちょいちょい気になってたのですが、目の前で見て「いやーこれは凄い事にトライしてるなー」と思いました、取り入れれそうな所は取り入れたい、そう素直に思いました。その後取り入れてよりいい内容になる事はないのだろうか？とメンバーと話をし、少し取り入れ完成したのがピアノトリオーレのアウトリーチプログラムです。

5日目、6日目と実際に小学校に行ってみて、まだまだ拙い部分はありますが、この時3人が造る45分に未来を感じました。

3ヶ月が経ち、益田市・大田市に訪れる日がやってきました。

ここから3人と特に造りたかったのは、空間です。初めてお邪魔する音楽室を、まるでホームのように、言うなれば自分の家に招き入れるような場所に変える。子ども達がいつもの音楽室に行き、知らない人達がそこに来る、これでは面白くない。空間を造り、お招きして遊ぶわけですよ（飾り付け等をするわけではないです）。6月のキャンプの時にふと思いついて、3人に出来るだけ離れて演奏してもらったんです。これがなかなか良くて、部屋の空気が一気に変わったんです、気が通い合うというかめっちゃええ空気です。子ども達を音楽の世界に連れて行ける音、心の扉を開けに行ける音・空間は、これだと思いました。可能性をすごく感じました。3人の感性や意識も高く、又これを遊び感覚で楽しんでくれたのが良く、音楽室をホームにし、子ども達をお招きする、そんな空間が少し造れるようになりました。少しこなれてきて、ん？と思った事が一度あり、そおいう心では駄目なんだよーと言った事がありましたが、3人が造る45分は、本当に素敵なものになったと思います。ここから、スタートですネ！

コンサートに関しては、僕は只々楽しませて頂きました。

ピアノトリオーレが魅力的になり輝いていったのは、島根県民会館の皆さん・益田市の皆さん・大田市の皆さん・地域創造の皆さんの温かいサポートがあつての事でした、本当にありがとうございました。ピアノトリオーレが益々素敵に、そして島根県のアウトリーチが地域の子ども達の未来を造っていく事を期待しています。

島根県は東西に230kmの距離を有し、県東部の出雲、西部の石見、そして隠岐の三地方に分かれる。アーバン・サクソフォン・カルテットは、出雲地方の奥出雲町、石見地方の浜田市に訪れた。事業をご担当いただいた奥出雲町の和久利さん、浜田市の川神さんは、ともに幼稚園での教員のご経験があり、人懐っこさの中にも主張すべきことは明確に伝えてくださるお人柄。また、アウトリーチにおいては、アーティストが何をしようとしているのか、子どもたちがそれをどのように受け取っているのかを非常によく見てらっしゃり、そして第三者の立場で双者のやりとりについての整理をされているようにお見受けした。幼稚園でのご経験がなせる技であり、お二人にはアウトリーチを見る視点についてたくさんのお話を教えて頂いた。

奥出雲町は人口1万4千人ほどで、岡山県に接した山間にあり、温泉や豊かな農作物、たたらや工芸品のそろばんなど、自然の恵みと人間の手技に生まれ、神々しいという形容がおおげさではない風情がある町である。

7月。例年は避暑地のごとく過ごしやすい土地柄だそうだけれど、私たちが訪れた8日～13日は湿度が肌にまとわりつく酷暑であり、アウトリーチ先の小学校では扇風機を総動員してもらい、多大なご協力を頂いた。

今回訪れたのは、町の北西部の布勢小学校、北東部の亀嵩小学校、南東部の八川小学校の計3校で、いずれも1学年が10名前後の小さな規模の学校であった。小規模校でよく感じることに、全ての子どもたちが先生をはじめ地域の大人たちに見守られていることを無意識に受け止めているのではないだろうか？ということがある。年上の者が年下の者を守り、育てるということが、学校生活の中、引いては地域社会の中に自然に根付いているように思う。ふと立ち寄った道の駅で出会ったおじさんが、町の全小学校名を言えるというエピソード然り、奥出雲町でもそのことを強く思った。そんな中、とある小学校の昇降口に貼ってあった「自分の命は自分で守る」には先生方の優しさ故の厳しさを伝えようとする一際の実感があり、子どもたちに対する深い愛情を感じた。

浜田市は人口6万人の石見地方の中心都市であり、日本海に面した水産都市でもある。歯に衣着せぬ物言いが心地よく、思いつくままの相談ができる、ざっくばらんで気負い不要の町であった。また、松江よりも広島市内への移動が距離的に近く、直通の高速バスが出るなど交通の便も良いため、週末のショッピング等は県外に出ることもあるそうで、町全体に漂う活動的な雰囲気につながっているように感じた。

浜田市で本番を行うのは9月中旬であるが、約2ヶ月前の7月下旬、山陰の日本海のイメージとはほど遠い真っ青な海を眺望できる時期に下見に伺った。夏休み最中の三階小学校、長浜小学校、浜田東中学校と、いずれも市の北西部にある学校にお邪魔して、先生とお話しし、会場を見せて頂いたりした。どの学校の先生方も、なじみの薄いサクソフンの四重奏を通して子どもたちにどのような体験を与えられるのか、というところに興味や不安を持ってらっしゃった様子が伺えたのだけれど、奥出雲町での本番を経ての下見だったこともあり、子どもたちに単に音楽を聴いてもらうだけではなく、想像力をフルに働かせてもらいたい内容であることをアーティストの口から明確にお伝えできたことは、事前の打合せとして非常に有意義であったと思う。

今回アーバン・サクソフォン・カルテットが取組んだアウトリーチプログラムは、彼らにとって、挑戦の連続であったように思う。アウトリーチが終わるたびに彼らが考えたのは、流れがうまくいったか？演奏がうまくいったか？ということだけではなく、子どもたちとどれだけつながれたか？ということが大きくあったように思う。

うまくいかず、落ち込むこともあったけれど、子どもたちからもらったお花や野菜を大事に大事に持って帰る彼らの姿に、奥出雲町と浜田市で得たものを次に出会う方々へと届ける使命感が見えた。今後、様々な土地で縁を結び続けていくであろう彼らの活動の活力源がこの事業で出会った人々であることは間違いない。

アシスタントコーディネーターレポート

丹羽 梓

9月の益田市公演の入り日から10月の大田市公演終了までがわずか19日間という短期間で一気に島根を駆け抜けたピアノトリオーレ。アンサンブルとしてもスタッフを含めたチームとしても濃密な19日間となった。

9月の後半に訪れた益田市旧美都町。豊かな自然と温かい町の皆さんに迎えられ、小学校2校でのアウトリーチとホール公演を行った。

ホールのある美都町の小学校は都茂小学校と東仙道小学校の2校。美都町内の小学生全員にアウトリーチを届けられるよう、ホール職員の塩満さんがスケジュールを組んでくださった。

3日間共、午前中に東仙道小学校、午後に都茂小学校に通い、1日目は1、2年生、2日目は3、4年生、3日目は5、6年生へのアウトリーチを行った。3日間同じ小学校に行くことで子どもたちに顔を覚えてもらうことができ、どんどんアーティストと子どもたちの距離が近くなっていった。アウトリーチ最終日には6年生から学校を代表してお礼の挨拶があり、「学校」と「アーティスト」のつながりを感じることができた。アウトリーチはその施設に1回しか行くことができない場合が多いが、今回は塩満さんのアイデアと立地条件がよかったことで3日間同じ小学校に通うことができた。子どもたちにとってもアーティストにとってもより深いつながりができたのではないかと思う。

続いて大田市。現地入り予定日に大型の台風が日本を縦断し、行程を変更するアクシデントに見舞われたが、何とか予定日に大田市入りすることができた。

アウトリーチ先は小学校3校。益田市と異なり大規模校での実施となったので子どもたちの人数が多く、ピアノの下に入って演奏を体験する場面では全員が入ることができないこともあったが、順番に入ってもらったり、ピアノの側面を触ってもらったりするなどアーティストは臨機応変に対応していた。

どの学校の先生も子どもたちと一緒にピアノに触ったり、メモをとったりするなど積極的に参加する姿が印象的だった。ホール職員の林さんが事前に先生に頻繁に連絡を取り、よい関係作りをしてくださったおかげで先生方の雰囲気がとても温かかったのだと思う。

益田市のふれあいホールみと、大田市の大田市民会館どちらのホールにとってもクラシックコンサートはほとんど実施してこなかったため、コンサートでの集客が心配されたが、アウトリーチ先の子どもたちや先生が多く来場してくれた。ホールを満席にする程の集客とはならなかったが、どちらの公演もピアノトリオーレの3人の人柄の良さとお客さんの気持ちが一体となった心温まるコンサートとなった。

人口も環境も異なる2つの市でのアクティビティ&コンサート。アーティストにとってはなかなかハードだったと思う。しかし6月のキャンプから公演まで何度もアーティストが島根に足を運ぶうちに島根に対する愛着が生まれ、担当者との関係をより深いものにすることができたことで、困難な状況をも団結力に変え、益田市・大田市でしかできないアウトリーチをすることができた。

今回の島根セッションでは、島根県民会館をはじめホール職員の皆さんが常に温かい目でピアノトリオーレを迎え、見守ってくれたことで、3人の魅力がどんどん引き出されていった。スタッフとアーティストの距離がぐっと近づき、それぞれの想いをぶつけ合いながらよりよいものを創ろうと一つになれた濃密で感動的な時間だった。

縁結びの国、島根。まさに音楽が人の縁をつないだ島根セッションだった。

《島根セッション》

「公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業 島根セッション」は、平成25年から2か年の事業として実施。参加市町は島根県内19市町のうち、奥出雲町・大田市・浜田市・益田市の4市町が開催することとなった。

《当事業の成果》

- ・2年間のうち、1年目に研修プログラムとしてアウトリーチについてのシンポジウムを開催。実際に当事業を進めるにあたり、事前のシンポジウムにてアウトリーチに関する研修があったことで、市町ホール職員をはじめとして県内でアウトリーチ活動に関心のある方々にアウトリーチ及び当事業の取り組みの意義が理解されるきっかけとなり、4市町の参加につながるよいスタートとなった。
- ・2年目の6月にキャンプ（アウトリーチ研修）を実施。コーディネーターの助言を受けながら、アーティストがアウトリーチプログラムを作る過程に参加できたことで、アーティストがどのような部分に気を付け、配慮しているかを知ることができた。当財団ではこれまでもアウトリーチを実施していたが、主に学校とアーティストを繋ぐコーディネート業務と当日の運営業務であったため、プログラム作りから参加できたことは、プログラムの具体的なイメージを参加市町担当者と共有することができ、共に事業を進めていく上で単にアーティストの派遣だけではない深みのある連携に繋げることができた。また、今後のアウトリーチ事業を行う上でも学校等での打ち合わせで活かすことのできる経験となった。
- ・間接的な成果だが、市町での実施時にアーティストの滞在が地域住民に認知されたことも当事業の成果といえる。一定期間実施市町に滞在しながら学校へ訪問することで、子どもを中心に保護者や地域の大人たちにも少しずつ認知されるようになり、学校外で行われる通学合宿への参加や、アーティストが知り合った地域住民から楽器をいただくなどの交流も見られた。各市町で行われた最終日のホールコンサートでは、アーティストの皆さんが地域の魅力を盛り込んだ話をしてくれたことで、来場者から「地元の魅力を改めて感じられた」という感想も多くあり、当事業のアウトリーチからコンサートという一連の流れにより、アーティストによって学校だけではなく地域に新しい風がもたらされたのも当事業の成果と考える。人口減少や過疎化が進む当該地域によって若いアーティストと地域住民との交流が生まれることは、改めて地域の魅力を再認識する機会に繋がり、文化芸術分野での取り組みならではの成果であるため、これを単年度だけではなく継続した取組に繋げていけるような計画を今後も進めていきたい。

《課題》

- ・県の財団としてアウトリーチ終了後にふりかえりの作業を実施市町の担当者・関係者、学校としっかり行うことが必要だと感じた。今後はこの事業によって生まれた連携の継続やアウトリーチの理解、効果の増大のために実施前後の意見交換を県内の関係者で行える場を作っていくことが大切だと考える。
- ・鑑賞を主としたアウトリーチとは異なり、少人数での体験・創造型の内容はコーディネートを行う上で視点の幅が広がったと同時に、全校児童での鑑賞を希望する学校も少なからずあるため、ニーズの把握とすり合わせが必要であり、教育現場と協働して子どもにとって有意義な時間にするための調整を行う必要がある。

《今後の取り組みについて》

- ・これから積極的にアウトリーチ事業を取り組んでいきたいという市町もあることから、まずは当事業で深まった各市町との連携を継続し、情報共有・協働を行っていく。
- ・現在、島根県内においては様々な団体がアウトリーチを展開している。それぞれに切り口や視点の違いはあるが、子どもたちにとって有意義な取り組みにするという目的に大きな違いはないため、今後は劇場・公共ホールの視点を持ちつつ、教育分野や地域団体、地元演奏家と連携しながら島根県らしいアウトリーチの実施を目指していきたい。

《所感》

今回の島根セッションを通じて、アーティストが一定期間地域に滞在し、アウトリーチと地元のホールでコンサートを行う地域密着型の内容は、子どもや地域住民への鑑賞・体験の波及効果がより高いものと感じた。一方で今後継続した取り組みにするためには、運営面で予算や人員の問題もあるため市町が独自で受け入れ、開催するのは難しいという現実もある。島根県は東西に長く、今回は当財団内部においても東部の島根県民会館と西部の島根県芸術文化センター「グラントワ」にも担当者を立て実施市町と連携したことから、今後も県の財団と市町ホールとの繋がりを強め、情報共有を行うことでより効果的な取り組みを行っていきたい。島根セッションは11月16日のガラコンサートをもって終了したが、当事業で得た知識と経験を活かすためにも終了したこれからは本当のスタートだと感じている。

第5部
平成26年度公共ホール
音楽活性化政令指定都市
アウトリーチセミナー事業

平成26年度公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業 実施概要

1 趣旨

一般財団法人地域創造は、市町村等で実施してきた公共ホール音楽活性化事業で蓄積したノウハウを活かした事業を政令指定都市に普及することを目的として、政令指定都市等との共催により、公共ホール等を拠点としたクラシック音楽の演奏家による地域交流プログラムに関する研修会等を実施する。

2 実施内容

(1) 実施団体

公益財団法人堺市文化振興財団／堺市

(2) 事業内容

実施団体は地域創造と共同して次の事業を実施する。

① 研修会プログラムの策定

実施団体は、地域創造が派遣するアドバイザーと共同して研修会プログラムを策定する。

② 研修会等の開催

実施団体は、当該市内及び周辺地域の公共ホール職員、文化行政担当者、教育関係者及びアーティスト等を対象とした、地域交流プログラム並びに文化・芸術による地域づくりに関する研修会等を開催する。

3 経費負担

研修会等の実施に係る経費のうち、対象経費について、30万円を限度として地域創造が負担する。

ただし、下記以外の現地移動費やその他の諸経費及び実施団体が前項に定める内容を超えて事業を行った場合に発生した超過分については、実施団体の負担とする。

4 事業実施に対する支援

(1) アドバイザー等の派遣

地域創造は、研修会プログラムの策定・研修会等の実施にあたり、地域の芸術活動に詳しい専門家を派遣する。

アドバイザー等の派遣は、研修会プログラム策定(2回程度)と研修会等実施時に行うことができる。

(2) 講師の派遣

地域創造は、地域の芸術活動に詳しい専門家やアウトリーチに積極的に取り組むアーティスト等を講師として派遣する。

5 主催・共催等

主催：公益財団法人堺市文化振興財団／堺市

共催：一般財団法人地域創造

制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

6 アドバイザー

児玉 真 (一般財団法人地域創造プロデューサー、
いわき芸術文化交流館アリオス チーフ・プログラム・オフィサー)

7 事業の流れ

年度	時期	内容
平成 26 年度	5月30日	研修会プログラムの策定
	10月10日	アーティスト研修会 (堺市立市小学校、堺市総合福祉会館)
	2月27日	アウトリーチセミナー (堺市総合福祉会館)

平成26年度 公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業 アーティスト研修会

日程：平成26年10月10日（金）

会場：堺市立市小学校、堺市総合福祉会館

参加者：7名（アーティスト4名、オーケストラ事務局2名、教職員1名）

プログラム：

時間	タイトル	講師	内容	会場
10：30～11：15	モデルアウトリーチ 見学①	加藤 直明 大室 晃子	小学校でのアウトリーチを見学，子どもたちとのやり取りや反応を見る。	市小学校6年生 (1クラス目)
11：35～12：20	モデルアウトリーチ 見学②	加藤 直明 大室 晃子	小学校でのアウトリーチを見学，子どもたちとのやり取りや反応を見る。	市小学校6年生 (2クラス目)
	休憩・移動			
14：00～14：45	アフタートーク	加藤 直明 児玉 真	アーティストに，アウトリーチプログラムの作り方，企画意図などを聞く。 参加者の質疑応答に答える。	堺市総合福祉会館
14：55～15：10	アウトリーチの概念	児玉 真	アウトリーチの定義、基本的な概念、目的を理解する。	堺市総合福祉会館
15：10～16：00	意見交換会	進行： 山本 若子	アンケート結果を踏まえ、参加者同士でアウトリーチについての意見交換をする。	堺市総合福祉会館

講師：

加藤 直明（トロンボーン奏者・「公共ホール音楽活性化支援事業」登録アーティスト）

大室 晃子（ピアニスト）

児玉 真（一般財団法人地域創造プロデューサー、

いわき芸術文化交流館アリオス チーフ・プログラム・オフィサー）

山本 若子（有限会社N.A.T取締役、公共ホール音楽活性化事業コーディネーター）

研修会の様子：



平成26年度 公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業 アウトリーチセミナー

日程：平成27年2月27日（金）

会場：堺市総合福祉会館

参加者：45名（公共ホール職員14名、文化行政担当者10名、アーティスト9名、
音楽関係者（オーケストラ事務局等）7名、教職員2名、その他3名）

プログラム：

時間	タイトル	講師	内容	会場
13：30～15：00	ゼミ① アウトリーチから始 まる地域の活力創出	吉本 光宏	アートが現代の社会的課題と向き合う ことで、地域にもたらされる活力とこ れからの可能性を探る。	福祉会館 第3研修室
15：10～15：55	ゼミ② 体験！模擬アウトリ ーチ	大森 智子 白石 光隆	学校等で行われているアウトリーチを 実際に体験する。	福祉会館 ホール
16：00～17：00	ゼミ③ アーティスト・トー クセッション	山本 若子 大森 智子 白石 光隆	アーティストに、アウトリーチプログ ラムの作り方、企画意図などを聞く。 参加者のアウトリーチに関する疑問・ 課題などの質問に答える。	福祉会館 ホール

講師：

吉本 光宏（株式会社ニッセイ基礎研究所 研究理事〔社会研究部 芸術文化プロジェクト室長〕）

大森 智子（ソプラノ歌手・「公共ホール音楽活性化支援事業」登録アーティスト）

白石 光隆（ピアニスト・「公共ホール音楽活性化支援事業」登録アーティスト）

山本 若子（有限会社N.A.T取締役、公共ホール音楽活性化事業コーディネーター）

研修会の様子：



■セミナーの内容についてお聞かせください。

「とても良かった」と回答

- ・ 1月13日より赴任した学校で音楽専科として
- ・ 実演を見て
- ・ 普段できない体験ができ興味深かったです
- ・ アウトリーチ最前線の方の公演とお話できて良かったです。
- ・ 自分が体験できて良かった。皆さんのご意見も聞けて参考にしたい
- ・ 各国のアウトリーチ事情を知ることができた。
- ・ 日常の事業を客観的に振り返ることができた。
- ・ よくわかった
- ・ 模擬アウトリーチ大変楽しませていただいた。
- ・ 関心の高いところを確認できた。
- ・ より身近に感じアーティストの意見が聞けた。
- ・ 参加者が様々でたくさんの面の意見や質問回答が有り参考になった。
- ・ 大森さんの指導
- ・ 知ること体験することが出来てとても参考になりました。
- ・ お2人に最初から魅き込まれました。
- ・ アーティストの方の生の声がきけたので
- ・ 参考になった
- ・ 解説に先生からの考えにとってもよい勉強になった

■セミナーの開催時期等についてお聞かせください。

【開催時期】 2、3月は年度末の業務が多い為文化団体の私としては12、1月のほうが他の職員も参加しやすいと考えます

【講義時間】 90分を2回にわけけるなどしてほしかった（集中力がとぎれてしまう）

【講義時間】 ゼミ1の時間がもう少し欲しかったです。

■ 今回の授業について要望や今後開催してほしいセミナー等

- ・ 同じ様な内容で学校の先生、ホール関係者等 現場の言葉、現状を知りたい。
- ・ アートを活かしたまちづくりの活性化
- ・ このような感じで演劇のセミナーもお願いいたします。市民劇団に関すること。
- ・ グループとしてのアウトリーチセミナーの開き方
- ・ ワークショップについて
- ・ 第2回目を希望します
- ・ アウトリーチの事業を定期的に行ってほしい

■ その他ご意見・ご感想

- ・ 学校関係者がもっと来たらよいと思う
- ・ 大変勉強になりました
- ・ 山本さんとのトークセッションをもっと聞きたかったです。質問受付コーナーではないと思います。フレイヤーにトークセッションと書いた以上20分でもトークセッションしてほしかったです。
- ・ 今日うかがうことが出来て良かったです。今後の事業展開にいかせればよいと思います。ありがとうございました。
- ・ 音楽と教育・福祉の面とのかかわりなど今後の展開が楽しみな発見があり良かったです。
- ・ とてもいい機会でした。ありがとうございました。自分自身の活動を見直しアウトリーチ活動にもっと意味を見出してやっていきたいと強く感じました。
- ・ 良い体験をありがとうございました
- ・ 模擬アウトリーチもあり実際に体感することでアウトリーチを学べたと思います。

担当者の意見・評価

公益財団法人堺市文化振興財団事業課 谷村 睦
堺市文化観光局文化部文化課 四方 徳子

① 研修会のねらい

今年度より開始した「さかいアートスクール」（市内小・中学校への芸術家派遣）の実施にあたり、派遣者及び学校現場の関係者に対し、本事業の関心を高め、意義や効果などの理解を深めていただくために実施。

② 企画のポイント

実際の経験豊かな芸術家によるアウトリーチの現場を参考に、プログラム構成や実施するにあたってのポイントなどを踏まえた、実践向けの内容とした。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

当初、関係者向け（指導者向け）の講習会・研究会についてのノウハウがないため、事務が進まなかった点。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

地域創造のコーディネータより具体的なアドバイスなどをいただけたため、実現に至った。

⑤ 研修会を実施しての成果

さかいアートスクールの講師となる楽団員や若手アーティストが関心を高め、実際にプログラム構成に活かしていたこと。

⑥ 研修会を実施しての反省点・課題

当日、機器のトラブルにより、講師ならびに聴講者の方々にご迷惑をおかけしたこと。

⑦ 今回の研修会を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

本物の「音楽」を届けることが「音楽」ファンをつくり、将来的にホールや「芸術のまち」といったイメージアップによる都市の魅力向上に繋がることを再認識した。事業の継続性が重要であると考えている。

新たにはじめる音楽アウトリーチの事業というのは、なかなか難しいものがある。地域創造が公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）をはじめた頃も同様だったが、演奏家が学校や施設を訪れて演奏する、ということは以前から行われていて、みんなが喜んでくれている、という反応を経験しているため、関係者がそれなりに「あれはこういうものだ」と認識をしていることが、却って何もないところから始めるよりも難しさを感じることもあるのである。しかし、おんかつをはじめた頃から見ても、近年の音楽アウトリーチは、他ジャンルのアウトリーチ活動の影響もあり、その目標に対する考え方も手法もずいぶん変化、進歩してきていると思える。今回はそれをお伝えできればと思ってプログラムを考えてきた。

堺市が学校へのアウトリーチ事業を本格的に始めるという話は、去年の早春、たまたま関西に講義をしに来たときに他の文化施設の担当者の方から聞いた。そのときに思ったのは、折角やるのであれば、初めのうちから、会館もアーティストも学校もその社会的な意義を明確にし、プログラム作りの意識を（アーティストの個性が大事な「内容」ではなくて意識付けの問題）共有してはじめることが成功への道程であろうと思い、研修事業の開催を勧めた。

今回の窓口になった市と、すでに一定の事業経験のある財団との話し合いでは、すでにスケジュールがかなり動き出していることから、当初考えていた「事業が本格的に始まる前に研修を」というのは実現できなかったけれども、10月と2月の2回の研修会では、地域創造のもつ最大限のアウトリーチのノウハウを持った演奏家の実践を紹介でき、話を聞いて頂けたのではないかと考えている。

10月の加藤直明さんの学校アウトリーチでは、彼が一番手の内に入ったプログラムを行うところを見て頂いたあと、プログラムの解析（アナリーゼ）をすることで組み立ての発想を伝え、そのあとの意見交換ではそれぞれの方の状況に合わせて、山本若子さんに話をまとめて頂いた。また2月の研修では、アウトリーチの根幹である社会との接点をどう考えていくかという話を吉本光宏さんにして頂くとともに、日常的な声との差異が子供にどう聞こえるのかという心配を考え、大森智子さんに模擬的にプログラムを行って頂いた。

もっと具体的なノウハウが欲しいという方も居たかもしれないが、アーティストが行うプログラムにはその人の個性が強く表れるものだ。オリジナリティを重視し、一人として同じではない、というのは芸術家であることの証のようなものである。考え方のコアになる部分と、そこに至る道筋のようなものが聞く人に伝わることを今回の目標にしていたので、それが上手く伝わってくれていれば幸甚である。